

ジョージ・オーウェルの作品における本能の働き  
—オーウェルはいかにしてディーセンシィを守ろうとしたのか—

文学研究科 英語英米文学専攻

L13D019 田辺翔平

## 目次

序論	1.
第1章「道徳的な本能」	12.
1. オーウェルのエゴイズム	12.
2. 『カタロニア賛歌』におけるディセンシイ	17.
3. 社会規範に本能的に従う問題	20.
第2章「真実を求める本能」	30.
1. オーウェルの信仰	30.
2. オーウェルにとっての歴史	38.
3. 機械が悪用される問題	41.
第3章「自己保存の本能」	49.
1. ト라우マを解消しようとする心理	49.
2. 生まれ変わったという錯覚の危険	53.
3. 死に対する拒絶	57.
第4章「依存する対象を求める本能」	67.
1. 中庸の精神	67.
2. 飲酒への依存	72.
3. 人から理解されたいという心理	80.
第5章「判断する本能」	87.
1. 人々が権力を欲する動機	87.
2. 意識を伴う言葉の必要性	92.
3. 本能への過信によって築かれる社会	99.
結論	110.
註	115.

参考文献 .....119.

Abstract .....125.

## 序論

ジョージ・オーウェル (George Orwell, 1903-50) は彼が晩年に執筆した『1984年』(*Nineteen Eighty-Four*; 1949) と『動物農場』(*Animal Farm*, 1945) を通して、全体主義を批判した政治的な作家として一般的に知られている。『1984年』がアメリカで出版された際に、オーウェルは全米自動車労働組合に宛てた手紙「フランシス・ヘンソンへの手紙」(Letter to Francis A. Henson', 1949) の中で、『1984年』とは社会主義を批判したものではなく、そこで描いた世界が現実起きるとは考えていないが、起こる可能性があるとして述べている。さらに彼は、中央集権化された経済の逸脱した状態と、知識人の間で蔓延しつつある全体主義思想が行き着く論理的な結末を描こうとしたと述べている (*CEJL* vol. 4 502)。ジェフリー・メイヤーズ (Jeffrey Meyers, 1939-) の著書『オーウェル入門』(*A Reader's Guide to George Orwell*, 1975) によると、『1984年』の批評においては、アーヴィング・ハウ (Irving Howe, 1920-93) の主張に代表される、この小説は未来の「悪夢的光景」を描いたものであるとする批評が中心となっている (144)。ハウの著書『政治と小説』(*Politics and the Novel*, 1957) で指摘されているように、『1984年』の世界では個性を持つことが犯罪となる点や、全てのものが政治の一部となる点といった、そこで描かれた社会の異質性を指摘する研究が、『1984年』に重点を置いた批評において中心を占めている (237-38)。

その一方で、オーウェルの作品全般に関する研究においては、オーウェルが追い求めたディーセンシィについての書評が数多く書かれてきた。オーウェルはルポルタージュ作品『カタロニア賛歌』(*Homage to Catalonia*, 1938) において自身がスペイン内戦に義勇兵として参加した理由について、“If you had asked me why I had joined the militia I should have answered: ‘To fight against Fascism,’ and if you had asked me what I was fighting for, I should have answered: ‘Common decency.’” (188) と述べており、オーウェルは自分が戦う動機はコモン・ディーセンシィの為であると明言している。ここでオーウェルは「共通の」(“Common”) という表現をディーセンシィに付け加えており、あらゆる人間の持つ普遍的な感性としてオーウ

エルはディーセンシイを認識している。スペイン内戦に限らず、執筆活動を通してこのディーセンシイを守ろうとしたとこれまでのオーウェル研究において考えられてきた。このディーセンシイという認識についてオーウェルは評論「イングランドの人々」(‘The English People’, 1947) の中で次のように述べている。

The English people are not good haters, their memory is very short, their patriotism is largely unconscious, they have no love of military glory and not much admiration for great men. They have the virtues and the vices of an old-fashioned people. To twentieth-century political theories they oppose not another theory of their own, but a moral quality which must be vaguely described as decency. (*CEJL* vol. 3 12-13)

ここでオーウェルはイギリス人を分析し、古風な人間の徳と悪徳の二面性を合わせ持ち、20世紀の政治理論に対して別の理論を提示するわけではなく、ただ漠然とディーセンシイと呼ばれている道徳心を持ち出す民族であると述べている。オーウェルも一人のイギリス人としてディーセンシイの道徳心を大切にしていた一方で、彼自身がそれを「曖昧に表現されるに違いない」(“which must be vaguely described”) と述べているように、オーウェルは著書の中でディーセンシイの定義を自ら明確に述べてはいない。その為、彼の死後、多くの評論家によってオーウェルにとってのディーセンシイとは何であったのかについて、独自の定義が行われてきた。

まずディーセンシイ (decency) という用語の辞書による定義では、『オックスフォード英語辞典』の第2版 (*Oxford English Dictionary* 2nd ed., 1989) において示されている現在でも使われている用法は次の定義である。

3. Propriety of behaviour or demeanour; due regard to what is becoming; conformity (in behaviour, speech, or action) to the standard of propriety or good taste.

- b. *esp.* Compliance with recognized notions of modesty or delicacy; freedom from impropriety.
- c. Conformity to the standard of living becoming one's position; respectability.

これによると、行いやふるまいの礼儀正しさと適合すること、無作法ではない節度ある概念に従うこと、道徳的に立派な生活の基盤と調和すること、であると意味が定義されている。

その一方でメイヤーズは『オーウェル入門』において、“Like Solzhenitsyn, Orwell was the conscience of his age, and his whole life was a struggle against barbarism and for what he called ‘comparative decency’: a sane, clean, friendly world, without fear and without injustice.” (11) とオーウェルを評している。ここでメイヤーズは、オーウェルのディーセン

シィを、正気で潔白な世界と同一視している。メイヤーズはこのディーセンシィに「比較的」 (“comparative”) という用語を付け加えており、ディーセンシィの感覚をその比較の基準となるディーセンシィの感覚とは対照的な不正が行われている社会をオーウェルは描くことで、ディーセンシィの感覚を明確にしようとする意図をオーウェルは持っていたことが、メイヤーズのこの定義から読み取れる。この定義では、オーウェルはディーセンシィの道徳を個人的なものに限らず、社会的なものとして捉えている点に特徴がある。『オックスフォード英語辞典』の定義では、個人的に節度ある振る舞いを行うことにディーセンシィの重点が置かれていたが、メイヤーズのオーウェルにとってのディーセンシィの定義では、ディーセンシィの対象が社会的な道徳にまで拡大されている。これと同様に、オーウェルと親交があったトスコ・ファイヴェル (Tosco Fyvel, 1907-85) は著書『ジョージ・オーウェル—ユダヤ人から見た作家の素顔』 (*George Orwell: A Personal Memoir*, 1983) においてオーウェルのディーセンシィについて次のように述べている。

The dilemma was that with Hitlerism and Stalinism, with two world wars and the nuclear arms race, an end had unmistakably come to that optimistic belief in man's

inevitable progress, about which he had still read and been taught in early youth. . . . And so, in this dilemma, he called for the practice of the only possible virtues which he thought were possible in our time. He called for the reassertion of belief in personal freedom of speech; for the use of precise, truthful language in politics; for the equality of all citizens before the law; above all, for common decency and compassion in the conduct of political affairs. (208-09)

ここでファイヴェルは、二度の世界大戦を経験した当時において、人類の進歩を楽観的に信じる時代はすでに終わってしまったという意識があった当時の時代背景に言及し、その為、特に政治的なことに関してディーセンシィの道徳心と思いやりの心をオーウェルは求めていたとファイヴェルは考えている。ここでもディーセンシィが社会的な道徳と同一視されたものと考えられている。

さらにジョージ・ウッドコック (George Woodcock, 1912-95) は著書『水晶の精神—ジョージ・オーウェル研究』 (*The Crystal Spirit: A Study of George Orwell*, 1966) の中で、オーウェルについて “Moral concepts like honor and decency were extraordinarily important to him, and he never supported either the Marxist view that human motivations are entirely economic or the Freudian view that they are entirely biological.” (138) と評している。ここでウッドコックはオーウェルのディーセンシィの感覚について、人間の動機が経済的なものであるというカール・マルクス (Karl Marx, 1818-83) の見解も、また人間の動機が生物学的なものであるというジークムント・フロイト (Sigmund Freud, 1856-1939) の見解とも、相いれないものであったと考えている。ここからオーウェルは社会主義者という一面を持つ一方で、マルクス主義やフロイト主義といった特定の主義と異なる独自の思想をオーウェルは抱いていたとウッドコックは考えていたことが読み取れる。また、ウッドコックは、オーウェルは19世紀が理想的な世界だったとはどこにも言っていないと注を入れた上で (239)、オーウェルが描くディーセンシィが達成されている社会が過去の19世紀頃のイギリスに限定されていると

考えており、その点について次のように考えている。

It was, above all, a world where absolute concepts of good and evil still had meaning, where right and wrong were distinct and sharply defined.

One is struck immediately by the limitations of this world. It is England. It is the age from about 1830 to 1914, with a fraying remnant surviving into the 1940's. And what attracts Orwell to it is a peculiar combination of Christian and liberal virtues, or, to be a little more concrete, of a well-established code of fair behavior with a recognition—however inadequately implemented—of liberty as a natural human right. (240)

ここでウッドコックは、イギリスの19世紀の時代は善悪についての絶対的な概念がまだ意味を持っていた為、キリスト教的美德と自由主義的美徳が独特な形で成り立っていた点を指摘している。そしてウッドコックは、オーウェルのディーセンシイの感覚に、このキリスト教的美德と自由主義的美徳 (“Christian and liberal virtues”)、さらに生来的な人権 (“a natural human right”) の意識を含めている。その上で、ウッドコックはオーウェルの試みについて、“Rather he enlarged the simple code of decency of a middle-class liberal into a rough-and-ready morality, extending it politically to include the basic elements of democratic socialism.” (285) と述べている。ここでウッドコックは、オーウェルが執筆活動によって行ったことは、彼が持つ中産階級としてのディーセンシイの単純な慣習を、政治的なものにまで大まかに拡張したことだったと結論づけている。つまり中産階級としての個人が持つキリスト教的美德、自由主義的美徳、生来的な人権意識が政治に取り入れられることをオーウェルは目指したと、ウッドコックは考えていたことが読み取れる。また、佐藤義夫 (1948-) は著書『オーウェル研究—ディーセンシイを求めて』 (2003) の中で先行研究をまとめ、さらにオーウェルの著書を分析することで、ウッドコックの導き出したオーウェルのディーセンシ



ィの理念に対して、具体的な裏付けを行っている。オーウェルが『カタロニア賛歌』において明言した自分が戦う動機である「コモン・ディーセンシィ」(“Common decency”)は「人間の誰もがもっている真っ当さ」や、橋口稔(1930-)による翻訳の『カタロニア讃歌』における、「すべての人間を人間たらしめるもの」(53)というディーセンシィの訳が妥当であろうと佐藤は述べている(191)。どちらの訳も「人間の真っ当さ」の要素を重視しているが、これらは「生来的な人権」(“natural human right”)の意識がオーウェルのディーセンシィに含まれているとするウッドコックの立場を踏襲している。そして佐藤は次のようにオーウェルの各小説や評論の中にディーセンシィの道德心が描かれているとしている。『ビルマの日々』(*Burmese Days*, 1934)において西欧人の中で孤立することは致命的なダメージを受けるにもかかわらず、ヴェラスワミー医師(Dr Veraswami)との約束を命がけで守ろうとした主人公のジョン・フローリー(John Flory)の態度、『葉蘭をそよがせよ』(*Keep the Aspidistra Flying*, 1936)においてローズマリー・ウォーターロー(Rosemary Waterlow)の胎内に宿る赤ん坊の命を守る為に、詩人になりたいとする野心を捨てて元の広告代理店に戻る主人公のゴードン・コムストック(Gordon Comstock)の態度、そして『1984年』における主人公のウィンストン・スミス(Winston Smith)が党中枢メンバーのオブライエン(O'Brien)による拷問を受けながらも $2+2=4$ という良識を守ろうとした態度に表れているとしている(44)。この党が押し付ける $2+2=5$ は誤りであり、 $2+2=4$ が正しいと自由に述べられる精神は、ウッドコックの指摘する自由主義的美徳を象徴している。また、佐藤はディーセンシィというのは倫理であり、イギリスの中産階級の人々がごく自然に身につけているもので、オーウェルがディーセンシィの言葉を使うときには、過去の伝統を受け入れ、それを敬う気持ちが働いていると指摘している(186)。中産階級の価値観について佐藤は『葉蘭をそよがせよ』と『牧師の娘』(*A Clergyman's Daughter*, 1935)で描かれる、金に窮しても葉蘭の植木鉢を置く心のゆとりを持ち、教会の礼拝という長い伝統をもつ人間の営みに参加することがディーセンシィなことだとされ、これは中産階級の一つの生き方であり、彼らの価値観であると述べている。さらにオーウェルは評論「イングランドの人々」において、平均的なイギリス人はキリスト教倫理(“Christianity”)を、

“unselfishness” や “loving your neighbor” と定義するであろうと推測しており (CEJL vol. 3 7)、佐藤はこれを根拠に、オーウェルの世界観の中核にはこのキリスト教倫理が存在していると述べている (247)。この指摘は、ウッドコックのいうキリスト教的美徳を表したものである。これらの先行研究をまとめると、オーウェルにとってのディーセンシィとは、キリスト教的美徳、自由主義的美徳、生来的な人権意識の 3 つの要素を含む道德理念が、個人と社会において成り立つ状態と定義できる。オーウェルは全体主義に反対する政治的な作品を書きながらも、ディーセンシィの感覚が彼の作品の根幹であり、彼はその理念を政治の世界に持ち込もうとしたという見方が、オーウェル研究において現在に至るまで主流となっている。

その後のオーウェル研究において、『オーウェル全集』 (*The Complete Works of George Orwell*, 1998) を刊行したピーター・デイヴィソン (Peter Davison, 1926-) により、その中のオーウェルの日記と書簡について、より詳細な注釈が加えられた『ジョージ・オーウェル書簡集』 (*George Orwell: A Life in Letters*, 2011) と『ジョージ・オーウェル日記』 (*Diaries: George Orwell*, 2012) が出版され、オーウェルの日常生活を知る上での顕著な進展があった。また、デイヴィッド・レベドフ (David Lebedoff, 生没年不詳) の著書『同じ人間—愛と戦争におけるジョージ・オーウェルとイーヴリン・ウォー』 (*The Same Man: George Orwell and Evelyn Waugh in Love and War*, 2008) や、ルーク・シーバー (Luke Seaber, 1979-) の著書『G・K・チェスタトンのオーウェルへの文学的影響—驚くべきアイロニー』 (*G. K. Chesterton's Literary Influence on George Orwell: A Surprising Irony*, 2012) が出版され、オーウェルを他の作家と比較して分析を行う研究が盛んに行われた。しかしそれらの研究によって従来のオーウェル像が崩れることはなかった。ディーセンシィを守る為に戦った政治的作家という評価は現在でも変わっていない。

このように、これまでのオーウェル研究においてディーセンシィの概念に関心が払われた一方で、オーウェル文学のもう一つのキーワードであると筆者が考えるオーウェルの作品における「本能」 (instinct) の役割について、いくつかのオーウェルの研究書でわずかに言及されているものの、その数は極めて限られている。オーウェルが執筆した小説の中で、本能という語

が用いられていないのは、動物を比喩としてロシア革命を描いた『動物農場』のみである。この小説のみに本能という言葉が用いられなかった理由として、ここでは動物たちをより人間に近い次元でオーウェルは描いたからであると考えられる。『動物農場』における動物たちは人間と会話することも人間と同様の思考も行うことができる点で実際の動物とは異なっている。そして動物的な性質を象徴する本能という言葉を取ってこの小説で用いないことで、読者に対しこれは人間界の心理を風刺した小説であることをオーウェルは明解にしているのである。オーウェルは『動物農場』においてロシア革命を動物たちの反乱に喩えて風刺しているが、この物語が比喩として成立する背景には、本来、人間とは異なり本能的な生き物であると見なされていた動物に対する人々の認識の変化が影響している。キース・トマス (Keith Thomas, 1933-) は著書『人間と自然界—近代イギリスにおける自然観の変遷』(*Man and the Natural World: Changing Attitude in England 1500-1800*, 1983) において、人間の自然に対する認識の推移を述べている。17世紀において、動物とは人間の為に創造されて本能によって行動する、理性的な人間とは全く別の存在であると認識されていた (19)。そこには動物に対して否定的な概念を抱くことで、逆に人間的な価値を保持しようとする意図があった (34)。しかし、農夫と貧乏人は動物と同じであるといった皮肉を込めた動物のアナロジーや暗喩が日常的に使用された結果、人間と動物は同じ精神の世界に属しているとする新たな認識が強化されていったとトマスは主張している (99)。この歴史的なアナロジーがそのまま動物農場の物語の形式に取り入れられているが、オーウェルは人間の本能的な行動をその他の小説にも描くことに関心を寄せており、『1984年』においては、昆虫などの動物よりさらに低次元の生き物がその世界に住む人間達に対する比喩として用いられている。しかしオーウェルは本能 (instinct) に対しても、ディーセンシィと同様に著書の中で明確な定義を述べていない。

本能 (instinct) という言葉について、『オックスフォード英語辞典』の第2版において示されている現在でも使われている用法は次の定義である。

2. Innate impulse; natural or spontaneous tendency or inclination. Formerly

applicable to the natural tendencies of inanimate things. In modern use associated with sense 3.

3. *spec.* An innate propensity in organized beings (esp. in the lower animals) , varying with the species, and manifesting itself in acts which appear to be rational, but are performed without conscious design or intentional adaptation of means to ends. Also, the faculty supposed to be involved in this operation (formerly often regarded as a kind of intuitive knowledge) .

b. Any faculty acting like animal instinct; intuition; unconscious dexterity or skill.

これによると、自然で無意識な先天的な衝動、一見して理性的に見えるものの実際には無意識な意図による行動に現れる生来の傾向、無意識の能力による直観力、といった定義がなされている。オーウェルは本能を先天的に人が持つものと見なし、無意識の衝動と、無意識の能力による直観力の2つの意味で、本能を用いている。

オーウェルは本能という言葉が作品の中で多用しているが、オーウェルの研究において本能について言及した研究者は数少ない。その中の一人のメイヤーズは『オーウェル入門』において、オーウェルのルポルタージュ作品『パリ・ロンドンどん底生活』(*Down and Out in Paris and London*, 1933) の中で主人公が浮浪者に対して感じた “Seeing him walk, you felt instinctively that he would sooner take a blow than give one.” (151) といった、彼らは殴られる側であると本能的に感じる同情の気持ちは、オーウェルがビルマで現地人に暴力を働いていた体験から直接芽生えていると述べている (74)。また、照屋佳男 (1936-) は著書『ジョージ・オーウェル—文学と政治』(1986) において、オーウェルの自伝的評論「楽しかりし日々」(‘Such, Such Were the Joys’, 1952) で言及されている “the instinct to survive” (*CEJL* vol. 4 361) は、敗北感に釣り合うほど強く、照屋はこれを “an incorruptible inner self” (*CEJL* vol. 4 351) という別の表現と同等のものとして表されている、校長夫妻やいじめっ子に屈しない強靱な内的力をオーウェルは備えていたと指摘している。さらにこの「生き延びようとする本

能」を絶体絶命と思われる状況で頼りにするという側面は、ダニエル・デフォー (Daniel Defoe, 1660-1731) が著書『ロビンソン・クルーソー』 (*Robinson Crusoe*, 1719) や『モル・フランダース』 (*Moll Flanders*, 1722) で描いているイギリス中産階級の美德が源になっていると照屋は述べている。照屋は、その根拠をオーウェルが中産階級出身である為であるとして、この一事が、古き中産階級の美德 (活力、勤勉、義務感、責任感、勇気、愛国心) をオーウェルにもたらしたと主張している (10-12)。このようにこれまでの研究において、オーウェルにとっての本能に対し、他者への同情心や、危機に瀕した際にもあきらめない強靱な精神といった中産階級としての美德から生じたものであるという、ディーセンシィと同一視された評価がなされてきた。

その一方で、オーウェルは評論「絞首刑」 ('A Hanging', 1931) において、彼がビルマに警官として勤務している際に、ビルマ人の死刑囚が絞首台へ連行されている途中、彼が水たまりを避けた行動を目撃した際のオーウェルの心情を次のように述べている。

It is curious, but till that moment I had never realised what it means to destroy a healthy, conscious man. When I saw the prisoner step aside to avoid the puddle, I saw the mystery, the unspeakable wrongness, of cutting a life short when it is in full tide. This man was not dying, he was alive just as we were alive. (*CEJL* vol. 1 45)

オーウェルは、人は死ぬ間際ですら水たまりを避けるという本能的な行動をとることを目撃したことで、その人間がまだ生きているという事実を認識できたとしている。ここでオーウェルは、人が生きているということは、本能的な行動をとることと結びついていることを示している。これは生来的な人権意識を含んでいるオーウェルにとってのディーセンシィを読み解く上で、人の本能的な行動が重要な役割を果たしていることも同時に示している。

さらにオーウェルは評論「象を撃つ」 ('Shooting an Elephant' 1936) において、彼が白人の警官としてライフルを持って、道で暴れていた象の前に立った時のエピソードを述べている。

この象はすでに落ちていた為、彼はこの象を撃ちたくなかったにもかかわらず、周りを取り囲んだ 2000 人のビルマ人の無言の圧力により、白人としての威厳を保ち、彼らから弱腰と見なされて馬鹿にされたくない為、その象を撃ち殺してしまった際の心情が、次のように述べられている。

I perceived in this moment that when the white man turns tyrant it is his own freedom that he destroys. He becomes a sort of hollow, posing dummy, the conventionalised figure of a sahib. For it is the condition of his rule that he shall spend his life in trying to impress the “natives” and so in every crisis he has got to do what the “natives” expect of him. He wears a mask, and his face grows to fit it.  
(*CEJL* vol. 1 239)

ここでオーウェルは、白人は植民地では支配者としてふるまうことを強いられたように、人はその社会的環境の中で自身が置かれた役割を、周囲の無言の圧力によって果たさなければならなくなるという心理を描いている。その状況を、人は仮面をかぶると、顔の方がその仮面に合うようになってくると表現している。もし周りにビルマ人がいなければ殺さずに済んだ象を彼は殺してしまったこの話のように、理性的な個人の判断よりも、社会的環境から生じる何らかの衝動に人は突き動かされているという心理を、オーウェルは克明に著書の中で表そうとしているのである。

従来の先行研究をまとめると、オーウェルは彼の中産階級に基づく伝統的な美德であるディーセンシィを小説の中で描き、『1984年』などの小説で、それを逆境の中でも守ろうとする主人公の様子を描くことで、オーウェルはディーセンシィが成し遂げられる社会を守ろうとしたという評価が導き出せる。しかし「絞首刑」や「象を撃つ」によって描かれた人が持つ無意識的な衝動を、オーウェルは小説の中で本能という言葉で表し、その様々な働きを解明しようとしていた。オーウェルは、作中で本能に対し道徳心としての働き以外にも、様々な働きを持た

せている。これまでのオーウェルの先行研究ではこの本能の役割という重要な要素が抜けているのである。筆者がオーウェルの小説において「本能」という言葉がどのようにつかわれているのかをこれまで分析した結果、登場人物は「道徳的な本能」、「真実を求める本能」、「自己保存の本能」、「依存する対象を求める本能」、「判断する本能」の5つの本能に突き動かされ、無意識的に動く存在として描かれていることが明らかになった。その為オーウェルが描くこれら5つの人の本能の働きを各章ごとに解明することで、従来の研究で指摘されている、キリスト教的美德と自由主義的美徳、そして生来的な人権意識が伴う道徳心としてのオーウェルのデーセンシイの理念が守られる社会をいかにして築くことができるのか、というオーウェルが生涯にわたって取り組んだ問いに対する答えを、本稿において明らかにしたい。

## 第1章「道徳的な本能」

### 1. オーウェルのエゴイズム

オーウェルは執筆活動を行う動機について、評論「なぜ私は書くのか」(‘Why I Write’, 1946)において、自分が賢い人間だと他人から思われたいという真のエゴイズム、外の世界の美しさや言葉の配列の美しさへの美的な情熱、物事があるがままに見て真実を見つけたいという歴史的な衝動、他人の思想を変えて世界をある方向に押ししていきたいという政治的な目的の4つを挙げている(CEJL vol. 1 3-4)。美的な情熱、歴史的な衝動は次章で取り上げる「真実を求める本能」、政治的な目的の衝動は第5章で取り上げる「判断する本能」によってオーウェル自身が突き動かされたと考えられる。オーウェルが最初に挙げたエゴイズムによる執筆動機について、さらに次のようにオーウェルは述べている。

All writers are vain, selfish and lazy, and at the very bottom of their motives there

lies a mystery. Writing a book is a horrible, exhausting struggle, like a long bout of some painful illness. One would never undertake such a thing if one were not driven on by some demon whom one can neither resist nor understand. For all one knows that demon is simply the same instinct that makes a baby squall for attention. (*CEJL* vol. 17)

ここでオーウェルは、全ての作家の執筆動機の奥底には、不可解な物があり、本を書くことは、何かの苦しい病気の長い発作のような、恐ろしい戦いであるとしている。さらにオーウェルは、もしもこの悪魔に追いやられるのでなかったら、人は決して本を書こうとはせず、おそらくその悪魔とは、単純に赤ん坊に注意を引こうとして泣きわめかせるものと同じ本能であると主張している。つまりオーウェルは、赤ん坊が泣きわめくのと同じように、抗えない本能的な衝動に駆られて執筆していたのである。この本能に対しオーウェルは「人が抵抗も理解もできない」 (“one can neither resist nor understand”) と述べているが、彼は小説の中で本能の様々な働きを描くことで、この本能とは何なのかを理解しようとしたのである。

また、ここでいうオーウェルのエゴイズムとは、単純な利己心とは別の物である。なぜならオーウェルは1945年8月17日より『動物農場』を出版し、膨大な収入と作家としての地位を確立しているが、その後の彼の動向は、1945年9月にスコットランドの辺境の地のジュラ島を訪れ、1946年5月23日からその島のバーンヒルにある小さな東屋を借りて『1984年』を執筆するという隠遁生活のようなものであった。BBCの1984年のテレビ番組「思い出のオーウェル」(Orwell Remembered)でオーウェルを個人的に知る人物へのインタビューを編纂して書かれた、オードリィ・コパード (Audrey Coppard, 生没年不詳) とバーナード・クリック (Bernard Crick, 1929-2008) の共著『思い出のオーウェル』(*Orwell Remembered*, 1984)によると、オーウェルがBBCにいたところにオーウェルに出会ったウッドコックは、オーウェルが『1984年』を執筆している1948年に彼に会った際、オーウェルは自分の病状を “a ghastly state” と言ったほどの状況にあったにもかかわらず、治療を受ける為に島を離れることを拒否



し、その前にこの小説を完成させなければならないと言い張っていたとしている。さらにオーウェルは “The effort of doing so didn't make me any better” と言ったと、ウッドコックは回想している (208)。自身には何も良い結果をもたらさないことが分かっているにもかかわらず書かれないオーウェルは、本能的衝動の強さを認識していた。この寒冷の地での執筆活動は結核を持つ彼にとっては苦痛を伴う行為であり、1948年11月初旬に『1984年』を執筆し終えたころには、彼の病状は悪化しており入院生活を強いられる。しかしその死の間近の時ですら彼の執筆意欲は衰えず、彼はイーヴリン・ウォー (Evelyn Waugh, 1903-66) の小説『ブライズヘッド再訪』 (*Brideshead Revisited*, 1945) に関する評論を書き始めており (CEJL vol. 4 512-13)、それが未完のうちに死去することになる。富や名声とは無関心であった彼の人生の動向をみると、彼が執筆動機の第一に挙げたエゴイズムとは、他人のように社会の枠組みに入り込み、家庭と定職を持ち安住に暮らすという平凡な人生を送ることを拒絶するという意味でのエゴイズムであると考えられる。

オーウェルは自身が中産階級に属しているという階級意識が強く、中産階級の伝統的な規範がオーウェルのディーセンシイの根源であるという評価が、序論で述べたようにこれまでのオーウェル研究では一般的であった。しかしオーウェルはアイリーン・オショネシー (Eileen O'Shaughnessy, 1905-45) と1936年6月9日に結婚し、そのわずか半年後の1936年12月23日にスペイン内戦に参加する為にスペインへ向かう行為や、『動物農場』での作家としての生活の後、自然の豊かなジュラ島で隠遁生活を送った事実から見る限り、オーウェルは自分が所属する中産階級的な生活を送ることを拒絶している。これまでのオーウェルの研究において彼のディーセンシイの感覚の源は中産階級としての伝統的な美德であると考えられた背景には、オーウェルと同じく中産階級の生活がテーマである『葉蘭をそよがせよ』で、主人公のゴードンが最終的に作家になることをあきらめて自作の詩を下水溝に流し、定職を得て中産階級としての平穏な家庭を送るという結末の物語を書いたことが関係していると考えられる。葉蘭とは中産階級を象徴する植物であり、主人公は最終的に葉蘭が置かれる生活から逃れられなかったことを暗示している。ゴードンは赤ん坊を墮胎させることはできないという本能的な感情から

作家になる夢を捨てて定職を得て中産階級的な生活を送る決心をするが、これはオーウェルがとった行動とは異なる。オーウェルはあくまで執筆活動を続け、ゴードンとは異なり中産階級的な家庭の安住を得ることはできなかった。ゴードンとは、オーウェルが執筆活動を止めた場合のもう一人の自分を描いた人物であると考えられる。オーウェルは「なぜ書くのか」で主張しているように、作家としての本能的衝動によって執筆に駆り立てられ、オーウェルはこの本能を悪魔と呼んでいるが、この呼称の理由は、オーウェルはこの本能に絶えず駆り立てられた為に、中産階級的な安住を得たくてもできない生活をおくらざるを得なかったことが原因と考えられる。オーウェルにとってのディーセンシイは中産階級としての美德からくるものではなく、作家としての本能的な衝動から生み出されるより普遍的な良心からくるものなのである。その良心から、オーウェルのディーセンシイの感覚が生み出され、彼は執筆活動によってそれを社会において実現させようとしたのである。

オーウェルは評論「文学の禁圧」(‘The Prevention of Literature’, 1946)において、文学とは体験を記録することによって同時代の人々の考え方に影響を与えようという試みであると定義している(CEJL vol. 4 65)。オーウェルは自身の体験を基に、読者の考え方を変えるという意図を持った小説を執筆している。オーウェルの小説は悲劇的な結末のものが多いが、彼は自分の書きたい小説について、「なぜ私は書くのか」において、“I wanted to write enormous naturalistic novels with unhappy endings, full of detailed descriptions and arresting similes, and also full of purple passage in which words were used partly for the sake of their sound.”(CEJL vol. 1 3)と述べている。ここでオーウェルは、不幸な結末を持つ、精密描写と魅力ある比喩が多く、華麗な文の多い長編の自然主義小説を私は書きたかったと述べている。オーウェルはイートン校に通っていたときに、アメリカの自然主義作家ジャック・ロンドン(Jack London, 1876-1916)のロンドンのイースト・エンドの貧民街についてのルポルタージュ作品『どん底の人びと』(*The People of the Abyss*, 1903)を読み、その影響からロンドンの貧民街やイングランド北部の鉱山での現地調査を経て、『パリ・ロンドンどん底生活』や『ウィガン波止場への道』(*The Road to Wigan Pier*, 1937)を執筆した。環境と遺伝の影響を

受けた過酷な現実には登場人物は逆らえず、その描写を包み隠さず描くのがアメリカにおける自然主義文学の特徴である。オーウェルは自然主義小説で登場人物が受ける環境と遺伝の2つの影響のうち、後者の遺伝の要素を本能的衝動に置き換えて彼の作品に取り入れている。オーウェルとロンドンの作品には貧者の現状を客観的に赤裸々に描いているなど内容的に共通する点が多く、オーウェルの作品の多くは、自分の力ではどうすることもできない宿命論に基づく過酷な環境下で生きる人々の苦悩を描いたものである。

彼は評論「リア王、トルストイ、道化」(Lear, Tolstoy and the Fool, 1947)において悲劇作品の意義を述べている。人間が持つ「道徳的要求」とは、善が勝利を得られなかった時の裏切られたという感覚 (“the kind of “moral demand” which feels cheated when virtue fails to triumph.”) を持ち、続けてオーウェルは “A tragic situation exists precisely when virtue does not triumph but when it is still felt that man is nobler than the forces which destroy him.” と述べている (CEJL vol. 4 293)。つまり、悲劇的な内容の小説が持つ意義を、善を打ち破る悪よりも気高いものがこの世に存在することを読者の心に感じさせることであるとオーウェルは考えている。その為オーウェルの小説は悲劇的な結末を迎えながらも、その敗者の側に気高いものが確かに存在したことを読者に訴えかける内容となっている。オーウェルが執筆した最初の小説『ビルマの日々』では、フローリーがエリザベス・ラッカースティーン (Elizabeth Lackersteen) に求婚した際に、彼の顔の痣が原因で結婚を拒絶されて自殺する悲劇を描いているが、フローリーはエリザベスに対して最後に次のように訴えかけている。

‘For the last time. Remember that it’s something to have one person in the world who loves you. Remember that though you’ll find men who are richer, and younger, and better in every way than I, you’ll never find one who cares for you so much. And though I’m not rich, at least I could make you a home. There’s a way of living—civilised, decent—’ (289)

ここでフローリーはエリザベスに対し、自分は誰よりも深く彼女を愛しており、ディーセンシィの道德感が備わった幸福な家庭を彼女の為に築くことができると訴えている。『ビルマの日々』は、一見すると失恋して自殺する負け犬の人生を描いた物語であるが、その一方で人を愛して幸福な家庭を築こうとした気高い精神が、主人公の心の中に存在していたことが強調されている。このようにオーウェルは、この世でたとえ善の精神に基づく行動が失敗に終わったとしても、その価値は無意味なものとは決してならないことを読者の心に訴えかける小説を書き続けたのである。メイヤーズは、『オーウェル入門』において、オーウェルが英文学に与えた意義について、“Orwell’s unique contribution to English literature is a passionate commitment, a radical sincerity and an ethic of responsibility that ultimately transcends his defeated heroes.” (154) と述べている。ここでは敗北した主人公を乗り越える徹底的な誠実さと責任感を伴った倫理がオーウェル文学の意義であるとメイヤーズは考えている。つまり、オーウェルにとっての執筆活動は、それらを読者の心に与える為にオーウェルの本能が導いた道徳的行為であると言えるのである。そしてオーウェルはこの現実の世界で悪に敗れてもなお価値を持ち続ける倫理的なものが存在することを読者の心にもたらすことで、道徳理念であるディーセンシィの心の人々が持ち、それが成し遂げられる社会を築こうとしたのである。その為、様々な道徳的な行動がオーウェルの著作で描かれているのである。

## 2. 『カタロニア賛歌』におけるディーセンシィ

オーウェルはスペイン内戦に参加した体験を、『カタロニア賛歌』と「スペイン戦争回顧」(‘Looking Back on the Spanish War’, 1943) の中にまとめている。オーウェルが敗北したとしても価値を保ち続けると考えている人間の精神を、「スペイン戦争回顧」の巻末の詩の最後のスタンザで比喩的に表している。

But the thing that I saw in your face

No power can disinherit:

No bomb that ever burst

Shatters the crystal spirit. (33-36)

ここでは敗北した側の人間の精神を水晶に喩え、それはどんな権力や爆弾によっても破壊できないと述べられている。オーウェルは『カタロニア賛歌』の結末で、スペインでの体験の全てが、自分が持っているディーセンシィへの信頼を強めたと述べている(186)。メイヤーズは『オーウェル入門』において、『カタロニア賛歌』の核心とは、物語の冒頭でオーウェルは本来敵国であるはずのイタリア人の民兵と握手した場面と、さらに物語の最後でオーウェルを取り調べた将校とも握手した場面に象徴されている連帯感についての理念であると指摘している。さらにメイヤーズは、オーウェルはスペイン内戦に参加することで同胞愛(“comradeship”)と連帯感(“solidarity”)、そして他者の憐れむべき苦しみを経験し、ディーセンシィを守るという精神的な勝利感を経験したと主張している(122-28)。このメイヤーズの主張は、相手が政治的には敵であったとしても人間であるのは変わりがないという感覚をオーウェルはスペイン内戦を通じて認識し、オーウェルの持つ生来的な人権意識が強まったことを示唆している。オーウェルは『カタロニア賛歌』で人を撃つことについて“*In this war everyone always did miss everyone else, when it was humanly possible.*”(37)と述べ、さらに「スペイン戦争回顧」では、ズボンを着ている最中の敵兵をオーウェルは撃つことが出来なかったといった人道主義的なエピソードが述べられている(CEJL vol. 2 254)。戦場では小銃を人に向けて撃つと狙いが外れてしまうというオーウェルの主張を裏付ける説が、デーブ・グロスマン(Dave Grossman, 1956)の著書『戦争における「人殺し」の心理学』(*On Killing: The Psychological Cost of Learning to Kill in War and Society*, 1995)において提唱されている。実際の戦場では敵を見ることなく殺すことができる大砲などとは違い、小銃では敵を殺すこと自体が多くの兵士にはほとんどできなかったとする根拠として、第二次世界大戦の前線に配属された米軍兵士

の中で実際に発砲した者が全体のわずか15~20パーセント程度しかいなかったこと(3)、南北戦争の戦場跡で発掘された多くの銃に複数の弾が装填されていた為に、戦闘忌避が疑われる事例があること(23)などからそのような結論を彼は下している。デイヴィッド・ロバーツ(David Roberts, 生没年不詳)の第一次世界大戦の詩について書かれた著書『暗黒の試み—第一次世界大戦の詩とその背景と注釈』(*Out in the Dark: Poetry of the First World War in Context and with Basic Notes*, 1998)によると、第一次世界大戦での死傷者は少なくとも860万人ほどと見積もられている(104)。この戦争は期間と死傷者が従来のものとは桁違いに大きくなった点に特徴がある。死傷者の中には1918年に大流行したスペイン風邪などの病死による犠牲者も多くいたと考えられるが、ピーター・ドイル(Peter Doyle, 生没年不詳)が第一次と第二次世界大戦の統計を編纂した著書『データで見る第二次世界大戦』(*World War II in Numbers: An Infographic Guide to the Conflict, Its Conduct, and Its Casualties*, 2013)による説明によると、第一次世界大戦での戦闘による死傷者の60パーセントが砲撃によるものであった。この大戦で初めて使用された毒ガスによる負傷者は18万5000人に上るが、死者は7000人と比較的少ない。その一方で、銃火器による犠牲者は25パーセントから30パーセントほどで、その大半が機関銃によるものだと見積もられている。つまり兵士たちが携帯している小銃による死傷者は全体のごくわずかということになる。この特徴は後の第二次世界大戦の時にもみられ、英軍の死傷者の75パーセントが砲撃と空襲によるもので、機関銃や小銃による死傷者は、わずか10パーセントに止まっている(204)。

しかし小銃でも銃剣でも敵兵を殺せなかったオーウェルは手榴弾では敵の兵士に重傷を与える描写が『カタロニア賛歌』には存在する。手榴弾には爆発する際には敵の兵士を見なくて済むという心理的メリットがある点がグロスマンによって指摘されており(112-13)、精神的な負担が銃を撃つより軽かった為と考えられる。コパードとクリックの共著『思い出のオーウェル』の中に、スペイン内戦中にオーウェルと共に塹壕で戦ったスタフォード・コットマン(Stafford Cottman, 1918-)の回想が載せられている。オーウェルが時として敵に銃を発砲できないことがあると主張した点に対して、コットマンは次のように述べている。彼によるとオ

オーウェルは、敵が動いている点であったときは狙いをつけ、躊躇わずに発砲していたと回想している。コットマンは、人間は飛行機から地上にいる人間が死ぬことを分かっているが爆弾を落とせるが、その人物は一軒一軒家を回って中の人をたたき殺すことはとてもできないであろうことから、殺す相手をはっきりと見ずに済むことを可能にさせる距離こそが人間を非人間化すると指摘している (153-54)。オーウェルは敵を人として見てしまう場合に銃をためらわずに撃つことが難しかったが、同様の描写が、スティーブン・スペンダー (Stephen Spender, 1909-95) の自伝『世界の中の世界』 (*World Within World*, 1951) や、アーネスト・ヘミングウェイ (Ernest Hemingway, 1899-1961) の小説『誰がために鐘は鳴る』 (*For Whom the Bell Tolls*, 1940) でも見られる。スペンダーが前線取材した時に敵に向けて機関銃を数発撃つことになった際、彼はどうか偶然にも敵に当たらないようにと祈りながら撃っている (223)。『誰がために鐘は鳴る』では、主人公のロバート・ジョーダン (Robert Jordan) は敵に対して普段は躊躇いなく発砲できるのにもかかわらず、敵兵がすぐ目の前にいた場合には、普通の人間の2倍の大きさに見え、それが原因となって撃つことができず見逃してしまう (267)。

オーウェルは、戦場という極限状態に自ら義勇兵として身を置いたことで、その際の人間の心理を観察し、そのような過酷な環境の中でも人々の心の中に良心が保たれていることを実感したことで、人が持つディセンシイの道德理念に対する信頼を深めたのである。

### 3. 社会規範に本能的に従う問題

スペイン内戦での体験に限らず、オーウェルの小説には人が無意識のうちに行う道徳的な行為の様子や心理描写が、本能 (instinct) という言葉とともに直接的に描かれている。『葉蘭をそよがせよ』では、次のように描かれている。

She was his now when he chose to take her. And yet perhaps she did not fully

understand what it was that she was offering; it was simply an instinctive movement of generosity, a desire to reassure him—to smooth away that hateful feeling of being unlovable and unloved. (134)

ここでは主人公のゴードンの恋人ローズマリーが、貧困にあえぎ苦しむゴードンに対して本能的な寛容の気持ちから、彼に自信を取り戻しこの窮状から助けてあげたいという同情心が描かれている。また、『1984年』では、道徳的な本能としての母性愛が、主人公のウィンストンに注がれる母の愛情として描かれており (340-41)、その温かみのある家庭に対比させられる社会の冷酷性を際立たせる働きがなされている。さらにウィンストンの目の前で、彼が自分を監視している人物であると当初誤解していたジュリア (Julia) が倒れた際、“In front of him was an enemy who was trying to kill him: in front of him, also, was a human creature, in pain and perhaps with a broken bone. Already he had instinctively started forward to help her.”

(121) と描写されている。ここでは、ウィンストンの目の前にいる人物は敵であっても苦痛にあえいでいる一人の人間であり、彼は本能的に彼女を助けようと足を踏み出していたと述べられている。さらにオーウェルの描く無意識のうちに行われる行為の一つとして、“Mrs’ was a word somewhat discountenanced by the Party—you were supposed to call everyone ‘comrade’—but with some women one used it instinctively.” (24) という描写があり、このウィンストンの発言は社会規範としての道徳の影響を受けている。ここでオーウェルは相手に敬意を表す言語表現である“Mrs”を本能的に使ってしまうという心理を描いており、礼儀作法でもある社会規範に人は本能的に従ってしまうことを示している。さらにデイヴィソンの『ジョージ・オーウェル日記』によると、オーウェルは1936年3月5日の日記において、彼がイングランド北部の町リーズに滞在した際にそこに住む人々について次のように分析している。イングランド北部では労働者階級の男たちは女たちに何の手助けもせず、女はたとえ男が失業していても家事を全てすることになっている。一方、女たちは、男たちがドアを開けてくれることを好んでいる。現状では男たちはほとんどいつも失業しているが、家では大工仕事と庭仕



事以外はせず、もし失職が原因で家事を行えば、ホモの男 (“Mary Ann”) となり、男らしさを失ってしまうと、男女ともに本能的に感じていると、オーウェルは日記に記載している (59)。つまり男女のジェンダーにおける役割分担といった社会規範に人は本能的に従ってしまう現実を、リーズの町でオーウェルは目の当たりにしたことが読み取れる。

人々が無意識のうちに社会規範に従う状況は当時のイギリス社会に限らず、『1984年』では極端な状況として、“You had to live—did live, from habit that became instinct—in the assumption that every sound you made was overheard, and, except in darkness, every movement scrutinised.” (5) と描かれている。ここで『1984年』の社会では、本能と化した習慣によって人々が暮らしていると述べられており、オーウェルがリーズで実感した、人は社会規範に本能的に従うという習性が入り入れられている。『1984年』では、ウィンストンは肉体的な拷問と鼠による精神的な拷問の2つによって党に屈服させられているが、一方でアーサー・ケストラー (Arthur Koestler, 1905-83) の著書『真昼の暗黒』 (*Darkness at Noon*, 1940) において、なぜ主人公のルバシヨフ (Rubashov) は拷問にかけられておらず、脅されてもいないのに無実の罪に対して完全な自白を行ったのかについて、オーウェルは評論「アーサー・ケストラー」 (‘Arthur Koestler’, 1944) の中で次のように推測している。

Rubashov ultimately confesses because he cannot find in his own mind any reason for not doing so. Justice and objective truth have long ceased to have any meaning for him. For decades he has been simply the creature of the Party, and what the Party now demands is that he shall confess to non-existent crimes. In the end, though he had to be bullied and weakened first, he is somewhat proud of his decision to confess. (*CEJL* vol. 3 239)

ここでは、オーウェルはルバシヨフが自白をおこなったのは、ルバシヨフは数十年の間完全に党の支配下にあった人間であり、党への忠誠という習性に突き動かされている為、党が彼に

自白を要求した際にそれをしない理由を彼の頭脳が見つけ出せなかった為だと結論付けている。これは、オーウェルが「象を撃つ」の中で描写した、人はその場に置かれた社会規範に従うことを優先してしまい、個人の思考における理性的な行動をとることが難しいという心理が反映されている。このように、現状の社会的規範に基づいて人は意識を伴わず本能的に行動してしまう問題点が、『1984年』でそこに住む人々を次のように描写することで表されている。

It was curious how that beetle-like type proliferated in the Ministries: little dumpy men, growing stout very early in life, with short legs, swift scuttling movements, and fat inscrutable faces with very small eyes. It was the type that seemed to flourish best under the dominion of the Party. (69)

beetle-blind は近眼の人を意味し、black beetle はゴキブリを指す言葉であるように、英語において昆虫という単語にはネガティブなニュアンスが含まれている。『1984年』の社会においては、この本能的に動き回る人間を昆虫に喩えて、その社会の異常さを表現している。オーウェルにとってのディーセンシィは「生来的な人権意識」の道德理念が含まれており、人々が昆虫のように活動する社会は人権意識が欠けている為、ディーセンシィが成り立つ社会ではないことをオーウェルは読者に印象的に示しているのである。

『1984年』の社会を象徴する昆虫のような「小さい太った男たち」と同じ表現が、ユートピアの象徴としての小川や動物に対比させられるものとして、オーウェルの評論「なぜ私は書くのか」の中に、1935年における彼の心情を表した詩の中で登場する。この詩は「私は200年前であればクルミの木を愛でる牧師になっていたであろう」という次のような回想で始まっている。

A happy vicar I might have been

Two hundred years ago,

To preach upon eternal doom  
And watch my walnuts grow; (1-4)

そしてこの詩は次のような自然と現代における近代化の対比の描写が描かれている。

But girls' bellies and apricots,  
Roach in a shaded stream,  
Horses, ducks in flight at dawn,  
All these are a dream.

It is forbidden to dream again;  
We maim our joys or hide them:  
Horses are made of chromium steel  
And little fat men shall ride them. (17-24)

この詩において、クロム鋼製の車に象徴される工業化された現代社会に対する、小川や鴨に象徴される自然の安らぎが表現されている。この都市環境と自然との対比の構図は、『1984年』の中でより鮮明に映し出されている。主人公のウィンストンはジュリアと共に訪れた平原において、そのすぐ近くには小川があり、緑のため池にはウグイが泳いでいるかもしれないと思い、思わず “It's the Golden Country—almost,” he murmured.” と感嘆している (141-42)。そもそもオーウェルという名称はペンネームであり、彼の本名はエリック・アーサー・ブレア (Eric Arthur Blair) という。リチャード・ボールヒーズ (Richard Voorhees, 1916) の著書『オーウェルのパラドックス』 (*The Paradox of George Orwell*, 1986) によると、オーウェルは27歳の時から、かつて彼がそばに住んだことがあるサフォークのオーウェル川に由来するこのペンネームを用いている (11)。彼は自然に対する寵愛からオーウェルという名称を選んだので

ある<sup>1</sup>。オーウェルは評論「ヒキガエルについての意見」(‘Some Thoughts on the Common Toad’, 1946)の中で、春や他の季節の変わり目に喜びを感じ、クロウタドリの歌や、10月の黄色いニレの木などの自然を愛することで、人生はしばしば生きる価値があると認識することの大切さを説いている(CEJL vol. 4 143)。さらにオーウェルは「ヒキガエルについての意見」の中で次のように述べている。

I think that by retaining one’s childhood love of such things as trees, fishes, butterflies and—to return to my first instance—toads, one makes a peaceful and decent future a little more probable, and that by preaching the doctrine that nothing is to be admired except steel and concrete, one merely makes it a little surer that human beings will have no outlet for their surplus energy except in hatred and leader worship. (CEJL vol. 4 144)

ここでオーウェルは自然を愛しその中に喜びを見出していた子供のころの感覚を心にとどめておくことが大切であり、それが憎悪や指導者崇拜といったものに心が奪われるのを防ぐであろうと考えている。オーウェルのディーセンシの特徴の一つである生来的な人権意識は、この子供が生来的に持つ感覚を含んだものであると考えられる。ここで言及されている子供の頃の自然に対する感覚は、オーウェルの小説『空気を求めて』(‘Coming Up for Air’, 1939)の中で描かれている。主人公の中年男性であるジョージ・ボーリング (George Bowling) は目の前の家庭生活に絶望し、彼が子供の頃、豊かな自然の中で釣りをして大きな魚を釣り上げた思い出のある故郷のロウワー・ビンフィールド (Lower Binfield) に一人逃げようとする。そこへ再び行くことを決断した際の彼の心境は次のように描写されている。

Coming up for air! Like the big sea-turtles when they come paddling up to the surface, stick their noses out and fill their lungs with a great gulp before they sink

down again among the seaweed and the octopuses. We're all stifling at the bottom of a dustbin, but I'd found the way to the top. Back to Lower Binfield! (177)

ここで示されているように、この *Coming Up for Air* というタイトルは、主人公が息苦しい社会から楽しかった故郷へと向かう行為を、ウミガメが空気求めて濁った沼の底から海面へと浮上する本能的な行為と重ね合わせたものであった。彼の小説に共通しているテーマは、登場人物が示す本能的衝動は呼吸をするようなもので、人はそれに抗うことはできないということである。オーウェルはグレアム・グリーン (Graham Greene, 1904-91) の著書『事件の核心』 (*The Heart of the Matter*, 1948) を書評した評論「批評—グレアム・グリーン『事件の核心』」 (Review: *The Heart of the Matter* by Graham Greene, 1948) において、小説には心理的必然性 (“psychological probability”) が必要であり、主人公の動機が行動を適切に説明しなければならぬと述べている (CEJL vol. 4 439-40)。オーウェルの小説において主人公の行動の動機は、本能的に嫌悪感を抱かせる社会から脱却することである点で共通している。

『1984 年』はディストピア小説の代表格の地位を占めているが、これとは対照的なユートピア小説では、本能を抑えつけた理性的な社会が描かれてきた。ジョナサン・スウィフト (Jonathan Swift, 1667-1745) についてのオーウェルの評論「政治対文学—『ガリヴァー旅行記』論考」 (Politics vs. Literature: An Examination of *Gulliver's Travels*, 1946) において、オーウェルはスウィフトが描く『ガリヴァー旅行記』 (*Gulliver's Travels*, 1726) のユートピア像について次のように述べている。

Swift advocates a simple refusal of life, justifying this by the claim that “Reason” consists in thwarting your instincts. The Houyhnhnms, creatures without a history, continue for generation after generation to live prudently, maintaining their population at exactly the same level, avoiding all passion, suffering from no diseases, meeting death indifferently, training up their young in the same principles—and all

for what? In order that the same process may continue indefinitely. (*CEJL* vol. 4 219)

ここでオーウェルはスウィフトにとってのユートピア像とは生きることを拒絶したものであり、さらに理性によって本能を屈服させたものであると指摘している。この社会はフウイヌム (Houyhnhnm) 達の住む社会で描かれている。フウイヌムの社会の特徴とは全ての情熱を取り除き (“avoiding all passion”)、無感動に (“indefinitely”) あらゆることを持続させたものであるとオーウェルは指摘して、このような社会を非人間的であると批判している。これは自然の中に喜びを見出すといった、子供が初めて出くわしたものに驚嘆するような心が保てる社会をディーセンシイなものとして見ていたオーウェルのユートピア像とは相いれない。オーウェルと同じく、サミュエル・バトラー (Samuel Butler, 1835-1902) のディストピア小説『エレホン』 (*Erewhon*, 1872) の中で、一見すると理性的なユートピアの世界を体験し終えた主人公のヒッグス (Higgs) は、“Indeed I can see no hope for the Erewhonians till they have got to understand that reason uncorrected by instinct is as bad as instinct uncorrected by reason.” (236) と感じ、その社会への失望を表している。『エレホン』の世界では容姿端麗で健康であることが美德である為、病気になる事が重罪とされてしまう。このように読者に違和感を生じさせる理性的な世界をバトラーは描くことで、本能的な違和感を抱かせない社会の必要性をオーウェルと同様に強調している。さらにオーウェルの『1984年』のストーリーの基になったエヴゲーニイ・ザミャーチン (Yevgeny Zamyatin, 1884-1937) のディストピア小説『われら』 (*We*, 1924) もその結末において、「そして私はわれらが勝利することを希望している。いやそれ以上である。私は確信している、われらは勝利するであろう。なぜなら理性は勝利するはずだからである。」 (355) という主人公の D-503 の言葉で締めくくられ、『われら』によって描かれた理性によって管理されすぎた社会をザミャーチンは風刺している。

その一方で『1984年』では、理性的な社会とはかけ離れた本能的に不健全な感覚が読者に伝わる不潔な社会が描かれている。ウィンストンはその社会について次のように感じている。

It *might* be true that the average human being was better off now than he had been before the Revolution. The only evidence to the contrary was the mute protest in your own bones, the instinctive feeling that the conditions you lived in were intolerable and that at some other time they must have been different. . . . The reality was decaying, dingy cities where underfed people shuffled to and fro in leaky shoes, in patched-up nineteenth-century houses that smelt always of cabbage and bad lavatories. (84-85)。

このようにウィンストンは彼が住む世界に対し、キャベツやトイレの臭いなどに対するものと同じ本能的な拒絶反応を起こす感情を抱いているが、その一方で、その社会と比較できるものが党によって排除させられているこの鎖国状態の社会において、ウィンストン以外でその異常な社会に住む人々は、それに気付くことができない。さらに社会問題をウィンストンから指摘された恋人のジュリアは、個人的なことに関係のない社会問題に対し無関心でいる状況が描かれている。ここでオーウェルは、物語では主人公のみが気付くことができる本能的な嫌悪感を抱かせる社会規範の負の面に対して、他の人々は無関心でいる存在として描くことで、人は社会規範が形成した負の面にも本能的に従ってしまう問題点を強調している。

オーウェルは個々の人々の心のみではなく、社会的なディセンシイの感覚を求めたのは、人々は社会規範に無意識に従ってしまう為であった。その為、悲劇作品を通して個人の心にディセンシイの感覚を抱かせるだけではなく、社会全体を改善してそこにディセンシイの感覚を持たせることにオーウェルは関心を寄せていた。オーウェルは特に当時の階級社会に対して本能的な嫌悪感を持っていた。オーウェルは『パリ・ロンドンどん底生活』において、階級社会により大勢の者たちが長時間労働に従事せざるを得ない環境においては、多くの人々は道徳的なことを考える余裕がないという社会問題を描いている。オーウェルにとっての階級社会とは、この作品で描かれているように、上流階級の者たちはパリの豪華なレストランで、失業中の中流階級の主人公と労働者階級の者たちによって外から見えない厨房で作られた、汗、つ

ば、ふけ、ほこりに汚染された食べ物を何も知らないまま口にするという構図に象徴されている、本能的に忌避すべき存在であった。オーウェルは階級社会の問題点に対して本能的な嫌悪感を読者に抱かせる著書を執筆することで、その問題点を人々に気付かせ、社会全体を改善しようとしたのである。

オーウェルは、現代は機械化の時代であり、大勢の多忙を極める労働者や使用人によって成り立つ階級制度を維持する必要性がなくなった段階に達していると考えていた。階級社会を維持する必要はもはやなくなっているという主張をオーウェルは強調する為に、オーウェルは評論「チャールズ・ディケンズ」(‘Charles Dickens’, 1940)において、機械が労働者たちを重労働から解放する以前の階級社会で生きていた小説家の代表としてチャールズ・ディケンズ (Charles Dickens, 1812-70) の小説を分析し、ディケンズが理想とする社会の構図について次のように述べている。

What Dickens seems to be doing, as usual, is to reach out for an idealised version of the existing thing. He was writing at a time when domestic service must have seemed a completely inevitable evil. There were no labour-saving devices, and there was huge inequality of wealth. It was an age of enormous families, pretentious meals and inconvenient houses, when the slavey drudging fourteen hours a day in the basement kitchen was something too normal to be noticed. And given the *fact* of servitude, the feudal relationship is the only tolerable one. Sam Weller and Mark Tapley are dream figures, no less than the Cheerybles. If there have got to be masters and servants, how much better that the master should be Mr Pickwick and the servant should be Sam Weller. Better still, of course, if servants did not exist at all—but this Dickens is probably unable to imagine. Without a high level of mechanical development, human equality is not practically possible; Dickens goes to show that it is not imaginable either. (*CEJL* vol. 1 440-41)



ここでは、ディケンズの小説には『ピクウィック・クラブ』 (*The Pickwick Papers*, 1836-37) における、主人公のサミュエル・ピクウィック (Samuel Pickwick) とその忠実な従僕サム・ウェラー (Sam Weller) や、『マーティン・チャズルウィット』 (*Martin Chuzzlewit*, 1843) における主人公のマーティン・チャズルウィット (Martin Chuzzlewit) と、旅の途中に病に倒れた彼へ献身的な看護を行った従僕マーク・タプリー (Mark Tapley) の間の主従関係に代表されている、伝統的な封建体制を是とする風潮があるとオーウェルは指摘し、それを時代遅れなものとしてオーウェルは考えている。さらにオーウェルは続けて評論「チャールズ・ディケンズ」で、“When he speaks of human progress it is usually in terms of *moral* progress —men growing better; probably he would never admit that men are only as good as their technical development allows them to be.” (*CEJL* vol. 1 445) とディケンズを評している。ここで最後に述べられている、人は機械による技術的な発展の範囲内でのみ道徳的になれるというオーウェルの主張から、オーウェルは社会において機械を有効に活用することが、多くの人々にゆとりのある心を抱かせるのに不可欠な要素であると考えていたことが読みとれる。自然主義小説の影響を受けているオーウェルは環境が過酷であれば、そこに住む人々も悲劇的な生活を強いられる点を強く認識していた。その為、ディーセンシィの感覚を持つ社会を築くには、社会の高度な機械化が必要不可欠であるとオーウェルは考えていたのである。

## 第2章「真実を求める本能」

### 1. オーウェルの信仰

第1章において、機械化の進歩内で人は善良になることができ、機械化が高度に進めば、人々の心に自然を愛することができるようなゆとりができるとオーウェルは考えていた点を筆者は指摘した。つまりオーウェルは、大人たちが機械化によって重労働から解放され、自然の神

秘性を驚きと共に感じられる子供のような心を大人たちも保てる社会を、ディーセンシィが成り立つ社会であると考えていたのである。オーウェルは評論「ブレイの牧師のための弁明」(‘A Good Word for the Vicar of Bray’, 1946) において、17世紀にブレイの村に住んでいた牧師が無節操に宗旨を変えたことを皮肉ったバラード「ブレイの牧師」(‘The Vicar of Bray’, 成立年不詳) において、日和見主義者として風刺されている牧師が植えたイチイの木が、現代では大きな木に成長して人々に安らぎを与えていることを指摘している。その点に関してオーウェルは、“The planting of a tree, especially one of the long-living hardwood trees, is a gift which you can make to posterity at almost no cost and with almost no trouble, and if the tree takes root it will far outlive the visible effect of any of your other actions, good or evil.” (CEJL vol. 4 151) と述べている。ここでオーウェルはただ単に木を植えることですら、それは後世の人々に安らぎを与える善行であると述べており、オーウェルは自然を善の心と結び付けていたことが読み取れる。その為、オーウェルは森や木々の自然を賛美する描写を彼の小説に盛んに登場させている。『1984年』において、ウィンストンが都市から離れて森の中に入る際に、オーウェルは次のように自然を神秘的に描いている。

Winston picked his way up the lane through dappled light and shade, stepping out into pools of gold wherever the boughs parted. Under the trees to the left of him the ground was misty with bluebells. The air seemed to kiss one’s skin. It was the second of May. From somewhere deeper in the heart of the wood came the droning of ring-doves. (135)

ここでオーウェルは、森の陽だまりを“pools of gold”と描写し、これはウィンストンが夢で見た太陽が芝生を照らす「黄金郷」(“Golden Country”) (35-36) と同一の描写であり、自然界を色彩的な理想郷として描いている。さらに鳩の低い鳴き声も、その理想郷の一部に組み込まれている。また、ウィンストンが “‘Do you remember,’ he said, ‘the thrush that sang to us,

that first day, at the edge of the wood?” (252) とジュリアに尋ねる場面がある。ここでウィンストンは森のツグミの鳴き声に対し、これは鳥がただ鳴いているのではなく自分たちに歌ってくれているという感覚でとらえている。このようにウィンストンは自然に対し、視覚的、かつ聴覚的に神聖を感じ取る態度を取っている。マイケル・ファーバー (Michael Ferber, 1944) の著書『文学シンボル辞典』 (*A Dictionary of Literary Symbols*, 1999) によると、鳥は飛ぶことができる為、神の使いとして古くから換喩として用いられており (25-26)、ウィンストンも自然界に対してこれと同様の概念を抱いている。さらに『牧師の娘』において、主人公のドロシー・ヘアー (Dorothy Hare) が自然に包まれた際の歓喜の感情描写が登場する。

Her heart swelled with sudden joy. It was that mystical joy in the beauty of the earth and the very nature of things that she recognized, perhaps mistakenly, as the love of God. As she knelt there in the heat, the sweet odour and the drowsy hum of insects, it seemed to her that she could momentarily hear the mighty anthem of praise that the earth and all created things send up everlastingly to their maker. All vegetation, leaves, flowers, grass, shining, vibrating, crying out in their joy. (56)

ここで、ドロシーは大地の神秘とは“the love of God”であり、その大地は自然を通して“the mighty anthem of praise”を歌っていると感じている。ここでも、自然界が神への賛美と結び付いた描写となっている。しかしこの直後ドロシーは、牧師である彼女の父が自然崇拝は多神教 (“pantheism”) であってキリスト教の教えに反するものだと彼女に教えたことを思いだし、この自然崇拝の考えを彼女は振り払おうとする (56)。もともと中世初期のキリスト教の布教活動において、巨木を神として祭る多神教のゲルマン民族の人々をキリスト教に改宗させる際に、彼らの自然崇拝の信仰が改宗への障壁となったように<sup>2</sup>、自然崇拝を敵視するキリスト教の立場が存在しており、『牧師の娘』ではそのジレンマが描かれているのである。ドロシーはこのジレンマに加えて、当時の人々の間でキリスト教の信仰が薄れた状況で牧師の娘として教

会での宗教活動が続けるジレンマも保持しており、これらのジレンマが彼女を夢遊病へと至らせ、この世の中を動かしている真理とは何かという問いを無意識に理解しようとし、教会へは戻らずにイギリス中をさまよう。つまり人はジレンマに陥ると、真実とは何かを求める本能に突き動かされるとオーウェルは考えている。この小説の結末において、ドロシーがキリスト教の信仰心を失ったことで、キリスト教の一神教としての教えよりも、自然界に神を見出す当初のドロシーの立場をオーウェルは支持する形で物語を締めくくっている。

オーウェルは自然の中に神秘性や神の理性を感じ取る、ロマン主義に近い立場で自然を描写していた。ジョセフ・ビーチ (Joseph Beach, 1880-1957) はウィリアム・ワーズワース (William Wordsworth, 1770-1850) についての論文「ワーズワースにおける理性と自然」(‘Reason and Nature in Wordsworth’, 1940) において、ワーズワース以前の自然に対する神学者や哲学者たちの態度を分析している。ビーチはマシュー・ティンダル (Matthew Tindal, 1657-1733) や、リチャード・フッカー (Richard Hooker 1554-1600) が著書において、“nature” と“reason” の単語を同一視して使用しており、理神論者や聖職者の間でも自然と理性の法則を同一視する立場が古くからイギリスに存在していた点を指摘している。そしてこの立場によると、自然から導かれる道徳的な理性は、感情から引き起こされるものに劣らないほど大きいと考えられていたとビーチは指摘している (337-38)。さらにビーチは、これらの立場と同様な見解をワーズワースが持っていたとして、彼の詩「逍遙篇」(‘The Excursion’, 1814) においてワーズワースが次のように自然を理性と結び付けている点を指摘している。

Does the will

Acknowledge the reason’s law? (V, 470-71)

ここでワーズワースは、自然界の理性の法則を人の意志は認識できるか、と述べて、自然と理性を結びつけている。これを根拠にビーチは、ワーズワースの自然に対する態度について次のように述べている。

Above all, instead of turning his back on reason in his devotion to nature, in favor of sensation, passion, or instinct, he insists what he finds in nature is “the visible quality and shape and image of right reason.” Wordsworth never, so far as I can judge, falls into “an inarticulate ecstasy before the wonders of nature.” (341)

ここでビーチは、ワーズワースの自然への態度は、理性に背を向け、感情的になって感性、情熱、本能に従うことではなく、彼が自然に見出したものは、正しき理性が目に見える姿で具現化されたものであったと述べている。オーウェルもこの感覚を持っており、『1984年』で自然界を黄金郷という視覚的な形でオーウェルは表現しており、感情のみに頼るのではなく、目に見え音が聞こえる具現化された形での自然崇拜が、オーウェルの小説で描かれている。さらにオーウェルの自然を愛する感情は、彼にとっての愛国心としても表れていた。オーウェルは評論「ナショナリズム覚書」(‘Notes on Nationalism’, 1945)において、愛国心とはナショナリズムと対照的なものとして、“By “patriotism” I mean devotion to a particular place and a particular way of life, which one believes to be the best in the world but has no wish to force upon other people. Patriotism is of its nature defensive, both militarily and culturally.” (CEJL vol. 3 362) と述べている。ここでオーウェルは、彼にとっての愛国心とはある特定の場所や生活の仕方に対する強い愛情のことであると定義している。クリックは著書『ジョージ・オーウェル—ひとつの生き方』(George Orwell: A Life, 1980)において、オーウェルの愛国心とは田園に象徴される郷土 (“the country”) を守ることと深く結びついていると述べている (255)。オーウェルは自然の中に郷土愛としての愛国心を見出し、それを大切にしていたのである。

オーウェルが自然を神聖視し、それにより郷土愛の感情を抱く一方で、彼のキリスト教的な神に対する信仰心は、『牧師の娘』でドロシーがジレンマに陥ったのと同様に複雑なものであった。オーウェルはキリスト教における神について、彼が 14 歳ごろになるまでは信じていたが、本当のところは愛してはおらず、彼に対していつもしわがれ声で「それをしてはいけない」

とばかり言っていた為に自分が嫌っていた父と同じような存在であったと、少年時代の回想録「楽しかりし日々」で述べている（*CEJL* vol. 4 360）。オーウェルはトリビューン誌に連載したコラム「私の好きなように」（‘As I Please’, 1943-47）の1944年3月3日の記事で、現代において基督教の信仰が社会で失われた結果、精神的な空洞が人々に発生し、それが全体主義の思想に取って代わられることを危惧しながらも、自分は基督教の来世に対する信仰が戻ってくることを望んではいないと明言している（*CEJL* vol. 3 103）。レフ・トルストイ（Lev Tolstoy, 1828-1910）が行ったウィリアム・シェークスピア（William Shakespeare, 1564-1616）の作品に対する批判について反論したオーウェルの評論「リア王・トルストイ・道化」のなかで、オーウェルはシェークスピアの劇『ハムレット』（*Hamlet*, 1599?）は現世に価値をおいた人間主義の立場で描かれているのに対し、トルストイの作品は現世に希望を見いだせず来世に価値を置いたものであると分析している。さらにオーウェルはトルストイのように来世に価値を置くキリスト教的な立場は、現世の苦痛から逃れようとする為の利己的で快樂主義的な態度であると批判している。そして人間主義の立場から見れば、死とは生が支払う代償であり、避けるべきものであるとオーウェルは述べ、彼はこちらの立場を支持している（*CEJL* vol. 4 298-99）。オーウェルは来世を無視しており、現世において生きている限り社会を改善する活動を行うことに価値を置いているのである。

またオーウェルは評論「なぜ私は書くのか」の中に「200年前だったら私は牧師になっていたかもしれない」という心情で始まる詩を書いていたが、『牧師の娘』の中に登場する牧師のチャールズ・ヘアー（Charles Hare）は、人々の間で基督教の信仰心が失われかけた現状を見ることができず、ドロシーが家計の借金について相談しに来た際には、それを無視して自身のオックスフォード大学に在学していた古き良き時代を回顧するなど、現実を見ることができない人物として描かれている（28）。オーウェルはイートン校卒業後の一般的な進路であるオックスフォード大学へ進学しなかったが、この『牧師の娘』の中に登場する牧師は、もしオーウェルがオックスフォード大学に進学していた場合のその後の自分の想像図であるともとれる。牧師に対してオーウェルは読者が幻滅するような姿しか描くことができず、彼は現状の

キリスト教の組織に対して好感を持つことができなかつたことが読み取れる。『牧師の娘』では、オーウェルに限らず当時の多くのイギリスの人々がキリスト教の信仰心を持ってなくなり教会が危機に瀕している状況が、老朽化と予算不足の為3年間鐘楼の床に放置され、近い将来に教会の玄関に抜け落ちてくる事が確実な教会の鐘に象徴されている (31-32)。

その一方で、カナダ放送協会 (Canadian Broadcasting Corporation) のラジオ番組で行われたオーウェルの知人達からの回想の記録を、シュテファン・ワドハム (Stephen Wadhams, 生没年不詳) が編纂した著書『オーウェルの記憶』 (*Remembering Orwell*, 1984) によると、オーウェルは遺言の中で彼の友人たちに自身をイングランド国教会の様式でイングランド国教会に所属している教会の庭に埋めるようにと求めている。彼はイングランド国教会の信徒ではなかつたにも関わらずである (218-19)。『牧師の娘』において、ドロシーはキリスト教の信仰を失っても、神を否定してはいないことが、物語の結末部に登場する次のような彼女の思考に表れている。

The world cannot be an accident. Everything that happens must have a cause—ultimately, therefore, a purpose. Since you exist, God must have created you, and since He created you a conscious being, He must be conscious. The greater doesn't come out of the less. He created you, and He will kill you, for His own purpose. But that purpose is inscrutable. It is in the nature of things that you can never discover it, and perhaps even if you did discover it you would be averse to it. Your life and death, it may be, are a single note in the eternal orchestra that plays for His diversion. And suppose you don't like the tune? (293)

ここでドロシーは、神無しでこの世界が偶然できたとは考えにくく、この世界は目的をもって神によって作られたものであると考えている。その目的は人間には解明できないか、できたとしてもそれを嫌悪してしまうようなものであるとしている。ここでオーウェルはこの世界の目

的に、不可知論的に解釈している。人生を神によって演奏されるオーケストラの音楽に喩えて、もしその音が嫌いなものであったらどうすればよいのか、と疑問を呈している。この疑問は、多くの問題を抱えるこの社会は全能な神によって創造されたとする矛盾が発生するジレンマを表している。オーウェルはコラム「私の好きなように」の1944年3月3日の記事で、苦役と搾取が無くなった社会においては、全ての問題が消滅するという社会主義者たちの主張は間違っており、人々は余裕のある生活を送れるようになれば、人々は自分の運命と存在理由について考え始めるようになると主張している (*CEJL* vol. 3 103)。このオーウェルの推測は、人は「真実を求める本能」を保持している為、人々の意識が日々の労働から離れて心に余裕が生まれた時、自分の存在意義や世の中を動かしている真理とは何であるのかを人は考え始めるであろうとするオーウェルの考えから導かれたものであると考えられる。『牧師の娘』は人の運命と存在理由についてのこの問題を、ドロシーを通してオーウェルが考察した小説であると考えられる。ドロシーは旅を通して様々な外の世界の不条理さを知る。低賃金で過酷なホップ摘みをする労働者たちは料理をする時間がない為まともな食事がとれず、壊血病を防ぐ為に近くの農園から果物を盗んで食べざるを得ない状況であったが、ドロシーと行動を共にしたノビー (Nobby) が窃盗の罪で警官に連行された際には、ドロシーはただそれを見ていることしかできなかった。このような貧者が虐げられる現状や、授業費を多く集めることのみが目的のクリーヴィ夫人 (Mrs Creevy) が運営するリングウッド・ハウス校での悲惨な教師生活を体験したドロシーは教会について、“there is something—it is hard to define, but something of decency, of spiritual comeliness—that is not easily found in the world outside.” (249) と考えるようになった。このように、たとえキリスト教を信じなくても教会に行かないより行った方がよく、よりどころの無い気ままさの中でさまようよりも昔のやり方に従った方がよいとドロシーは考えるようになり、最終的に元の教会での生活に戻ることを彼女は決意する。このドロシーの考えと同様に、オーウェルは死が身近に迫ってもはやものを書くことができなくなった時、昔から続く慣習に従った方がよいという感覚から、オーウェルはキリスト教の信徒ではなかったにもかかわらず、イングランド国教会の様式で葬儀されることを遺言で希望したと考



えられる。

オーウェルのディーセンシイにはキリスト教倫理が含まれていると先行研究で指摘されていたが、弱者を虐げるキリスト教倫理に反する人々の行動をドロシーに体験させる形で『牧師の娘』においてオーウェルは描き、不正が横行する社会においてキリスト教倫理のディーセンシイの大切さを、オーウェルは主張しているのである。オーウェルにとってのキリスト教は信仰的なものではなく、ディーセンシイを保つ為の倫理として認識されていた。その為キリスト教の信仰が薄れた当時の状況にあっても、従来から続く道德理念としてのキリスト教倫理のディーセンシイが社会に保たれておく必要があるとオーウェルは考え、『牧師の娘』を執筆して社会における不条理さを暴き、その不条理さを戒めるキリスト教倫理の重要性をオーウェルはこの小説で読者に訴えているのである。

## 2. オーウェルにとっての歴史

オーウェルは人間とは真実とは何かを本能的に追及する存在であると考え、『牧師の娘』においてはキリスト教の問題によるジレンマが原因でドロシーは旅に出て、世の中の真理とは何かを思案する状況をオーウェルは描いている。一方の『1984年』においては、真理省記録局で働くウィンストンは、党が歴史を改竄していることに気付き、歴史的な真実は何であったのかという疑問から、本能的に事実を探求しようとする。彼は日記に、“Freedom is the freedom to say that two plus two make four. If that is granted, all else follows.” (93) と記入している。ここで  $2+2=4$  が変更することができない歴史の真実の象徴として用いられている。これは、 $2+2=5$  が過ちであるとはっきり主張することができ、真実を正しく認識することが、党の束縛から逃れて人が自由を手にする第一歩であることを意味している。オーウェルは評論「スペイン戦争回顧」においてケストラーに対し、「歴史は1936年で止まった」と語ったことを回想している (CEJL vol. 2 256)。1936年はスペイン内戦が始まった年であり、スペイン内戦におい

て事実が記録に残されず、実際に起こったことではなく、党の路線と照らし合わせて起きるべきであったことが歴史として記録されたことに対するオーウェルの憤慨がここで表されている。オーウェルはこの評論において、ナチスの理論について、もしアドルフ・ヒトラー (Adolf Hitler, 1889-1945) がある事件が起こっていないと言え、それが起こらなかったことになり、 $2+2=5$  が正しいと言え、それが正しいものとなり、今日は黒であったものが翌日には白に変わる理論であるとして批判している。その上でオーウェルは、真実とはたとえ人が否定したとしても存在し続ける物であり、人の認識によって変化するという立場を否定している (CEJL vol. 2 258-59)。『1984年』の絶えず過去が改変される世界とは、1936年から正しい歴史が書かれなくなり、オーウェルにとっての歴史が止まったままの未来図である。オーウェルは『カタロニア賛歌』の補論の中で、偏向のない記録が存在しないことから、バルセロナでの戦闘についての完全に正確な記述を得ることは全く不可能であろうと主張している (216)。『1984年』に限らず、年月によって失われてしまった主人公の故郷を描いた『空気を求めて』や、過去の出来事が豚たちによって改竄させられる『動物農場』のように、スペイン内戦後に書かれた彼の小説は、過去が失われるという悲劇が重要な要素を占めている。

オーウェルは評論「ナショナリズム覚書」において、自己を国家やある集団と一体化させる思考形態を「ナショナリズム」と名付けて批判している。オーウェルが唱えるナショナリズムに染まったナショナリストは、ある集団に対し「善」や「悪」といったレッテルを貼れると思込み、「悪」と見なした集団に対し、あからさまな歪曲行為や捏造を行うが、それが正しいと信じて疑わない。さらに自己を埋没させた集団が行った暴虐行為は意識せず、意識しても、賞賛すべきもの、もしくは起こらなかったものであると見なすという特徴をオーウェルは挙げている。この思考形態を持つ対象についてオーウェルは、“Now that I have given this lengthy definition, I think it will be admitted that the habit of mind I am talking about is widespread among the English intelligentsia, and more widespread there than among the mass of the people.” (CEJL vol. 3 363) と述べて、イギリス国内の知識人層にこのナショナリズムが広がっていることを危惧している。この思考形態を持つナショナリストに

としては、過去とは改変できるものになる為、自分の精神を埋没させた集団の過去は美化された空想の世界で認識されるものとなる。全ての人がこのナショナリズムの思考形態に陥っているわけではないが、この思考はすべて人々の心に存在している為、人々は自分の心がナショナリズムに陥らないように注意する必要があるとオーウェルは指摘している (*CEJL* vol. 3 377)。そしてオーウェルは「ナショナリズム覚書」の結末において、ナショナリズムに自分の心が陥らないようにすることは、“*moral effort*” (*CEJL* vol. 3 380) であると述べており、デーセンシの道徳心を守る為に、歴史の改竄を厭わなくさせるナショナリズム的思考を、特にイギリスの知識人層の人々から排除しなければならないとオーウェルは考えていた。ゲルハルト・リッター (Gerhard Ritter, 1888-1967) は著書『現代歴史叙述の問題性について』 (*Zur Problematik Gegenwärtiger Geschichtsschreibung*, 1955) において、歴史における客観性とは、資料の中にあるのではなく、歴史家の真実への努力であり、自己修正を少しも恐れない清廉な真理愛のことを指すと述べている (42)。オーウェルの主張はこれと同様のものであり、正しい歴史に向き合う必要性を「ナショナリズム覚書」によって人々に説いている。

その一方で、オーウェルはコラム「私の好きなように」の1944年2月4日の記事において、ロンドン塔に幽閉され、世界史の歴史書をそこで執筆していたウォルター・ローリー (Walter Raleigh, 1552-1618) が、彼が塔の下で目撃した殺人事件について、その後綿密な調査をしたにも関わらず、その事件の概要が判明しなかったことから、自分が目撃してすらいない歴史についての本を書くことを止めてしまったエピソードを挙げ、正しい歴史を書くことの難しさを認識している。しかし彼はこの評論において、歴史の中身は戦場における勝者によって決められるとしながらも、我々が書く歴史はファシズムの国が書く歴史よりも嘘がずっと少ないと主張している (*CEJL* vol. 3 87-88)。ファシズムが勝利すれば正しい歴史が書かれなくなると考えたことが、彼がファシズムを批判する要因の一つとなっていた。

歴史を研究する上で資料を分析すれば過去の事実が確定できるとする立場に立ち、歴史的事実を書くことを歴史家に求めたレオポルト・ランケ (Leopold Ranke, 1795-1886) は、近代的な歴史学を確立した人物と見なされている<sup>3</sup>。アロン・グレーヴィチ (Aron Gurevich,

1924-2006) の論文を集めた著書『歴史学の革新—「アナール」学派との対話』(‘Историческая Наука и Историческая Антропология’, 1990) によると、ランケに代表される実証主義の立場に対し、歴史とは現在によって支配されていると主張するベネデット・クローチェ (Benedetto Croce, 1866-1952) や、歪曲を免れた客観的な歴史認識の可能性を否定したチャールズ・ビアード (Charles Beard, 1874-1948) のような相対主義者が生まれ、歴史的事実とは知性によって把握できない世界に属するという見解が、1930年代と1940年代というまさにオーウェルの時代に歴史学の中で大きな反響を呼び起こしていた (153-56)。このように正しい歴史とされるものに対する信頼が揺らいでいる状況のもと、オーウェルは正しい歴史を記録しようとし、『カタロニア賛歌』で当時のスペインの状況をできるだけ正確に描こうと努めている。この物語の前半は実際にオーウェルが戦場で目にしたことの心理的な描写が中心となっている。さらに物語の後半では彼が所属しておりトロツキストとして粛清された POUM を擁護する内容で占められ、POUM が歴史において不当な評価を受け続けるのを防ごうとしている。オーウェルはスペイン内戦で歴史が改竄されるのを目の当たりにした体験を通して、正しい歴史を人々が知る重要性を認識したのである。

### 3. 機械が悪用される問題

オーウェルは、1903年に当時イギリス領であったインドのモチハリで生まれた。その後、第一次世界大戦が始まった年の1914年の9月にイースト・サセックスのセント・シプリアン校に入学し、さらにそれから3年が経過した1917年にイートン校に入学している。つまり戦争が終わる1918年の時点で、オーウェルはまだ15歳であり、大陸に渡り出征することを免れた世代に属している。しかし銃後の若者としてパブリックスクールでは軍事教練が課せられ、彼は徹底した愛国教育を受けることとなった。オーウェルは軍事教練には熱心ではなかったが、愛国心を鼓舞する当時の風潮には同調し、11歳の時「立ち上がれ、イングランドの若者たち

よ」(‘Awake Young Men of England’, 1914) という愛国的な詩を書いた。この詩は冒頭から第一次世界大戦に出兵する兵士たちをライオンのように勇敢で狐のように賢い者たちであると褒めたたえている。

Oh! give me the strength of the Lion

The wisdom of Reynard the Fox (1-2)

さらに 1916 年にオーウェルは戦死したホレイショ・キッチナー (Horatio Kitchener, 1850-1916) を称える詩を書き、どちらの詩も地元の新聞に掲載されている。次にオーウェルが作詩を行ったのは終戦の年の 1918 年のことであったが、これは戦争ではなく彼の初恋の人物である、ジャシンサ・バディコム (Jacintha Buddicom, 1901-93) に宛てた「僕たちの心は結婚しているが、僕たちは若すぎる」(‘Our Minds are Married, But We are Too Young’, 1918) という詩であった。この詩では自分は結婚するにはまだ若すぎるという悲観的な感情が述べられている。オーウェルが第一次世界大戦とスペイン内戦を振り返って書いた評論である「右であれ、左であれ、わが祖国」(‘My Country Right or Left’, 1940) において、彼の世代を第一次世界大戦に参加するには若すぎた世代であったとしている。さらにオーウェルは若さゆえに戦争に参加した経験がないこの世代の人々を、“You felt yourself a little less than a man, because you had missed it.” (CEJL vol. 1 538) と表しており、この世代に自分が属していることに劣等感を抱き、このコンプレックスを払拭したいという気持ちを抱いていたことが示唆されている。さらに彼は続けて、“I am convinced that part of the reason for the fascination that the Spanish civil war had for people of about my age was that it was so like the Great War.” (CEJL vol. 1 538) と述べており、後に彼がスペイン内戦に参加した動機の一つに、第一次世界大戦の影響があったことが示唆されている。さらにオーウェルは「右であれ、左であれ、わが祖国」の冒頭で、第一次世界大戦に叙事詩的な特質があるのは、本や映画や回想録の影響であるとしている。ジョン・ストールワーシー (Jon Stallworthy, 1935-2014) は、著書

『戦争詩のオックスフォードブック』(*The Oxford Book of War Poetry*, 1984)において、1914年と1915年の前半に書かれた詩には、“Sword”や“Legion”といった古代の戦いを連想させる言葉が多用されているのに対し、“Gun”や“Platoon”といった現代的な戦いを連想する言葉が使われていない点を指摘している。これについて彼は、シーグフリード・サスン(Siegfried Sassoon, 1886-1967)の詩で、“We are the happy legion,”という表現が使われている「免罪」(‘Absolution’, 1916)の詩を例に挙げている(xxvii)。トマスの講演を収録した中島俊郎(1949)の著書『歴史と文学—近代イギリス史論集』(2001)によると、トマスはストールワーシーの主張を踏まえて、前線の兵士たちの恐怖は伝統文学という婉曲用法を通してイギリス本土の人たちに伝わっていたと述べている(26)。オーウェルの「立ち上がれ、イングランドの若者たちよ」が新聞に掲載されたように、第一次世界大戦では多くの詩が戦争に幻想的な雰囲気を持たせ戦意高揚の為に利用された<sup>4</sup>。さらにオーウェルは評論「右であれ、左であれ、わが祖国」において次のように述べている。

I spent the years 1922-7 mostly among men a little older than myself who had been through the war. They talked about it unceasingly, with horror, of course, but also with a steadily growing nostalgia. You can see this nostalgia perfectly clearly in the English war-books. (*CEJL* vol. 1 538)

ここからオーウェルはビルマでの警官としての勤務中に、第一次世界大戦に直接参加した世代と接する機会があり、彼らから戦争に対して懐古的な影響を受けていたことがわかる。オーウェルは大学に進学しなかったという点で他の1930年代を代表するイギリスの作家たちとの相違点があり、その為オーウェルがビルマに勤務したことが、オーウェルが戦争に対して幻想的なイメージを抱きスペイン内戦に参加する一因になったと考えられる。しかしオーウェルが持っていたこのイメージは、スペイン内戦で実戦を経験したことで崩れることになった<sup>5</sup>。彼は評論の「右であれ、左であれ、わが祖国」において次のように述べている。

At certain moments Franco was able to scrape together enough aeroplanes to raise the war to modern level, and these were the turning-points. . . . I know that what I felt when I first heard artillery fired “in anger”, as they say, was at least partly disappointment. It was so different from the tremendous, unbroken roar that my senses had been waiting for for twenty years. (*CEJL* vol. 1 538)

オーウェルは飛行機の登場が、従来の伝統的な戦いのスタイルから近代戦への移行をもたらしたと主張している。その一方で初めて聞いた大砲の砲撃が、自分が想像していたものほど迫力がなかったことに失望したと告白している。スペイン内戦はオーウェルが抱いていた戦争に対する幻想的なイメージを崩すとともに、オーウェルの小説に人間に対する近代の機械文明の脅威という新たなテーマをもたらした。オーウェルは負傷したことによってスペインから帰国し、『カタロニア賛歌』を執筆したあと、『空気を求めて』を書いている。この小説において、主人公のジョージが生まれ故郷のロウワービンフィールドを訪れ、昔の牧歌的な光景から変わりかた姿に衝撃を受けた直後、近代兵器の象徴である飛行機からの爆弾の誤爆に遭遇する。この描写は次のようなものとなっている。

But the next moment—ah!

BOOM—BRRRRR!

A noise like the Day of Judgment, and then a noise like a ton of coal falling onto a sheet of tin. That was falling bricks. I seemed to kind of melt into the pavement. ‘It’s started,’ I thought. (233)

爆弾の爆発を最後の審判のようだと喩え、それが人類の終焉につながることを予感させている。

『空気を求めて』は第二次世界大戦が起きる3か月前の1939年6月に出版されており、間近に迫った戦争をこの爆撃の描写で予期させるものとなっている。『空気を求めて』と同様に、

戦争の始まりを最後の審判の日に喩えた作品として、トマス・ハーディ (Thomas Hardy, 1840-1928) の詩「海峡の砲撃」(‘Channel Firing’, 1914) が挙げられる。この詩は第一次世界大戦が起きる3か月前の1914年4月に書かれており、次のような『空気を求めて』の描写と酷似したスタンザで始まっている。

That night your great guns, unawares,  
Shook all our coffins as we lay,  
And broke the chancel window-squares,  
We thought it was the Judgment-day (1-4)

オーウェルの『空気を求めて』の爆撃の描写は、最後の審判の日が来たと思われたことなどの共通点から、この「海峡の砲撃」を基にした可能性があるが、「海峡の砲撃」とは異なり市民の犠牲を描いている。これはスペイン内戦の影響であると考えられる。なぜならスペイン内戦は初めて兵士の上ではなく、市民を標的にした無差別爆撃が行われた戦争だからである。無差別爆撃という新たな戦い方が、当時スペイン内戦に関心を持っていた人々に衝撃を与えたことが、パブロ・ピカソ (Pablo Picasso, 1881-1973) が『ゲルニカ』(‘Guernica’, 1937) の絵画を制作して無差別爆撃の惨状を描いたことに表れている。彼と同様にオーウェルも無差別爆撃に衝撃を受けており、オーウェルは「スペイン戦争回顧」の中で、ゲルニカではなくマドリードの空襲について言及し、ロンドン市民がそれを聞いても落ち着いていられる現状を批判している (251)。メイヤーズは『オーウェル入門』の中で、絶滅戦争の危機に瀕して今滅びようとしている文明というテーマが、現代文学最大のテーマであり、『空気を求めて』はこれに属していると指摘している (112)。『空気を求めて』を近代科学に対する警告とみた場合、主人公のジョージがノスタルジアを抱いた過去の世界とは、人類が科学を手にしたがゆえに破壊の危機に瀕したそれ以前の世界とみることができる。オーウェルは評論「ウェルズ、ヒトラー、世界国家」(‘Wells, Hitler and the World State’, 1941) の中で、飛行機に代表される科学技術が悪



用される危険性について、“But unfortunately the equation of science with common sense does not really hold good. The aeroplane, which was looked forward to as a civilising influence but in practice has hardly been used except for dropping bombs, is the symbol of that fact.” (*CEJL* vol. 2 143) と述べている。ここで指摘されている飛行機が爆弾を落とす為に使われる例など、科学技術が市民の生活向上の為に用いられず、政治体制の維持の為にだけ使われる構図は、後の彼の小説『動物農場』での風車や、『1984年』での機械による監視社会によって描かれている。オーウェルが共産党による粛清事件であるバルセロナでの5月事件に巻き込まれたことで共産党に失望したという点が、オーウェルにとってのスペイン内戦の意義であるとの見方が現在でも有力である。しかし、たとえオーウェルがスペイン内戦に参加していなくても、内戦終結直後に起きた1939年の独ソ不可侵条約の締結により、他の左翼運動家と同様にソ連と共産党に幻滅することは避けられない。その為スペイン内戦のより重要な意義とは、オーウェルが抱いていた幻想的な要素を戦争から取りさらい、悪用される近代科学という新たなテーマをオーウェルの小説にもたらすことになった点であると考えられる。

第1章で筆者が指摘したように、オーウェルにとって機械は人々から厳しい労働を解放する存在であり、現代文明はそれを可能にするだけの技術力を持つに至っていると彼は考えていた。その一方で彼は『空気を求めて』においてジョージは過去の思い出のある故郷に逃げ込もうとするが、その町は近代化によって破壊されていたという悲劇を描いている。このように、オーウェルは機械文明に対して、人々をゆとりのある生活へ解放し得るものであると同時に悲劇ももたらし得るという両義的な立場を取っていた。マイケル・シェルダン (Michael Shelden, 1951-) は著書『人間ジョージ・オーウェル』 (*Orwell: The Authorized Biography*, 1991) において、自ら社会主義者を自称しながら社会主義の弱点を指摘し続け、小説を書くのに途方もない労力を注ぎながら、晩年に自分は本物の小説家などではないと告白するなどの矛盾が、オーウェルの人生と作品のいたるところに認められると指摘している。この原因について、シェルダンは、オーウェルはどんな対象であろうとつねにそれを両面から見たがる傾向があった為であるとして、この能力が作家としてのオーウェルの偉大さの源泉の一つであると述べている

(3-4)。オーウェルの機械に対する両義的な立場は彼の評論にも現れている。オーウェルはウィリアム・バトラー・イエイツ (William Butler Yeats, 1865-1939) についての評論「W・B・イエイツ」(‘W. B. Yeats’, 1943) において、“Of course, all praise of the past is partly sentimental, because we do not live in the past. The poor do not praise poverty. Before you can despise the machine, the machine must set you free from brute labour.” (CEJL vol. 2 276) と述べている。ここでオーウェルは、人々が過去の世界に感傷的な魅力を抱くのは、今その世界に実際に住んでいないからであり、もし彼らが機械文明以前の世界に住んでいれば、厳しい労働によってその世界を楽しむ余裕はないであろうと指摘している。その一方で、オーウェルの評論「E. I. ザミャーチン著『われら』の書評」(‘Review of *We* by E. I. Zamyatin’, 1946) の結末において、オーウェルは小説の『われら』の意義について “It is in effect a study of the Machine, the genie that man has thoughtlessly let out of its bottle and cannot put back again.” (CEJL vol. 4 75) と結論付けている。つまり『われら』とは、もはや後戻りできなくなった機械文明という悪用されかねないもろ刃の剣に対し、今後どう接していくべきなのかを人々に問題提起している作品であるとオーウェルは読み取っている。オーウェルは評論「歓楽の地」(‘Pleasure Spots’, 1946) において、人間らしい生活とは、温かみや人との関わりと同時に、孤独と物事に喜びの驚きを見出す心も保てるものであると述べた上で、社会の機械化に対して、“And the instinctive horror which all sensitive people feel at the progressive mechanisation of life would be seen not to be a mere sentimental archaism, but to be fully justified.” (CEJL vol. 4 81) と述べている。ここで指摘されている機械化された生活の進行に対する本能的恐怖は、『空気を求めて』においてジョージが自身の故郷が破壊されたことを知った後、爆撃機に爆弾を落とされる場面によって象徴的に描かれている。

オーウェルは評論「科学とは何か」(‘What is Science?’, 1945) において、科学者とは時の政府と提携関係にあり援助を受けるものである為、文学者よりも政府からの要求に応じやすいという問題点を挙げている (CEJL vol. 4 11)。その一方でオーウェルは、イギリスとアメリカの物理学者の中には、政府からの原爆を作るようにとの要請に対して、それが何に使われるのか

を理解することができ、その要請を拒否した集団がいた事実を指摘している。この原爆の製造を拒否した科学者たちに対し、オーウェルは次のような推測を行っている。

Here you have a group of sane men in the middle of a world of lunatics. And though no names were published, I think it would be a safe guess that all of them were people with some kind of general cultural background, some acquaintance with history or literature or the arts—in short, people whose interests were not, in the current sense of the word, purely scientific. (*CEJL* vol. 4 13)

ここでオーウェルはこの科学者たちは、歴史や文学、芸術といった何かしらの一般教養を身につけていた人々であり、科学にのみ関心を抱いた者たちではなかった為、そのような決断を下せたと推測している。アイザiah・バーリン (Isaiah Berlin, 1909-97) は著書『歴史の必然性』 (*Historical Inevitability*, 1966) において「理解するとは、パターンをとらえることである。歴史的説明を与えるとは、たんに出来事の継記についての記述をすることではなく、それを理解しうるものとする事である。理解しうるものとするとは、基本的なパターンを明らかにすることである。」(177-78) と述べて、歴史を学ぶ意義を、歴史の中から型を見つけ出してそこから世の中を把握することであるとしている。オーウェルの歴史に対する考えもこれと同じもので、これらの科学者が歴史の教養を身につけていたことで、原子爆弾の製造を要求する政府の意図を見抜くことができたと考えているのである。その為、オーウェルは悪用される科学技術の問題を防ぐ為には、正しい歴史の教育が重要であると考えていた。オーウェルは「科学とは何か」において、もし科学を重視して物理や化学や生物学といったものを増やし、代わりに文学や歴史を減らすという教育に移行すれば、人々の思考の幅が狭まり、政治を理解する能力が欠けてしまうと述べている (*CEJL* vol. 4 12)。オーウェルは真実を記載した歴史を人々が学ぶことを重視し、それにより近代科学が政治的に悪用されることを防ぐ知性を人々が身につけ、機械が有効活用されることでディセンシィが守られる社会が築けると考えていたのである。

### 第3章「自己保存の本能」

#### 1. トラウマを解消しようとする心理

オーウェルは評論「チャールズ・ディケンズ」において、“what is the use of changing the system before you have improved human nature?”という立場と、その逆の“how can you improve human nature until you have changed the system?”という2つの立場が常に存在し続けていると指摘している（*CEJL* vol. 1 427）。オーウェルはどちらの立場も無視してはならないと感じており、まず前者の「人間の本性を改善せずに社会のシステムを変えても意味がない」という立場に基づき、第1章で筆者が指摘したように、悲劇的小説を書くことでたとえ悪に敗れたとしても価値を保ち続ける善の精神が存在することを読者に抱かせ、人々に道徳心を抱かせようとした。さらに、オーウェルは人が生来的に持つ本能により、人は無意識の衝動によって道徳的な行動も、不道徳な行動も行う存在であると考えており、小説を通して人が持つ本能の様々な働きとそれに伴う心理を解明することで、人々の心にディーセンシィの道徳心を保たせ、人間の本性を改善させようとした。その一方で、後者の「社会のシステムを変えなければ、人間の本性は改善できない」という立場も同様にオーウェルは重視しており、特に機械が有効に活用されることで人々の生活に余裕を生み出させる必要性を強調している。また、人は社会規範に無意識に従う存在であるとオーウェルは考えていた為、その社会規範を形成する政治においてもディーセンシィの道徳心が守られることを求めていた。特にオーウェルがナショナリズムと呼ぶ政治的に偏向した見方を人は無意識的にとる危険性をオーウェルは認識しており、その思考を『1984年』で、その世界に住む人々の思考形態として登場させ、絶えず悪の敵国を打ち破る偉大なるビッグ・ブラザーを崇めるカルト崇拝の思想として描いている。主人公のウィンストンも最終的にビッグ・ブラザーを愛することになるが、そこに至る経緯が、『1984年』で克明に描かれているのである。

ウィンストンは子供のころ、優しい母の目の前で飢餓感から「自己保存の本能」により妹の

食べ物を奪うなどの身勝手な行動をとり (188)、それが心の傷として現在にも残っている描写が何度も登場する。彼が誤ったことをしても「欲張ってはいけないよ」と優しくたしなめるだけの母の温かい愛情の中で育った子供の身勝手さの問題が『1984年』の中で強調されている。このオーウェルの子供に対する悲観的な態度は、彼自身の子供時代の体験が影響していると考えられる。オーウェルの自伝的評論「楽しかりし日々」では、イースト・サセックスのイーストボーンにある全寮制進学予備校のセント・シプリアン校において、親から引き離され、体罰を伴う冷酷な恐怖の中で育つ子供の心の傷が詳細に描かれている<sup>6</sup>。ここではサンボ (Sambo) とあだ名されたルイス・ウィルクス (Lewis Wilkes, 生没年不詳) とその妻でフリップ (Flip) とあだ名されたシシリー・ウィルクス (Cicely Wilkes, 生没年不詳) の学校創設者の夫妻から、オーウェルは虐待に近い扱いを受けていたと告発されている。さらにオーウェルは校長夫妻のお気に入りのジョニー・ヘイル (Johnny Hale, 生没年不詳) という少年に殴られたエピソードを挙げ、次のように述べている。

I lived in a world of boys, gregarious animals, questioning nothing, accepting the law of the stronger and avenging their own humiliations by passing them down to someone smaller. . . . I had nothing to help me except my dump selfishness, my inability—not, indeed, to despise myself, but to *dislike* myself—my instinct to survive. (*CEJL* vol. 4 362-63)

ここでオーウェルはその学校生活は群生動物の世界と同じであり、自らが持つ生存への本能のみが頼りであったと述べており、この学校生活の過酷な体験が、その後のオーウェルに人間の本能的な行動を意識させるきっかけを生んだことが示唆されている。ヘイルという少年の暴力的な気質が示しているように、オーウェルにとっての「自己保存の本能」は単に自己を守る習性を指すのではなく、他人を傷つけようとする暴力的な衝動をも意味している。また、セント・シプリアン校において、オーウェルは寝小便をしてしまった為に校長に2度鞭打たれて泣いた

際の心情を、次のように表している。

I was crying partly because I felt that this was expected of me, partly from genuine repentance, but partly also because of a deeper grief which is peculiar to childhood and not easy to convey: a sense of desolate loneliness and helplessness, of being locked up not only in a hostile world but in a world of good and evil where the rules were such that it was actually not possible for me to keep them. (*CEJL* vol. 4 333-34)

ここでは生理的な寝小便による罰を受けた体験により、何も知らず何も望まなくても人は現実的に守れない規則が存在する善悪の世界に閉じ込められている為、避けることができない罪を犯すことがあるという無力感を悟ったとオーウェルは述べている。この生理的な罪を人は犯し得ることをオーウェルが学んだ体験は、『1984年』でウィンストンが少年時代に何もわからないまま本能的にわめき散らし妹の食事すら奪うといった行為に反映されている。オーウェルは「楽しかりし日々」において、“The weakness of the child is that it starts with a blank sheet.” (*CEJL* vol. 4 368) と指摘している。しかしこの子供の弱点である白紙状態とは、子供の知性面での無知を指しており、子供には学校生活の過酷さに対処する知性を持っていない点を指摘したものである。オーウェルは、子供は精神面において無垢な純粋さと「自己保存の本能」に従う残酷さの両方を当初から兼ね備えていると考えていた。新約聖書 (New Testament) の『マタイによる福音書』 (*Gospel of Matthew*) の第 18 章 3 節においてイエス・キリスト (Jesus Christ, 4BC?-30?) が人々に、“Verily I say unto you, Except ye be converted, and become as little children, ye shall not enter into the kingdom of heaven.” (51) と説いているのと同様に、オーウェルは子供たちが持っている自然の中に驚きや喜びを見つけるような無垢な精神が、大人たちにも必要であると考えていた。しかしその一方で、オーウェルは自身の体験を通して、人が子供の時から持つ生来的な暴力性も意識せざるを得なかったのである。

オーウェルの子供に対する態度は、イギリスにおける教育論に大きな影響を与えたジョン・

ロック (John Locke, 1632-1704) の教育思想に共通するところがある。ロックは著書『子供の教育』(*Some Thoughts Concerning Education*, 1693) で自身の教育思想を述べており、ロックはその結論部において、オーウェルと同様に子供を白紙 (“white Paper”) であると主張している (265)。その一方でロックは、子供のしつけには限界があり、あらゆる手段を講じても、結局のところ人の性向は自然が最初に定めた方向に向かうことは確かであるとも指摘している (163)。その理由についてロックは、人間の心には神によって一定の性格が刻印されているので、これらの性格は、まったく反対のものに変形させることはできず、人々が目指すべきことは、自然が与えてくれているものを最大限に活用し、その持ち主が最も陥りやすい悪癖と誤りを防ぎ、自然がその人に与えた能力をできるかぎり発揮できるようにすることであるとしている (122)。人の性向は自然が最初に定めた方向に向かうと考えていたロックと同様に、オーウェルは、人は生来的に様々な本能を持ち、その本能に無意識に従ってしまうと考えていた。さらにオーウェルが生きた当時の教育においては体罰が当然のこととして行われており、子供が犯す無意識に行われる過ちの行為に対しても容赦なく体罰が加えられる環境と、それに伴う心の傷を、オーウェルは「あの楽しかりし日々」で描いている。これらのことから導き出せる重要なポイントとして、子供は愛情のみを受けても恐怖のみを受けても、結果的に大人になったときにトラウマが残るということを、オーウェルは『1984年』と「楽しかりし日々」において示しているのである。オーウェルは評論「聖職者の特権—サルバドール・ダリに関するいくつかの覚書」(Benefit of Clergy: Some Notes on Salvador Dali, 1944) の冒頭において、“Autobiography is only to be trusted when it reveals something disgraceful. A man who gives a good account of himself is probably lying, since any life when viewed from the inside is simply a series of defeats.” (CEJL vol. 3 156) と述べている。ここでオーウェルの人生観が表されている。人生とは失敗の連続であり、人生の過程においてトラウマが残る体験をするのは避けられないという現実を、オーウェルは意識していた。このトラウマを解消する方法について、「楽しかりし日々」ではその結末において、長い年月が彼の中にある全てのその学校に対する感情を驚くほど小さくし、そのトラウマを解消してくれたと回顧している (CEJL vol.

4 369)。一方の『1984年』では、その結末でウィンストンは党の教義を受け入れ、過去の母との記憶を打ち消したことで、そのトラウマから逃れているのである。

## 2. 生まれ変わったという錯覚の危険

『1984年』の社会において、矛盾する過去の記憶を両立させることが求められていた。党員に要求される能力として「二重思考」(*doublethink*)という独特の思考形態が登場している。

「二重思考」とは、2つの矛盾する信念を心に同時に描き、その両方を受け入れる能力であると定義されている。さらに、「過去は変わるものである」という党の中心的教義の信念を基にして、自分の記憶を党が主張する過去に変えるというものである(244)。『1984年』の結末において、ウィンストンは母と過ごした日々を思い出している。しかし彼はそれを偽りの記憶であるとして否定し、ビッグ・ブラザーを愛し始めた場面で物語が終わる。これは二重思考やビッグ・ブラザーへの崇拝といった党の教義を受け入れることにより、ウィンストンは過去の少年時代のトラウマを解消することに成功したことを意味している。さらにこの結末は、人がカルト的な教義を受け入れて生まれ変わったという錯覚によって昆虫のような存在となり、オブライエンのような残酷な人物となる悲劇を描いているのである。オーウェルは評論「リア王、トルストイ、道化」において、“One does not necessarily get rid of that kind of temperament by undergoing religious conversion, and indeed it is obvious that the illusion of having been reborn may allow one’s native vices to flourish more freely than ever, though perhaps in subtler forms.” (*CEJL* vol. 4 295) と述べている。ここでオーウェルは、人間の暴力的な気質は宗教的回心の経験によって必ずしも取り除かれるわけではなく、逆に生まれ変わったという錯覚が、その人間の生来の悪徳をより一層のさばらせるようになる可能性があると主張している。トルストイは著書『懺悔』(*My Confession*, 1882)において自身が次のような悟りを開き、宗教的回心を果たしたと述べている。



どんな信仰が誰にどんな解答を与えたにせよ、信仰のすべての解答は人間の限りある生存に無限の意義—病苦、貧困、死によっても消えるところのない意義—を付与している。つまり—信仰のなかにのみ生の意義と可能を見いだしうるのである。いったいこの信仰とは何であろう？そして私が悟りえたところでは、信仰とは単に眼に見えぬ物を示現することでもなく、啓示でもなく（これは信仰の特徴の一つを表現したものにすぎない）、神に対する人間の態度でもなく（まず信仰を定義し、つぎに神を定義しなければならない。神を通して信仰を定義してはならない）、またよく思われているように、人間に対して言われたことに同意することでもなくて—信仰とはそれを得れば人間がみずからを滅ぼすことなく生きて行けるような人間生活の意義の知識なのである。信仰は生の力である。(378)

ここでトルストイは、信仰の本質は、病苦、貧困、死によってすらも消えることの無い意義を生に与えることであり、これにより人は自殺をせずに生きていくことが可能となるという、自身の悟りを告白している。人生とは苦しみである為、人は信仰を得ない限り、死に勝る生きる意義を見出すことができないという、トルストイの思想が表されている。その一方でトルストイは『懺悔』の中で、悟りを得る前には暴行や殺人を含めて私の犯さなかった犯罪はなかったとも告白している(349)。オーウェルは、「リア王、トルストイ、道化」において、トルストイの人生についての研究書を読むと、彼は召使に暴力をふるうといった攻撃的な気質を生来的に保持していた点を指摘している。さらにアーネスト・クロスビー(Ernest Crosby, 1856-1907)のパンフレット「シェークスピアと労働者階級」(‘Shakespeare and the Working Classes’, 1903)の序文において、トルストイがシェークスピアの作品は駄作であると批判したことについて、時を超えて人々に愛され続けているシェークスピアの作品は、少なくとも時の試練に耐えた価値のあるものであり、トルストイがシェークスピアの作品を明確な根拠もなく駄作であると批判したのは、トルストイの回心後にも捨て去られていなかった彼の生来の攻撃的気質が原因であったとオーウェルは推測している(CEJL vol. 4 294-95)。

また『エミール』(*Emile*, 1762)において子供を自然と接する形で育て、人の生来の善なる本性を育む教育論を展開したジャン・ジャック・ルソー (Jean-Jacques Rousseau, 1712-78) は自伝『告白録』(*Les Confessions*, 1782-89)において自身の回心の体験を述べている。「学問と芸術との進歩は、風俗を頹廢させたか、純化させたか?」という、1749年のディジョンの学会における懸賞論文の題を目にしたとき、「これを読んだ瞬間、私はべつの世界を見、べつの人間になった。」とルソーは感じ、自身の回心の体験を告白している (351)。この体験をもとにルソーは懸賞論文『学問芸術論』(*Discours sur les Sciences et les Arts*, 1750)を執筆し、そこで学問、芸術、技術の進歩は人間を墮落させると主張して、その思想が都会の墮落から離れた自然界における子供の生来の個性を尊重する『エミール』で述べられる教育論へとつながっていく。しかし、回心をはたしたルソー自身は、回心前に生まれた自身の二人の子供への処置と同様に、回心後に生まれた自身の三人の子供達も育てることなく孤児院に送り捨てるといった奇行を続けていたことを『告白録』においてルソーは述べ、結果的に最初の二人の子供たちは早く死に、残りの三人の子供たちは消息不明となる事態を引き起こしている (358)。ルソーはこのことを自身の回心の体験談の直後に告白している為、彼は理想を心に抱く一方で、その理想を実現させることができなかつた現実の過酷さも同時に認識していたと考えられる。彼の行動も回心が善行をもたらすとは限らない一例である。

初期のキリスト教徒のパウロ (Paul, 10?-67?) やアウグスティヌス (Augustine, 354-430) が回心によって信心を得たように、キリスト教の伝統のある西洋社会において回心という行為は重要な要素であり、また社会的には回心は改心と同じく悪い心を悔い改めるものとして見られている。オーウェル自身が社会主義者になる事で一種の回心を成し遂げた一方で、スペイン内戦において同じく回心を果たして人間愛に燃えているはずの共産主義者や無政府主義者達の横暴を目撃している<sup>7</sup>。オーウェルは心のわだかまりが取り除かれた回心の後に、生来の本能的な狂暴性を人が曝け出す可能性があることを意識していた。なぜ人は生まれ変わったという感覚の後に生来の本性をさらけ出して暴力的になることがあるのかという問題について、ロックの『子供の教育』にその答えとなり得る意見が書かれている。厳しくやかましい教育から

青年が解放されるやいなや、とたんにだらしなくなり、贅沢三昧と道楽にうつつを抜かすという事例には枚挙にいとまがないとロックは指摘している。この原因の一つに、成人の自由とは、子供時代に禁じられていたことを思う存分に楽しむことであると、彼らが安易に思い込んでしまう為だとロックは考えている (153)。このロックの指摘から、自分は生まれ変わったという錯覚が起きたとき、人は今まで禁じられていたことを存分に楽しむことができるという錯覚にも同時に陥る危険性があることが読み取れる。この危険な心理は、オーウェルの『葉蘭をそよがせよ』において、貧乏生活を送っていたゴードンが突然大金を手にした際、その金をどのようにうまく使っているのかわからず、高級レストラン、酒場、売春宿で一夜にしてそれを使い果たし、泥酔した挙句に警官を殴りつけて逮捕されるというエピソードでも描かれている。

ルイス・ランボー (Lewis Rambo, 1943-) は著書『宗教的回心の研究』 (*Understanding Religious Conversion*, 1993) において、彼が 200 名以上の宗教的回心者にインタビューをした結果を述べている。その結果によると、回心者に見られる共通のテーマは、「神との関係の感覚」、「罪から解放されたという感覚」、「使命感や生きることの理由を手に入れた感覚」を持つことであったとランボーは述べている。回心者は「神との関係の感覚」を持つことで、愛の源泉に抱かれていると感じ、それにより回心者自身が他者をもっと十分に愛せるようになるような力を得たとの証言を得ている。さらに回心者たちは、「罪から解放されたという感覚」によって罪悪感が取り除かれ、その苦痛からの解放感に浸ることができたという。さらにランボーによると、多くの回心者にとって回心は、自己を見る視点のみならず、宇宙全体を見る視点の深遠な転換であったとしている。彼らは人生がすっかり新たに始まりつつあり、神が中心となって自己が変容させられる感覚を得て、かつて分裂していた自己や魂が統一されることで心内の闘争が終わりを告げ、平穏な感覚を持つに至った回心者が多かったとランボーは述べている (160-62)。オーウェルは子供時代に人々が受ける心的な傷の大きさを身を持って意識しており、それを『1984 年』において、ウィンストンが心の傷を癒す力を持つ教義を最終的に受け入れることに反映させている。ランボーの調査で判明した回心者に多く見られる心情の「罪から解放されたという感覚」をウィンストンは持つことで、彼は母への罪の意識を打ち消し、

心内の闘争が終わりを告げて平穏な感覚を持つことができた。しかしそれはカルト的な教義であった為、結果的にウィンストンは昆虫のような者たちへの仲間入りを果たしたのであり、これは人が心を入れ替えた後にこそ、生来的な暴力性を曝け出してしまう危険な状態に陥る可能性があることをオーウェルが理解していたが故の『1984年』の結末であった。オーウェルは回心の際の危険性を『1984年』で描き、人々にそれを意識させることで、その心理に人々が陥るのを防ごうとしたのである。

### 3. 死に対する拒絶

セント・シプリアン校での体験によりオーウェルが認識した、生き残りをかける為に発揮される自己の安全を保とうとする本能は、オーウェルの小説で色濃く反映されている。オーウェルは抗えない衝動を人に与える力の解明に重点を置き、その無意識の力によって主人公が破滅するストーリーを描こうとした。このような結末は、『ビルマの日々』において見ることができる。エリザベスは主人公のフローリーに対し、彼が先天的に持つ顔のあざに嫌悪感を抱いた為に彼のプロポーズを拒絶し、彼を自殺に追い込んでしまう。その際の彼女の心理について、次のように述べられている。

She knew only that he was dishonoured and less than a man, and that she hated him as she would have hated a leper or a lunatic. The instinct was deeper than reason or even self-interest, and she could no more have disobeyed it than she could have stopped breathing. (291)

ここでは、本能は理性や私欲よりも根強く、呼吸を抑えられないように、フローリーへの嫌悪感をエリザベスは抑えることは不可能だったと述べられている。ここではエリザベスの危険な

ものを回避しようとする「自己保存の本能」が裏目に出た形になっている。さらにここで、オーウェルの文学作品の特徴である、人の行動と感情における、理性に対する本能の優位性が明確に述べられている。また『1984年』において「自己保存の本能」は、ウィンストンが心理的に耐えられない存在である鼠による拷問を受けた際に、恋人のジュリアを裏切るという形で表れている(329)。ウィンストンの恐怖感は鼠に象徴されている。この鼠を用いた拷問の目的について、党中枢メンバーのオブライエンはウィンストンに対して次のように説明している。

If you are falling from a height it is not cowardly to clutch at a rope. If you have come up from deep water it is not cowardly to fill your lungs with air. It is merely an instinct which cannot be disobeyed. It is the same with the rats. For you, they are unendurable. They are a form of pressure that you cannot withstand, even if you wished to. (327)

ここでオブライエンは、人が高いところから真っ逆さまに落ちる時にロープをつかみ、深い水の底から上がってきたとき、肺いっぱい空気をおおうことはどうにも抗うことのできない本能であり、この本能による圧力と同様に、ウィンストンにとって耐えられない存在の鼠は、我慢したいと願っても我慢することができない圧力であると述べている。この“an instinct which cannot be disobeyed”という要素はオーウェルの小説において共通のテーマであった。この心理的圧力の一つである「自己保存の本能」は、『1984年』においてウィンストンは将来必ず党に捕まり殺されることが分かっているにもかかわらず、自殺して党の教義を拒絶するという選択肢を取らないことに反映されている。自殺について、ウィンストンは次のように述べている。

Even the one plan that was practicable, suicide, they had no intention of carrying out. To hang on from day to day and from week to week, spinning out a present that had no future, seemed an unconquerable instinct, just as one's lungs will always

draw the next breath so long as there is air available. (175)

ここでウィンストンとジュリアが自殺という手段を取るつもりはなく、日々できるだけ生き長らえようとするこの心理は、吸える空気のある限り、肺がいつまでも呼吸を止めようとしないうのと同じく克服しえない本能によるものであると述べられている。ビルマで孤立した生活を送るフローリーにとって唯一の生きがいであったエリザベスとの幸せな家庭生活という夢が打ち砕かれて彼が自殺する結末の『ビルマの日々』とは対照的に、『1984年』でウィンストンは自殺するという選択肢を取らないのは、身体的な苦痛をさけようとする「自己保存の本能」が『1984年』では強く反映されているからである。党に捕らえられたウィンストンが身体的な拷問を受けた際に、彼の絶望的な感情を次のように述べている。

Never, for any reason on earth, could you wish for an increase of pain. Of pain you could wish only one thing: that it should stop. Nothing in the world was so bad as physical pain. In the face of pain there are no heroes, no heroes, he thought over and over as he writhed on the floor, clutching uselessly at his disabled left arm. (274)

このように人が死に直面するほどの身体的な苦痛に対し、英雄的な行動をとることは不可能だという心境をオーウェルが描いた要因として、彼自身がスペイン内戦において首に銃弾を受け、死に直面する体験をしたことが影響していると考えられる。『カタロニア賛歌』において、オーウェルが不注意によって塹壕の中で首に銃弾を受けた時に感じた、人が死ぬ直前の感情を次のように記録している。

My first thought, conventionally enough, was for my wife. My second was a violent resentment at having to leave this world which, when all is said and done, suits me so well. I had time to feel this very vividly. The stupid mischance infuriated me. The

meaninglessness of it! To be bumped off, not even in battle, but in this stale corner of the trenches, thanks to a moment's carelessness! (139)

ここで死に直面しているオーウェルは戦争に参加した大義を心に抱く余裕はない。ただ妻のこと、一瞬の不注意で自分が無意味に死ぬことに対する憤慨を感じることはできないでいる。この体験で得られた心理が『1984年』において、次のようなウィンストンの心理描写の中に取り入れられている。

And it is the same, he perceived, in all seemingly heroic or tragic situations. On the battlefield, in the torture chamber, on a sinking ship, the issues that you are fighting for are always forgotten, because the body swells up until it fills the universe, and even when you are not paralysed by fright or screaming with pain, life is a moment-to-moment struggle against hunger or cold or sleeplessness, against a sour stomach or an aching tooth. (117)

ここでは生命は絶えず身体的な痛みと奮闘する必要があり、戦場、拷問室、沈みゆく船のような絶望的な状況において体に苦痛を受けた際には、傷ついた身体は宇宙の大きさまでに膨張するほどの影響力を持ってしまう為、人は戦う為の大義を必ず忘れてしまうとウィンストンは感じている。つまりオーウェルは、人は身体に大きな苦痛を受けるとその痛みは人の感情も支配してしまう為、人は大きな苦痛の中においては大義の感情を保つ余裕が無くなってしまふことをここで示そうとしている。このような「自己保存の本能」による心理をウィンストンは持っている為、彼は最後まで  $2+2=4$  の良識を保ちながらビッグ・ブラザーと戦って英雄的な死を迎えることはできず、最終的に党に洗脳されてしまう。

オーウェルと同じくスペイン内戦に参加したヘミングウェイは、その時の体験をもとに『誰がために鐘は鳴る』を執筆している。そこでは主人公のロバートは、仲間たちを逃がす為に自

分が犠牲となり、最後まで一人で戦い続けるという『1984年』の結末とは対照的な英雄的な結末を迎えている。ヘミングウェイが熱中していた闘牛について解説した『午後の死』(*Death in the Afternoon*, 1932)によると、ヘミングウェイは人生が現実であるという価値観を否定し、誰も逃げるできない死こそが現実であるとの立場を取っている(251)。さらに死こそが人が他者に与えられる最上の贈り物であると感じられるほどの瀕死の重傷を負った闘牛士に対し、延命処置を取ることに疑問を呈している(209)。今村楯夫(1943-)の著書『ヘミングウェイ—喪失から辺境を求めて』(1979)によれば、『午後の死』で描かれる死とは、芸術性を伴いその終焉の時に向けて準備されねばならず、その時にまで培われてきた人生の規範を発揮する瞬間であると主張している(117)。これらのヘミングウェイの死生観によれば、死とは恐れる必要のないものであり、ロバートが最後に仲間たちを脱出させる為に捨て石となり、敵であるベルレンド(Berrendo)中尉を機関銃で撃つという最後の場面における主人公の死は、他人を助けるという大義を伴うものである為、避けるべきものではなくなる。さらに鉄道爆破の任務の際に、負傷したカシュキン(Kashkin)をロバートは安楽死させたことが言及されているが、これも正当化される行為となる。第1章で筆者が指摘したようにスペイン内戦の記憶はオーウェルに、人は簡単には人に銃を撃てないことを気付かせ、ディーセンシィへの確信を強めはした。しかし彼が実際に銃で撃たれた際、『誰がために鐘は鳴る』のロバートとは異なり、死ぬ間際にまで大義の感情を維持することはできなかった。その結果、オーウェルはヘミングウェイとは異なり、スペイン内戦後にも英雄が大義の為に戦って死ぬといったストーリーを描くことはできなかった。その代り「自己保存の本能」により、人は大義の感情に沿って自由に行動できるわけではないという、オーウェルが見出した別の現実を、彼は『1984年』などの小説で描いているのである。

メイヤーズは『オーウェル入門』において、『1984年』が力強い作品である所以について、オーウェルの個人的体験との関係から、“The personal elements in *1984* intensify its considerable power; for Orwell is able to fuse his primitive fears of childhood vulnerability, expressed in ‘Such, Such’, with his intuition of extermination camp atrocities, the central



trauma of our time.” (47) と述べている。ここでメイヤーズは、オーウェルはセント・シブリアン校で体験した自身の根源的恐怖感を、ウィンストンが受けた拷問の場面で曝け出したと指摘している。このメイヤーズの言う根源的恐怖感は、たとえ他人を犠牲にしても死を免れたいとする本能的な感情として『1984年』の拷問の場面で描かれている。さらにメイヤーズは、『ガリヴァー旅行記』の第2部で、2匹のネズミがガリヴァーを“*One of them came up almost to my Face; whereupon I rose in a Fright, and drew out my Hanger to defend my self.*” (132) と襲う場面から、オーウェルは鼠の拷問の着想を得たと考えている (149)。オーウェルは、『ガリヴァー旅行記』を子供の頃に読んでおり、これは信ぴょう性のある推測である。ただし、鼠が死に直結するほどの恐怖感をウィンストンに与えているという面で、トルストイの『懺悔』における鼠の描写もオーウェルにインスピレーションを与えた可能性がある。オーウェルは評論「リア王、トルストイ、道化」を執筆する為に、トルストイについて調べているからである。トルストイは『懺悔』において自らの回心に至る前に抱いていた心理的な恐怖感を、次のような東洋に昔から伝わる野獣に襲われた旅人の寓話を用いて表している。

私もこれと同じで、私を八つ裂きにしようとしている死の竜がかならずや待ち構えているのを承知で生の小枝につかまっているのだ、そしてなんで自分がこんな苦しみにはまり込んだのか分からずにいるのである。私も今まで自分を慰めてくれた蜜を吸おうとしてみる。が、この蜜はもはや私を喜ばせてはくれない。しかも白と黒の鼠は昼夜の別なく私のつかまっている小枝をかじりつづけている。私には竜の姿もはっきり見えるし、蜜がもはや自分にとって甘くないこともよく分かる。私に見えるのはただひとつ避けがたい竜と鼠一で、それから眼をそむけることはできない。しかもこれは寓話どころの騒ぎではなく、まことの、議論の余地のない、誰もが承知している真理なのである。(358)

ここでは鼠が自らの生命がかかっている枝を食いちぎろうとし、自分はそれから目を離すことができないという比喩に象徴されている、人は逃れられない死を直視せざるを得ないという事

実こそがこの世の真理だとトルストイは述べている。この寓話と同じように、古代の中国では頻繁に行われていたとオブライエンが述べる鼠を使った拷問により、ウィンストンは死を意味する鼠を凝視することを強いられて屈服し、今まで蜜のように彼を慰めてくれたジュリアは意味を持たなくなり、死の恐怖から逃れる為に彼はジュリアを裏切ってしまう。

オーウェルは評論「チャールズ・ディケンズ」においてトルストイとディケンズを比較し、次のように述べている。

Why is it that Tolstoy's grasp seems to be so much larger than Dickens's — why is it that he seems able to tell you so much more *about yourself*? It is not that he is more gifted, or even, in the last analysis, more intelligent. It is because he is writing about people who are growing. His characters are struggling to make their souls, whereas Dickens's are already finished and perfect. In my own mind Dickens's people are present far more often and far more vividly than Tolstoy's, but always in a single unchangeable attitude, like pictures or pieces of furniture. (*CEJL* vol. 1 456)

ここでは、トルストイの小説では登場人物たちが物語を通して精神的成長を遂げるのに対し、ディケンズの描く登場人物の精神は最初から完成されているという違いを、オーウェルは指摘している。トルストイは著書『戦争と平和』(*War and Peace*, 1869)において主人公のピエール (Pierre) はフランス軍の捕虜となり、その際に銃殺の恐怖や激しい足の痛みといった苦痛を味わうが、この時プラトン・カラターエフ (Platon Karataev) に出会ったことから回心を果たしている。ピエールは恋人のナターシャ (Natasha) に回心後の心境について次のように語っている。

「よく人は言います—不幸だ、苦痛だって」とピエールは言い出した。「ですが、もし今、この瞬間にですね、人がぼくに向かって、捕虜になる前の自分でいたいか、あるいは

は最初からもう一度すべてをやり直したいかときいたら、一ぼくは、どうかもう一度捕虜になって、馬肉を食いたいと言うでしょう。われわれは歩きなれた道からほうりだされると、もういっさいが終わったように考えがちです。が、じつは、そこではじめて新しい、いい生活が始まるのです。命のあるあいだは、幸福もあります。前途には多くのものが、じつに多くのものがあるのです。これはぼく、とくにあなたに申し上げるのです」 と彼はナターシャのほうを向いて言った<sup>8</sup>。(328)

ここでピエールは、もし捕虜になっていなければプラトンに会うこともなく、回心を果たして人生の意義を見出すことができなかつたのであり、したがって、過酷な捕虜としての生活も無駄ではなかつたと感じている。農民出身で素朴な雰囲気を持つプラトンから、塩をかけて食べるジャガイモのおいしさを通して目の前の平素な食事の大切さ等を教えられ(166)、さらに彼の死から、人生とは地球儀の上で神をできるだけ大きく映そうと融合を繰り返す水滴であり、大きくなった水滴は地球儀の表面から消えていくという比喻によって表される、人生の宿命論的な真理をピエールは夢を通して導き出す。これにより回心を果たしたピエールは、その後単に彼の財産目当てで金を貸してくれるよう頼む者を拒絶し、真に困窮して相談に来る者には援助を惜しまないようになれるなど、良心に基づいた行動を躊躇いなくできるようになり(315)、最後にはナターシャと結ばれ幸福な結婚生活を得る。オーウェルが指摘しているように、トルストイは小説の中で、登場人物が様々な体験を通して精神的に成長して善人となっていく状況を描いており、人の精神面の向上がその人の幸福な生活にもつながると、読者に訴えかけたものとなっているのである。一方の『1984年』の結末において、ビッグ・ブラザーを愛するようになったウィンストンは、40年間にわたり何と無意味な誤解を続けていたのだろうか、とビッグ・ブラザーの肖像画の前で改悛し、現在の幸福感に浸っている(342)。どちらの作品も回心後に主人公が安らぎを見出す点で同じであるが、『1984年』の場合、回心の選択肢がビッグ・ブラザーの教義以外が消滅させられた環境にいる為、ウィンストンはそれを受け入れざるを得ず、ウィンストンは精神的成長を遂げることなく彼の良心は消え去り悲劇的な結末を迎える。

ここでオーウェルは、人は自分が属する環境の影響を受け入れざるを得ないというアメリカの自然主義文学の特徴を反映させており、環境が人に与える影響の強さを描いているのである。オーウェルにとって人生とは失敗の連続であり、特に子供のころのトラウマは大人になっても残り続け、そのトラウマを解消しようとする心理を人は持つとオーウェルは考えていた。しかし『1984年』の世界においては、その解消の方法がビッグ・ブラザーの教義への回心に限られているという異質な環境をオーウェルは描くことで、社会環境を改善しなければ人は善良にはなれないという主張を、オーウェルは強調しているのである。

人が自分の自由意思で行動できることには限界があり、人々が暮らす環境を変えなければ、人々の心にディーセンシイの道德心を保つのは不可能であるということ、オーウェルは意識していた。この意識は、『ビルマの日々』の結末において、エリザベスが結婚した後の次のような様子に描かれている。

Elizabeth has grown mature surprisingly quickly, and a certain hardness of manner that always belonged to her has become accentuated. Her servants live in terror of her, though she speaks no Burmese. She has an exhaustive knowledge of the Civil List, gives charming little dinner-parties and knows how to put the wives of subordinate officials in their places—in short, she fills with complete success the position for which Nature had designed her from the first, that of a *burra memsahib*.

(300)

ここでは環境の変化で新たな人生へと生まれ変わったという認識によって、人が生来的に持つ冷酷性が助長される可能性があるというオーウェルの考えが取り入れられ、エリザベスが結婚によって普段からふるまっていた冷酷な態度がいつそう際立つようになったとされ、ビルマ人の召使たちに恐れられる「偉大なる奥様」(“*burra memsahib*”)になったと述べられている。自殺したフローリーや弱者であるビルマ人たちにとっては悲劇的なこの結末を、オーウェルは

自然（“Nature”）が最初から用意していたものであると述べている。オーウェルは森や草原の自然を神聖視していたが、それとは別の、アメリカにおける自然主義小説の宿命論に基づく、遺伝による人の生来的な性格と、人が必然的な成り行きによって置かれる環境の2つの意味としての自然状態を、この小説においてオーウェルは冷酷な存在として描いている。エリザベスは白人が支配する植民地という環境において、仕事の為に現地に多く駐在する必要がある男性よりも、比率の上で圧倒的に現地では数の少ない若い女性という存在であり、多くの男たちから絶えず交際を求められて結婚へと行き着くのは自然な成り行きである為、この結末を自然が最初から用意していたものであるとオーウェルは表現しているのである。これは『1984年』において、ウィンストンが置かれた環境により、ビッグ・ブラザーの教義を受け入れることが自然の成り行きとなっている構図と同様の悲劇である。

オーウェルは人は生来的に「自己保存の本能」を持ち、個人の自由意思には限界があることを意識していた為、「人間の本性を改善せずに社会のシステムを変えても意味がない」という立場のみで人々の精神を善良なものにすることも限界があると考えていた。その為彼は、「社会のシステムを変えなければ、人間の本性は改善できない」という立場も重要であると考え、社会環境も同様に改善しなければならないと考えていた。そして政治によって人々が住む環境を改善することで、その環境が人々に自然とディーセンシィの道德心を保たせるものにする必要性をオーウェルは意識していた。オーウェルは本能的に嫌悪感を抱かせる過酷な社会を『ビルマの日々』や『1984年』で描き、圧政による環境が人々にもたらす自然の成り行きを描くことで、そのよう環境を形成する政治が行われてはならないという意識を読者に抱かせようとしたのである。

## 第4章「依存する対象を求める本能」

### 1. 中庸の精神

オーウェルにとってのディーセンシィには、キリスト教的美德が含まれている点が先行研究において指摘されている。そしてオーウェルは自分の著書に聖書からの引用をたびたび用いている。オーウェルは評論「ドナルド・マッギルの芸術」(“The Art of Donald McGill”, 1941)において旧約聖書 (Old Testament) の『伝道の手紙』(*Ecclesiastes*) の第7章から次の文章を引用し、賢すぎても愚かすぎても身を滅ぼしかねないとする中庸の精神を主張している。

there is a just man that perishes in his righteousness, and there is a wicked man that prolongeth his life in his wickedness. Be not righteous over much; neither make thyself over wise; why shouldst thou destroy thyself? Be not overmuch wicked, neither be thou foolish: why shouldst thou die before thy time? (*CEJL* vol. 2 165)

この聖書からの引用によるオーウェルの主張から、人はただひたすら道徳的なことのみを行うべきという極端な思想をオーウェルは抱いておらず、彼は中庸の精神を取り入れたディーセンシィの道徳を重視していたことが読み取れる。ウッドコックは著書『オーウェルの全体像—水晶の精神』において、オーウェルの中庸の精神はアルベール・カミュ (Albert Camus, 1913-60) の中庸の精神と共通していると指摘している。この点についてウッドコックはカミュの著書『反抗的人間』(*L'Homme Révolté*, 1951)において、カミュが中庸について説明している次の箇所を引用している。

中庸は反抗の逆ではない。反抗は中庸であり、歴史と混乱を通じて、中庸を命じ、擁護し、再生する。反抗の価値の起源そのものが、中庸は一部破壊されるだけであることを

保証する。反抗から生まれた中庸は、反抗によってしか生存することができない。中庸とは、知性によって永久に惹起され、支配される不断の闘争である。不可能も、深遠も征服しない。それらを通して均衡を見出すのである。われわれが何をしようとも、過激は人間の心の中で、孤独の場所を占める。われわれはみな心の内にわれわれの処刑場、罪悪、惨害を持っている。だがそれらを世界中にばらまくことは、われわれのつとめではない。われわれのなかの、また他人のなかのそれらを打ち倒すことである。(261-62)

ウッドコックはこのカミュの思想をもとに、時には過激すぎる表現を取ることもあったが、オーウェルは革命家ではなくカミュの言う反抗的人間であったと考えている(231)。つまり、オーウェルは社会主義者でありながらその社会主義を危険視する小説を執筆したのは、彼の持つ中庸の精神からくる、社会主義の精神の美德から過激な思想を抱いた者たちへの反抗心が原因であったとウッドコックは考えていることが読み取れる。カミュの思想によれば、自分や他人の心のなかに入り込んでくる過激な感情に反抗することが、中庸の精神であるとされる。このカミュの思想のもとになっているのは、フランス革命により多くの犠牲が出た反省であり、この歴史的事例をもとにカミュは『反抗的人間』で次のように述べている。

ジャコバン党のブルジョワ文明が、諸価値が歴史の上にあることを仮定する。そこでその形式的徳が、いやらしいごまかしをつくり上げる。20世紀の革命では、価値が歴史の運動とまじり合い、その歴史的理由は新しいごまかしを正当化している。この不規律に直面した中庸は、あらゆる道徳に現実的要素の必要なことを教える。つまり純粹にして単純な徳は、殺人的なのである。(257-58)

フランス革命により発足した国民議会は1789年にフランス人権宣言を採択した後に、ジャコバン派のマクシミリアン・ロベスピエール(Maximilien Robespierre, 1758-94)による恐怖政治へと発展したように、人間の心の中には悪徳が眠っている以上、あらゆる美德のもとに行わ

れる行動に対して反抗し、中庸を求める必要性をカミュは感じていた。カミュがフランス革命における自由という美徳のもとでの恐怖政治を念頭に置いていたのと同様に、オーウェルもスペイン内戦で人間愛に燃えているはずの共産主義者たちの横暴を体験している為、美徳による行動が暴虐に陥る危険性があることを認識していた点で両者は共通している。この危険性は、『1984年』のストーリーに影響を与えたザミャーチンの小説『われら』においても読み取ることができる。主人公のD-503は機械の動く動作に対し、次のような感激の感情を表している。

それから自問自答をした。なぜ美しいのか？ なぜこのダンスが美しいのか？ と。その答え。それは《不自由》な運動だからである。踊りのすべての深い意味は、まさに絶対的な美的従属と理想的な不自由にあるからである。われらの先祖が彼らの生活の最もインスピレーションにあふれた時（宗教的秘儀や、軍事パレード）に踊りに没入したということが事実なら、それが意味するのはただひとつのこと、つまり、不自由の本能が古来本質的に人間に固有なものだということである。今日のわれらの生活においては、われらは意識しているだけ…… (9)

ここでは、踊りや軍事パレードといった型にはまった動作に対して、人々は本能的に魅力を見出す存在であることがD-503によって述べられている。そしてこのダンスや軍事パレードといった型にはまった動作に対して人々が感じる美意識が、『われら』の世界を形成していることを示している。つまり『われら』で描かれている人々が過度に管理された世界は、集団における統一された動作に見いだされる美徳の感覚によって生み出され、その美徳がその世界の社会規範となったものなのである。一方の『1984年』では、悪の敵軍を打ち破る正義のビッグ・ブラザーの軍隊の戦況報告が絶えず人々に伝えられ、人々はその勝利の報告に熱狂する社会が描かれている。『1984年』の世界では、正義が悪を打ち破るという美徳の感覚に人々は囚われており、美徳の感覚によって社会規範が形成されている点で両者の作品は共通している。どちらの小説も、ある種の美徳によって極端な社会が形成された場合、それが本来の美徳から外れ



た残酷な社会を形成する危険性を表している。ここから人は美德の感覚に囚われて極端な行動をとってはならないという中庸の精神をオーウェルは重視しており、彼は中庸の精神をディーセンシイの道徳心に含めていたことが読み取れる。

また、オーウェルのディーセンシイには生来的な人権意識の感覚が含まれており、人間の尊厳を守るうえでも、オーウェルは中庸の精神を大切にしていた。オーウェルは人間というものは二面性を持つ存在であると考えていた。この二面性についてオーウェルは評論「ドナルド・マッギルの芸術」において次のように述べている。

The Don Quixote-Sancho Panza combination, which of course is simply the ancient dualism of body and soul in fiction form, recurs more frequently in the literature of the last four hundred years than can be explained by mere imitation. . . . Evidently it corresponds to something enduring in our civilization, not in the sense that either character is to be found in a “pure” state in real life, but in the sense that the two principles, noble folly and base wisdom, exist side by side in nearly every human being. If you look into your own mind, which are you, Don Quixote or Sancho Panza? Almost certainly you are both. There is one part of you that wishes to be a hero or a saint, but another part of you is a little fat man who sees very clearly the advantages of staying alive with a whole skin. (*CEJL* vol. 2 162-63)

ここではミゲル・デ・セルバンテス (Miguel de Cervantes, 1547-1616) の著書『ドン・キホーテ』 (*Don Quixote*, 1605) に登場する聖人的な者であろうとするドン・キホーテ (Don Quixote) と、俗人的な感性を持つ短身肥満のサンチョ・パンサ (Sancho Panza) との関係のような聖と俗に対比される関係の登場人物が、文学に頻繁に登場する点をオーウェルは指摘している。この対照的な人格は『葉蘭をそよがせよ』において、金が重視される社会を憎んで定職に就かず、詩人になることで詩によって表現できる神聖なものを追求しようとした主人公の

ゴードンと、彼の恋人であり彼に定職について他の人々と同じ生活を送ることを促す常識的な感覚を身に着けているローズマリーの関係に表れている。ここでオーウェルは前者の態度に対して愚かしい (“folly”) ものと述べ、後者の態度に対しては英知 (“wisdom”) と呼んでいる。ゴードンは社会の愚かさから遠ざかろうとした為、スラムの屋根裏部屋に住み、1ポンド4ペンスの所持金しかなく餓死する直前にまで追い込まれる。最終的に彼はローズマリーの助けを得て、詩人になる夢を捨てて定職に就いたことで平穏な生活を得たが、当初のゴードンの態度は、いくら社会が愚かであってもその中に入り込む英知を人は持たなければ、それを拒絶した結果は餓死のような悲惨な状況に終わることを示している。オーウェルは古代ギリシャのイソップ (Aesop, 620BC?-564BC?) の寓話集『イソップ物語』 (*Aesop's Fables*, 成立年不詳) の「井戸に落ちた天文学者」の故事のような事態とならないよう、地に足を付けた生活の大切さも認識していた為、聖人的な者であろうとする態度に対して、愚かしいものであるとオーウェルは述べているのである。その上でオーウェルは、全ての人々はこの聖人的になろうとする面と俗人的であろうとする面を同時に保持している存在であると主張している。この聖人になろうとする面を持つ小がらな太った男というドン・キホーテとサンチョ・パンサを混ぜ合わせた象徴的表現は、『空気を求めて』の中で、主人公のジョージの “I'm fat, but I'm thin inside. Has it ever struck you that there's a thin man inside every fat man, just as they say there's a statue inside every block of stone?” (20) という自問に表現されている。ここでは自分は見た目が太った俗人であるが、その内部には痩せている聖人的な感情も持ち合わせているというジョージの二面性が述べられている。ここで用いられている平凡な石でも聖人の彫像になりうるという比喩に象徴されているように、人間とは聖人であろうとする意識と俗人であろうとする意識の二面性を保持している存在であるとオーウェルは考えていた。その為、人が片方のみを重視して極端な行動に出ることは人間的ではないとオーウェルは考えており、彼は中庸の精神を含んだディーセンシィの道徳心が人々に必要であると考えていたのである。

## 2. 飲酒への依存

中庸の精神をディーセンシィの感覚に含めていたオーウェルは、ある程度の愚かしい行為に対して寛大な態度を取っていた。特にイギリス人の日常生活において身近な存在である飲酒について、オーウェルは多くのことを述べている。オーウェルはコラム「私の好きなように」の1946年12月20日のクリスマスに言及した記事の中で、次のように述べている。

For health is not the only thing that matters: friendship, hospitality, and the heightened spirits and change of outlook that one gets by eating and drinking in good company are also valuable. I doubt whether, on balance, even outright drunkenness does harm, provided it is infrequent—twice a year, say. The whole experience, including the repentance afterwards, makes a sort of break in one's mental routine, comparable to a week-end in a foreign country, which is probably beneficial. (*CEJL* vol. 4 257)

ここでは、クリスマスのような特別な日のみであれば、泥酔すらも良き仲間との宴によって得られるものに含まれ、価値のあるものであるという、オーウェルの寛容な態度が示されている。ここからオーウェルは、宗教的な聖人のような極端な禁欲生活を人々に求めていたのではないことが読み取れる。その一方でオーウェルは、人は「依存する対象を求める本能」を保持していると考えており、無意識のうちに度が過ぎた行動をとってしまい中庸の精神が保てなくなる危険性を彼の小説で示しているのである。第3章において、『1984年』のウィンストンは幼少時に母を苦しめてしまったトラウマを、ビッグ・ブラザーの教義を受け入れることで解消している点を筆者は指摘した。その他にも、ウィンストンは様々なものに依存することで、日々の苦しみから逃避しようと試みている。過酷な現実と直面した場合、人はどのように動くのかという問いに対するオーウェルの答えの1つが、人は依存できるものを求めるという心理であっ

た。ウィンストンは『1984年』の過酷な社会で暮らすなかで、当初“VICTORY GIN”と名付けられたジンを飲むことに依存しており、それにより精神的な安らぎを得ていた(7)。さらにジュリアが現れたことで、性愛にも依存するようになった。この時のウィンストンの心理について、“Not merely the love of one person but the animal instinct, the simple undifferentiated desire: that was the force that would tear the Party to pieces.”(144)と描写されている。ジュリアとの情事は党を破壊することに結びつくものではないにもかかわらず、これこそが党を粉碎する力であるという錯覚を抱かせるものであった為、ウィンストンはジュリアとの情事に日々依存するようになった。そしてその性愛は彼らが出勤時間を守れなくなるほどエスカレートして党の許容範囲を超えてしまった為には彼らは逮捕され、最後にはビッグ・ブラザーのカルト的な教義に依存することに陥っている。人は無意識のうちに依存できる対象を求め、そこに快感を見出すとそれを止めたくても止められなくなるほどの深みに入り込んでしまう心理がある危険性が『1984年』の中で描かれているのである。

『1984年』の世界は、オブライエンなどの党中枢メンバーが飲むものはワイン、ウィンストンなどの下級党員が飲むものはジン、プロレと呼ばれる下層階級の庶民が飲むものはビールであり、階級によって飲むものが異なっていた。オーウェルは象徴による表現によって、彼の主張が読者に印象的に伝わるように工夫している<sup>9</sup>。『1984年』においては、ジンがビッグ・ブラザーの教義を象徴するものとしての役割を持っている。『1984年』の冒頭において、ウィンストンが愛情省の建物を見た直後、ジンを飲む描写が登場する。それを飲むと涙があふれ、ゴム製の棍棒で後頭部を殴られたような衝撃が襲うが、次の瞬間には幸福感を味わうことができると描写されている(7)。これと同様に物語の結末においてウィンストンは大量のジンを飲み、そのジンによる後頭部の痛みが彼を襲った際に、彼はそれを愛情省の中で彼に向けて背後から放たれた弾丸であると感じてしまう。そしてこのジンによる高揚感を、ビッグ・ブラザーへの愛と重複してウィンストンは感じており(342)、『1984年』は物語の冒頭部で結末を読者に予感させるものとなっている。また、党中枢メンバーであるオブライエンはウィンストンに対し、党が彼に対して行った拷問について、“You will be hollow. We shall squeeze you empty,

and then we shall fill you with ourselves.” (293) と説明している。ここでオブライエンは精神という抽象的な概念を、「精神は体の中の穴に入った液体である」という比喩としてウインストンに認識させることで、精神の概念をウインストンにとって理解しやすいものになっている。物語の冒頭部に登場するウインストンの母についての夢の中で、母の姿は井戸の底、深い墓穴、沈没している船の海面下の船内に現れている (34)。これらの比喩表現には空洞という要素が共通している。彼は当初から母を失っていることから精神的な空洞の存在を感じており、そこを別の精神が埋め合わせる余地を持っていたことになる。さらに彼が精神的に堪えられない存在であった鼠に襲われる拷問を受けて恋人のジュリアを裏切った際に、巨大な深い穴へ落ちていったと描写されており (329)、この時、彼は再び空洞の存在を意識することになった。拷問によってウインストンのジュリアに対する好意の精神が失われた結果、オブライエンの主張通りに、その損失分の空洞が彼の精神に発生し、最終的にビッグ・ブラザーへの愛がその空洞を満たすに至っている。この様子は、ジンが彼の身体の内部を満たして涙としてあふれ出すという比喩的な描写で読者に伝えられている。さらにジンは、酔いの作用をウインストンに与えている。彼が架空の戦況報告を聞きながら、一人でチェスのチェックメイトの問題を解いている際に次のような描写がある。

He picked up the white knight and moved it across the board. *There* was the proper spot. Even while he saw the black horde racing southward he saw another force, mysteriously assembled, suddenly planted in their rear, cutting their communications by land and sea. (334)

この時、ウインストンの思考において、チェスの世界と戦況報告の内容が重なっている。チェスも戦況報告による戦いも架空の戦いという点で共通した存在である。その後も彼の思考の中でこのチェスの白い駒が黒い駒に対してチェックメイトをする構図が、戦況報告で味方の軍の進路を示す白い矢印が、敵の軍の黒い矢印を打ち負かす構図と重なり、ウインストンは両者を

混同し続けている (341)。さらに、この場面の直前でウィンストンはジンを読みほしており、この酔いの作用がウィンストンに両者の違いをより一層不明瞭なものとしている。『動物農場』の結末で動物たちにとって豚と人間の区別がつかなくなったのと同様に、『1984年』でジンの酔いにより、ウィンストンにとってチェスと党の架空の世界観の区別が曖昧になる結末は、物語の中盤にウィンストンがジンを数杯飲み込んだ後、「チェスとの関係におけるイングソック」(Ingsoc in relation to chess) という題の講演を聞くという場面で、さりげなく読者に伝えられている (125)。

その一方で、『1984年』においてビールがプロレと呼ばれている下層階級の飲み物として登場し、ウィンストンは酒場に入り、ビールをある老人に奢り、過去の世界はどうであったのかについて質問する。しかしウィンストンの質問の意図をこの老人は理解することができないまま、この老人が一リットル分の多量のビールを飲んだことが原因で悪臭を漂わせているトイレに駆け込み、彼らの会話は終わってしまう。この時ウィンストンは、昔のビールは1パイント分の適量を飲むことができ、さらに美味しく安かったと不平を洩らす一方で、昔の社会の重要なことは何も覚えていないプロレに対し、“They were like the ant, which can see small objects but not large ones.” (107) と感じている。ウィンストンはここでプロレたちを小さな昆虫である蟻に喩え、彼らの視野の狭さに幻滅している。つまりオーウェルは、『1984年』においてジンをビッグ・ブラザーの悪魔的な教義、ビールをプロレたちの視野の狭さを強調する象徴として用いているのである。さらに『葉蘭をそよがせよ』において、主人公のゴードンが酒場でジンとビールによって身を持ち崩す場面が次のように描写されている。

His gullet had shut up of its own accord, or the beer had missed his mouth. It was pouring all over him, a tidal wave of beer. He was drowning in beer like lay-brother Peter in the *Ingoldsby Legends*. Help! He tried to shout, choked, and let fall the beer-pot. (189-90)

ここではリチャード・バーラム (Richard Barham, 1788-1845) による民話集『インゴールズビー伝説集』 (*The Ingoldsby Legends*, 1840-47) に収録されている説話「聖ダンスタンの平信徒」(A Lay of St Dunstan) に登場する俗人の修道士のピーター (Peter) が比喩として登場する。ピーターが樽に入った酒の大波に飲み込まれて溺れ死んだように、ゴードンはビールに溺れて息が詰まっている様子が描写されている。この小説ではジンとビールを過度に飲んで身を持ち崩す主人公の愚行が描かれている。

しかし、このようなオーウェルの後期の小説における退廃的なものの象徴としてのビールの役割とは異なり、オーウェルは初期の小説においてジンを悪、ビールを善の象徴として対照的に取り入れることが多かった。オーウェルが初めて執筆した小説『ビルマの日々』では、フローリーが朝食をとる前に、召使のコ・スラ (Ko S'la) がやってくる場面において、“Ko S'la had hurriedly put on his *ingyi* and his best pink silk *gaungbaung*, and he appeared from within the house with a tray on which were a decanter of gin, glasses and a box of cigarettes.” (85) という描写でジンが登場する。このように、フローリーの一人暮らしの生活の中では、召使のコ・スラがジンを差し出してくるのに対し、フローリーがエリザベスとの結婚生活を想像した際には次のような描写でジンに代わりビールが登場する。

He saw Elizabeth in his camp, greeting him as he came home tired from work and Ko S'la hurried from the tent with a bottle of beer; he saw her walking in the forest with him, watching the hornbills in the peepul trees and picking nameless flowers, and in the marshy grazing-grounds, tramping through the cold-weather mist after snipe and teal. (283)

つまりジンが荒廃した生活の象徴で、ビールが豊かな自然に包まれた幸福な家庭生活の象徴として用いられている。これと同様に、オーウェルの次の小説『牧師の娘』では、ジンは朝の寒々としたキッチンにおいて、“The kitchen fire was a ‘beast’ to light. The chimney was crooked

and therefore perpetually half choked, and the fire, before it would light, expected to be dosed with a cupful of kerosene, like a drunkard's morning nip of gin.” (2) という描写で登場する。その一方で、その後ビールが、ビールの原料となるホップ畑の平穏な光景の描写において次のように登場する。

It was a scene somehow peaceful and alluring. The hop vines, tall climbing plants like runner beans enormously magnified, grew in green leafy lanes, with the hops dangling from them in pale green bunches like gigantic grapes. When the wind stirred them they shook forth a fresh, bitter scent of sulphur and cool beer. (105)

さらにホップ摘みをした労働者たちが夜、たき火の前で陽気にキャンプをした楽しみを回想した場面でも、次のようにビールが登場している。

You came down cheering, but you went home cheering louder still and swearing that you would never go hopping again—until next August, when you had forgotten the cold nights and the bad pay and the damage to your hands, and remembered only the blowsy afternoons in the sun and the boozing of stone pots of beer round the red camp fires at night. (138)

つまりこの小説においても、ジンが酔っぱらいが飲む悪のイメージで使用され、一方のビールは甘い香りを放つホップ畑で陽気に飲まれる善のイメージで用いられている。オーウェルは評論『『マス・オブザベーションによる酒場と人々』についての批評』(Review of *The Pub and the People by Mass Observation*, 1943) において、ビールが健康に良いという実例や意見に対して、これがビールに十分な正当性を与えるであろうと述べており (CEJL vol. 3 44)、ビールに対してイギリス人が抱いている肯定的なイメージに言及している。さらにオーウェルが理想と



する酒場の様子を描いた評論「水面下の月」(‘The Moon under Water’, 1946) の中ではジンではなくビールが登場している。その酒場の様子は、“On summer evenings there are family parties, and you sit under the plane trees having beer or draught cider to the tune of delighted squeals from children going down the chute.” (CEJL vol. 3 46) と描写されている。このオーウェルにとっての理想の酒場では、夏の日の方々に家族客が子供たちの歓声の中でビールやリンゴ酒を飲む姿が描かれている。ここでは『ビルマの日々』でフローリーが思い描いたものと同様の幸せな家庭の象徴としてビールが用いられている。海野弘 (1939-) の著書『酒場の文化史』(2009) によると、ビールは古くからイギリスで飲まれていたのに対し、ジンは17世紀にイギリスに新たにもたらされたものであった。18世紀にはジンが下層階級の生活を蝕んでいた為、当時のイギリスを代表する画家のウィリアム・ホガース (William Hogarth, 1697-1764) は、その状況を一對の版画『ビール通りとジン横丁』(*Beer Street and Gin Lane*, 1751) で描いている。ビール通りではビールを健全で陽気な生活をもたらすものとして描き、ジン横丁ではジンを社会に荒廃をもたらすものとして描いている。つまりビールは善で、ジンは悪であるという主張がなされている (82-84)。またヴォルフガング・シヴェルブシュ (Wolfgang Schivelbusch, 1941-) の著書『楽園・味覚・理性』(*Das Paradies, der Geschmack und die Vernunft*, 1980) によると、ビールは善でジンは悪であるとする風潮はすでにイギリスでは17世紀後半から見ることができ、後にそれは社会主義運動と結びつくものとなった。ビールは居酒屋において労働者たちに革命における連帯を促させる有益なもの、一方でジンは労働者たちを堕落させることから革命にとって有害なもののみならず認識が、19世紀の社会主義運動の議論の中に表れていることをヴォルフガングは指摘している (166-75)。これを裏付けるように、フリードリヒ・エンゲルス (Friedrich Engels, 1820-95) は著書『イギリスにおける労働者階級の状態』(*Die Lage der Arbeitenden Klasse in England*, 1845) の中で、イギリス社会に機械が導入される以前の労働者の描写の中で、ビールを次のように好意的に登場させている。

彼らは「立派な」(respectable) 人びとであり、善良な一家の主人であり、道徳的な生活をしてきた。というのも、近所には酒場も売春宿もなかったので不道徳になる機会もなかったし、彼らがたまに飲みに行く宿屋の主人も立派な人物で、たいていは比較的大きな小作農であり、おいしいビールや、きちんとした店のきまりや、店じまいの早いことを守っていたからである。(24)

その一方でジンは、産業革命以降の労働者の描写の中で次のように登場する。

住むに耐えないような不潔な家は夜の宿としてほとんど役に立たず、家具もがたがたで、しばしば雨漏りがし、暖房もなく、人間でいっぱいになった室内の空気は息苦しく、家庭らしさもない。夫は一日中働き、おそらく妻や年長の子どもも、みんな別々のところで働き、朝と晩に顔をあわせるだけである—そのうえなお、ジンを飲むという誘惑がいつもある。これでは家庭生活はどこにあるのだろうか (196)

ここではジンを労働者の崩壊した家庭生活と結び付けてエンゲルスは言及している。このようにビールは善、ジンは悪であるとする認識がイギリスの人々に存在しており、オーウェルはエンゲルスと同様にその感覚を自身の著書に取り入れ、自身の主張を印象的に読者に伝える工夫を行っている。その為オーウェルは一貫してジンを否定的なものを象徴するものとして用いている。一方ビールに対してオーウェルは、適量に飲む場合ならば幸福な生活の象徴として用いているが、多量に飲んだ場合には『葉蘭をそよがせよ』において主人公を窒息死させかけたものとして用い、『1984年』においては、生活における視野の狭さを象徴するものとしてビールを用い、その状態に対して悪臭を放つトイレに駆け込む老人の描写によって本能的な嫌悪感を読者に抱かせている。

中庸の精神を大切にしていたオーウェルは、人々がクリスマス等の特別な日を除く日常生活においてビールを適量飲むことに対して好意的に描くことで、節度ある行動の精神を読者に抱

かせようとしていた。その一方で『1984年』において、普段の生活における些細な出来事の象徴としてビールを用い、ビールについて大きな関心を寄せる一方で社会的な出来事には一切関心を寄せず、党から搾取されている事に気が付かない下層階級のプロレたちの無知が強調されており、オーウェルはビールに依存するプロレを通して政治に無関心であることの愚かさを読者に伝えているのである。

### 3. 人から理解されたいという心理

『1984年』においてウィンストンはジュリアとの性愛に依存してしまうが、党は人々の性本能に対してどのように操作しようとしたかが、以下のように説明されている。

For how could the fear, the hatred and the lunatic credulity which the Party needed in its members be kept at the right pitch, except by bottling down some powerful instinct and using it as a driving force? The sex impulse was dangerous to the Party, and the Party had turned it to account. They had played a similar trick with the instinct of parenthood. (153)

ここでは、党が黨員に求める常軌を逸した妄信を適度な状態に保っておく為に、強力な性本能と親としての本能をある程度封じ込めてそれを推進力とする党の政策が述べられている。シェルダンは『人間ジョージ・オーウェル』において、党は個人の性的本能こそが党の外的規制に強く反発する領域である為、党は性的本能の管理に賢明である点を指摘している。ウィンストンとジュリアの性愛は、党のそうした個人の強烈な欲求に対する破壊が不可能であり、この行為は人の中にある生命力の象徴を一つ残らず抹殺しようとするビッグ・ブラザーの試みを前にした、生命の再確認（“a reaffirmation of life”）であったとシェルダンは述べて、彼らの性愛

行動を肯定的に捉えている (472)。しかしウィンストンが逮捕されて愛情省に送られた際の彼のジュリアに対する心情について、“He hardly thought of Julia. He could not fix his mind on her. He loved her and would not betray her; but that was only a fact, known as he knew the rules of arithmetic. He felt no love for her, and he hardly even wondered what was happening to her.” (263) と描写されている。ここで彼らの関係は愛によるものではなく、ウィンストンは彼女を愛そうとしても愛せなかったという心情が述べられている。ウィンストンにとってジュリアはジンに代わる心の慰めとはなっていたが、それは本能的な性衝動を満たす為のものであり、真の愛とは言えないものであった。オーウェルは「楽しかりし日々」において次のように述べている。

I had learned early in my career that one can do wrong against one's will, and before long I also learned that one can do wrong without ever discovering what one has done or why it was wrong. There were sins that were too subtle to be explained, and there were others that were too terrible to be clearly mentioned. For example, there was sex, which was always smouldering just under the surface and which suddenly blew up into a tremendous row when I was about twelve. (*CEJL* vol. 4 351)

ここからオーウェルはセックスに対し、自分が何をしたのか、あるいはなぜそれが間違っているのかを理解せずに犯すことがありうる罪の1つとして捉えていたことがわかる。ジュリアとの情事はウィンストンにとって愛からのものではない為、アルコール依存症からセックス依存症へと移行しただけのものであり、オーウェルは、彼らの情事を生命の再確認というよりも、無意識のうちに人が陥りうる畏といった否定的な面を強調して描いている。ウィンストンは母に対するトラウマや、鳥たちが自分たちに対して歌ってくれているという自然賛美の感情をジュリアに理解してもらおうとするが、ジュリアは「鳥はただ単に鳴いているだけ」と答えており (252)、彼の気持ちを理解することができない人物として描かれている。ウィンストンがジ

ユリアに自分の気持ちを理解してもらおうと努めた様子と同様のものが、『ビルマの日々』でも登場する。フローリーがエリザベスに自分の思いを夢中に語り、それを理解させようとした際、次のように描写されている。

No, it is boring, I know that. We Anglo-Indians are always looked on as bores. And we *are* bores. But we can't help it. You see, there's—how shall I say?—a demon inside us driving us to talk. . . . He could not help it. It was so important that she should understand something of what his life in this country had been; that she should grasp the nature of the loneliness that he wanted her to nullify. (184-85)

フローリーはエリザベスが自分の話を退屈だと感じていることを理解しながらも、「悪魔」と彼が表現する体の中において自分をおしゃべりに駆り立てる衝動により話すのを止められず、彼は解消してもらいたいと願っている孤独感の本質を彼女に理解してもらうことが何よりも重要であったと述べられている。この「悪魔」という表現は、オーウェルが自分を執筆に駆り立てる本能を表現する際に同様に使われている。オーウェルは執筆活動を行おうとする衝動により幸せな家庭を築けなかったように、彼の小説においてもその本能的な衝動に駆られて自分の思いを他人に理解してもらおうと努め、結果的に理解されず悲劇に終わるストーリーを『1984年』と『ビルマの日々』において描いている。オーウェルは人は自分の置かれた社会に馴染めず孤立した場合、特定の人から自分を理解されたいという心理が働くと考えていたのである。

『ビルマの日々』において自分の孤独を恋人に理解させることに失敗したフローリーは自殺するが、『1984年』においては、オブライエンという知的な外見をしている人物が登場し、ウィンストンはジュリアの代わりに彼に自分のことを理解してもらおうと、彼に接触しようとする。ウィンストンがオブライエンに惹かれたのは、オブライエンが彼に語り掛けてくる夢をウィンストンが見たことが原因であった。ウィンストンが見た夢に現れたオブライエンに対する彼の感情について、“There was a link of understanding between them, more important than

affection or partisanship. 'We shall meet in the place where there is no darkness,' he had said." (30) と描写されている。この夢において、オブライエンはウィンストンに「闇が存在しない場所で会おうだろう」と語りかけ、彼らの間には相互理解の絆があり、それは好意や党派心よりも重要なものだったとウィンストンは感じている。オーウェルは「右であれ左であれ、わが祖国」のなかで、夢について “But the night before the Russo-German pact was announced I dreamed that the war had started. It was one of those dreams which, whatever Freudian inner meaning they may have, do sometimes reveal to you the real state of your feelings.” (*CEJL* vol. 1 539) と述べている。ここでオーウェルは、夢とは人の感情の真の状態を明かしてくれるものであるという考えを抱いている。オーウェルが見たこれから戦争が起きるといふ夢は正夢となったが、オーウェルは小説の中で皮肉な結果となる正夢を描いている。オブライエンがウィンストンに「闇が存在しない場所」 (“the place where there is no darkness”) で会おうと夢において語っているが、実際には悪という意味での闇が存在しないのではなく、拷問を行う為に部屋の電気が消されることがないという意味での「闇が存在しない場所」で二人は対面し、ウィンストンが予期したものとは異なる状況となった。彼が別の夢で見た「黄金郷」も、ジュリアに野原に導かされたことで実現したかの様であったが、実際にはそこすらもカメラによって二人は撮影されており、党の支配を免れた厳密な意味での「黄金郷」とは異なっていたことが判明する。『1984年』の前に書かれた『動物農場』においても、メジャーおじさん (Old Major) は自分が見た人間達がいなくなった後のユートピアの世界についての夢を、「イングランドの獣たち」 (Beasts of England) という象徴的な歌にまとめて動物たちに伝えて革命を起こさせるが、こちらの夢も期待が裏切られる形で実現することになる。

文学において夢は予言的なものとして頻繁に登場する。ファーバーの『文学シンボル辞典』によると、エドガー・アラン・ポー (Edgar Allan Poe, 1809-49) は夢を見ている者は意識がある状態の者よりも、より純粋な真実の世界に入っているという見解を持っていた (65)。ファーバーはその根拠として、ポーの詩「夢の中の夢」 ('A Dream Within a Dream', 1849) に

おける次の表現を例に挙げている。

*All that we see or seem*

*Is but a dream within a dream. (10-11)*

ここでポーは目の前の現実と思われている世界は、夢の中の夢に過ぎないものであり、真実の世界は別の所にあることを表現しようとしている。さらにファーバーによると、パーシー・ビッシュ・シェリー (Percy Bysshe Shelley, 1792-1822) は、夢や死を真実への入り口ではないかと考えていた (65)。ファーバーはその根拠に、シェリーの詩「モンブラン—シャモニー谷にて詠める詩」(Mont Blanc: Lines Written in the Vale of Chamouni, 1817) の次の文を挙げている。

*Some say that gleams of a remoter world*

*Visit the soul in sleep,—that death is slumber, (49-50)*

ここでシェリーは真実の世界を象徴する遠方の世界の輝きは、死や眠りの状態の心に訪れると表現しており、人が眠っている状態の世界を神秘的なものとして捉えている。

その一方で『1984年』と『動物農場』の中で主人公に希望を与えた夢は、最終的にある意味では実現する正夢であるが、後に実現する際に出てくる負の部分が消れた状態で表れている。これは、オーウェルにとっての夢とは人の感情の真の状態を表すものにすぎない為、それが客観的な真実を予知するものではなく、その人が持つ願望やトラウマを表したものであるからである。オーウェルは登場人物が持つ願望を、彼らの夢を通して読者に伝えているが、『1984年』においてウィンストンが見た夢に、次のようなものがある。

*He lay back with his eyes shut, still sodden in the atmosphere of the dream. It was*

a vast, luminous dream in which his whole life seemed to stretch out before him like a landscape on a summer evening after rain. It had all occurred inside the glass paperweight, but the surface of the glass was the dome of the sky, and inside the dome everything was flooded with clear soft light in which one could see into interminable distances. The dream had also been comprehended by—indeed, in some sense it had consisted in—a gesture of the arm made by his mother, and made again thirty years later by the Jewish woman he had seen on the news film, trying to shelter the small boy from the bullets, before the helicopters blew them both to pieces. (185)

ウィンストンはこの夢で、彼が購入したガラスの文鎮の中で、清らかで柔らかい光に自分が包まれている状況を、30年前に母が自分を抱いていた時の状況と同じものであると感じている。このガラスの文鎮は、オーウェルが評論「スペイン戦争回顧」の結末で表した、決して悪の力が破ることのできない水晶の精神を具現化したものである。しかしウィンストンにとって失われた母の温かみを象徴するこのガラスの文鎮は、ウィンストンが逮捕された際に破壊され、その悲劇性が象徴されている(254)。環境による支配を受ける点を強調する自然主義文学の特徴を持つ『1984年』の世界において、ウィンストンの周りには、自分を理解してくれるほどの知性を持つ人物はオブライエン以外にはおらず、この感情が夢となって表れ、彼はオブライエンに引き付けられてしまったと考えられる。ウィンストンのオブライエンに対する感情は、依存症と同様の物である。なぜならオブライエンが党に忠実な者であることが判明し、ウィンストンに対して拷問を与えているときも、ウィンストンはオブライエンに対する好意の感情を抱き続けており、その拷問がいったん中断された際にウィンストンは次のようにオブライエンに対する好意を感じている。

He had never loved him so deeply as at this moment, and not merely because he



had stopped the pain. The old feeling, that at bottom it did not matter whether O'Brien was a friend or an enemy, had come back. O'Brien was a person who could be talked to. Perhaps one did not want to be loved so much as to be understood. (289)

ここでウィンストンはオブライエンによって拷問にかけられたにもかかわらず、自分を理解できる唯一の人物であるオブライエンに対する好意を捨てきれない状況が描かれている。そして最後にウィンストンはその原因について、人は愛されるよりも理解してもらう方を求めるからではないかと推測している。オーウェルが考える人はある過酷な環境に置かれた際に特定の人物から自分を理解してもらおうとする心理とは、依存症と同様に病的なほど執着心を抱いてしまうものであり、その心理を止めることが本人の意志によってでは不可能であるという見解をオーウェルは抱いていることがわかる。

オーウェルは、人は不条理な社会において無意識のうちに過度の飲酒や情事に依存した生活を送らざるを得なくなる心理と、孤立している自分についてある特定の人物から理解してもらおうとする心理が働くことを描写している。オーウェルは、それらに依存することを主人公に追い込ませた社会を描くことで、中庸の精神を持つディーセンシィの道德心を人々の心に保たせる為には、まずそれを可能とさせる生活環境を構築しなければならないと考えていたのである。「依存する対象を求める本能」によって生じる特定の心理や行動に対し、オーウェルはこれを依存症のような病的なものとして描き、個人の能力ではそれを消し去ることに限界がある為、オーウェルにとっての中庸とは、適度な飲酒のような個人の生活における心の節制のみを意識したものではなかった。オーウェルの小説において様々な依存症に陥らせる危険な心理は、その人物が置かれた社会環境から生まれるものである為、オーウェルは人々の生活環境を構築する政治を改善しなければならないと考えていたのである。

## 第5章「判断する本能」

### 1. 人々が権力を欲する動機

オーウェルは評論「なぜ私は書くのか」において、他人の思想を変えて世界をある方向に押ししていきたいという政治的な目的を自身の執筆動機の最後に挙げている。オーウェルは人々の精神を善良なものにするには、小説において個々の人々に道徳心を抱かせるだけではなく、社会規範を形成する政治を改善しなければならないと考え、政治に関する様々な小説や評論を執筆している。オーウェルが重視したディーセンシイの感覚には中庸の精神が含まれていることを第4章で筆者は指摘したが、政治におけるオーウェルにとってのディーセンシイの中庸の精神は、オーウェルが「ナショナリズム覚書」において説明している、政治的偏向を人々に促すナショナリズムの過激な思想に対して、個々の人々が自身の心と政治において反抗することによって達成されるとオーウェルは考えていた。

オーウェルがナショナリズムの過激な思想が当時のイギリスの知識人達の間で広まりつつあると感じていた理由について、彼は当時の不況という社会状況と関連づけて考察している。彼は『ウィガン波止場への道』において、不況下の環境において、労働者階級の家と異なり家名を背負っている中産階級の家では男が失業状態に陥ると家族関係が破綻する傾向があると、次のように指摘している。

Take for instance the different attitude towards the family. A working-class family hangs together as a middle-class one does, but the relationship is far less tyrannical. A working-man has not that deadly weight of family prestige hanging round his neck like a millstone. I have pointed out earlier that a middle-class person goes utterly to pieces under the influence of poverty; and this is generally due to the behaviour of his family—to the fact that he has scores of relations nagging and

badgering him night and day for failing to “get on”. (116)

ここでは、人が社会規範に無意識に従う習性が裏目に出てしまい、中産階級の家庭において、失業が大きな問題となることが示されている。労働者階級とは異なり家名を背負う中産階級の家庭では、世間体を気にする必要がある為、失業状態に陥った者に対する家族の風当たりが強まる風潮が存在することをオーウェルは指摘している。さらにオーウェルは評論「鯨の腹の中で」(Inside the Whale, 1940)において、世界的な不況期であった1930年代に失業という形で特に被害を受けた中産階級の人々の心情を分析して次のように述べている。

Unemployment is not merely a matter of not having a job. Most people can *get* a job of sorts, even at the worst of times. The trouble was that by about 1930 there was no activity, except perhaps scientific research, the arts and left-wing politics, that a thinking person could believe in. The debunking of Western civilisation had reached its climax and “disillusionment” was immensely widespread. Who now could take it for granted to go through life in the ordinary middle-class way, as a soldier, a clergyman, a stockbroker, an Indian Civil Servant or what not? And how many of the values by which our grandfathers lived could not be taken seriously? Patriotism, religion, the Empire, the family, the sanctity of marriage, the Old School Tie, birth, breeding, honour, discipline—anyone of ordinary education could turn the whole lot of them inside out in three minutes. (CEJL vol. 1 514-15)

ここでは、1930年頃の特徴として、特に教育を受けた中産階級の間で従来の愛国心、信仰といった価値観が崩壊しつつあることをオーウェルは指摘している。西洋文明において科学技術は極度に進歩したにもかかわらず、それが人々の生活の向上に還元されていないという矛盾が浮き彫りとなり、それが社会に対する幻滅に繋がっているとオーウェルは示唆している。従来

の価値観が崩壊しつつある中で、それに代わる新たな価値観を必要とする人々がナショナリズムという極端な思想を抱く可能性がある危険性をオーウェルが抱いた背景には、ジェームズ・バーナム (James Burnham, 1905-87) の著書『経営者革命』 (*The Managerial Revolution*, 1941) が強くオーウェルに影響を与えている。バーナムは『経営者革命』において、世界は過去に封建社会から資本主義社会へと移行したように、大規模な社会変革が今後数十年のうちに起き、その結果、生産手段の所有権を持つ専門経営者階級が新たな支配階級を構成し (71)、さらに世界は3つの超大国に分割されると予想している (176)。このバーナムの予測はオーウェルの『1984年』の世界観にインスピレーションを与えている。オーウェルは評論「ジェームズ・バーナムと経営者革命」 ('James Burnham and the Managerial Revolution', 1946) において次のように述べている。

If one examines the people who, having some idea of what the Russian régime is like, are strongly russophile, one finds that, on the whole, they belong to the “managerial” class of which Burnham writes. That is, they are not managers in the narrow sense, but scientists, technicians, teachers, journalists, broadcasters, bureaucrats, professional politicians: in general, middling people who feel themselves cramped by a system that is still partly aristocratic, and are hungry for more power and more prestige. . . . Burnham, although the English russophile intelligentsia would repudiate him, is really voicing their secret wish: the wish to destroy the old, equalitarian version of Socialism and usher in a hierarchical society where the intellectual can at last get his hands on the whip. . . . But his theory, for all its appearance of objectivity, is the rationalisation of a wish. There is no strong reason for thinking that it tells us anything about the future, except perhaps the immediate future. It merely tells us what kind of world the “managerial” class themselves, or at least the more conscious and ambitious members of the class,

would like to live in. (*CEJL* vol. 4 178-79)

ここでは、バーナムの定義による「経営者」階級に属する科学者、技術者、教師、ジャーナリスト、放送事業者、官僚、職業政治家といった中産階級に属する人々は全体的にまだ旧来の階級意識に基づく貴族的な部分を残している為、より大きな権力を得ようという願望 (“wish”) を保持しているとオーウェルは考えている。オーウェルが『1984年』を執筆した動機について述べた「フランシス・ヘンソンへの手紙」に書かれている、知識人階級に広がっている全体主義的思考とは、この旧来の階級意識に基づく権力を得ようという願望を指しており、その願望が実現し、さらに機械が悪用されることで破滅的な監視社会が到来した場合の悲劇を、オーウェルは『1984年』で描いたのである。しかし「バーナムと経営者革命」においてオーウェルは、権力を人が求めようとするのは当然のことであるというバーナムの考えを次のように疑問視している。

It is curious that in all his talk about the struggle for power, Burnham never stops to ask *why* people want power. He seems to assume that power hunger, although only dominant in comparatively few people, is a natural instinct that does not have to be explained, like the desire for food. He also assumes that the division of society into classes serves the same purpose in all ages. This is practically to ignore the history of hundreds of years. When Burnham's master, Machiavelli, was writing, class divisions were not only unavoidable, but desirable. So long as methods of production were primitive, the great mass of the people were necessarily tied down to dreary, exhausting manual labour: and a few people had to be set free from such labour, otherwise civilisation could not maintain itself, let alone make any progress. But since the arrival of the machine the whole pattern has altered. The justification for class distinctions, if there is a justification, is no longer the same, because there

is no mechanical reason why the average human being should continue to be a drudge. . . . In effect, Burnham argues that because a society of free and equal human beings has never existed, it never can exist. By the same argument one could have demonstrated the impossibility of aeroplanes in 1900, or of motor cars in 1850. (*CEJL* vol. 4 177-78)

ここでは、権力闘争についてのバーナムの発言において、なぜ人々は権力を求めるのかについて彼は述べておらず、それはバーナムが権力に対する欲求は食欲と同じように説明するまでもない自然の本能であるとバーナムは考えている為だとオーウェルは指摘している。オーウェルが指摘した通り、バーナムは『経営者革命』において、“Human beings, as individuals and in groups, try to achieve various goals—food, power, comfort, peace, privilege, security, freedom, and so on.” (74-75) と述べており、人間にとって権力とは食欲と同様の欲求であるとバーナムは認識している。このバーナムと同じ思考を『1984年』のオブライエンの思考としてオーウェルは用いていることで、このバーナムの予測の危険性をオーウェルは描いているのである。『1984年』の社会において党が権力を維持する方法はわかるが、その動機がわからないと日記に書いたウィンストンに対し、オブライエンはなぜ党は権力を欲するのかという問いを与え、その後オブライエンは、“The Party seeks power entirely for its own sake. We are not interested in the good of others; we are interested solely in power. Not wealth or luxury or long life or happiness: only power, pure power. . . . The object of power is power.” (301-02) という回答をウィンストンに述べている。ここでオブライエンの「権力の目的は権力である」という回答は、人が権力を欲するのは説明するまでもない自然の本能であるというバーナムの考えと同一のものである為、具体的な説明がなされておらず明確な答えとはなっていない。オーウェルはこの考えに反対し、権力欲は本能ではなく単なる願望に過ぎないと立場をとっている。階級制度は不要なものになりつつあることを認識していたオーウェルは、従来の階級意識を保っている中産階級の知識人層の人々が政治において権力を求めるのは本能ではなく単

なる願望であり、バーナムの未来の予測はそれを表したものに過ぎないと考えている。現代は科学技術が進歩している点でニコロ・マキャベリ (Niccolo Machiaveli, 1469-1527) の時代とは異なり、現代では階級社会は不要の産物となったことにバーナムは気が付いておらず、従来の階級的分断の役割を意識し続けていることが、人々が権力を求めることを本能的なものだとバーナムが誤信した原因であるとオーウェルは考えている。オーウェルは正確な歴史を学ぶことの大切さをスペイン内戦での体験を通して認識していた一方で、現代は機械化の時代である点で過去とは異なり、歴史的な構図をそのまま現代に当てはめて考えてはならないことも同時に意識していたのである。

失業により中産階級に属する人々の間で従来の愛国心や信仰の価値観が崩れる一方で、旧来の階級意識に基づき権力を得ようとする時代錯誤の願望を保っている中産階級の知識人たちが、政治においてオーウェルがナショナリズムと呼ぶ過激な思想に染まる傾向をオーウェルは感じ取り、その危険性を『1984年』で示している。オーウェルにとって本能は「無意識の衝動」を意味し、理性とは「意識を伴う思考」を指しており、彼の小説の中で見られる一貫したテーマは理性に対する本能の優位性であった。しかしバーナムの理論による人が権力を欲しようとする感情は本能ではなく願望である為、理性によって制御できるものであるとオーウェルは考えており、理性的な思考を政治に取り入れることで、『1984年』の世界とは対照的なディーセンシィの道徳心が伴う社会を築くことができるとオーウェルは考えていたのである。

## 2. 意識を伴う言葉の必要性

オーウェルはナショナリズムのような政治的に極端な思想は、理性的な思考で正すことができると考えていた。オーウェルは政治において異議を自由に唱えることができる環境下で人々が意識を働かせて理性的に考えることができ、そうすることで正しい政策がとれる社会を求めていた。そしてオーウェルは理性的な思考を伴う政治を実現する為に必要なのは、意識を伴っ

た言葉の使用であると考えていた。オーウェルが問題視した意識を伴わない言葉の例が『1984年』に取り入れられている。『1984年』では巻末の附録において、「ニュースピーク」(*Newspeak*)という党が考案した言語が解説されている。「ニュースピーク」とは、ウィンストンが住む「オセアニア」の国の公用語であり、党によって無駄と見なされた言語表現を削減することで思考の範囲を縮小し、党の教義以外の思考様式を不可能にすることを目的としている。また、物語の冒頭には矛盾した概念の言葉である「戦争は平和なり」(“WAR IS PEACE”)、「自由は隷属なり」(“FREEDOM IS SLAVERY”)、「無知は力なり」(“IGNORANCE IS STRENGTH”)が党のスローガンとして登場している(6)。物語の中盤に登場する作中人物エマニュエル・ゴールドスタイン(Emmanuel Goldstein)の書『寡頭制集産主義の理論と実践』(*The Theory and Practice of Oligarchical Collectivism*)とオブライエンのウィンストンに対する説明から、これらのスローガンはそれぞれ「現在の架空の戦争状態は、実際には戦争をしていないので平和である」<sup>10</sup>、「党の不滅の精神に共鳴して一体化せず、一人で自由でいる者は死ぬと精神が無くなり無となる為、死による隷属から免れない」<sup>11</sup>、「二重思考を使用し無知でいる者は、党に忠誠を尽くせる為、権力を保持できる」<sup>12</sup>という主張を行っていることが判明する。これらの党の主張は、『1984年』の社会のある一面のみを言い表した表現である。ところがこれらのスローガンのように最低限にまで言葉が省かれた形状においては、この党の主張が戦争や自由という言葉の普遍的な定義となってしまう。ここでは背景となる条件の説明が省かれると言葉の概念が曖昧なものとなり、思考が誘導される危険性が示唆されている。オーウェルは『1984年』を執筆している時期に、不明瞭な言葉の使用と全体主義の関係に興味を抱いていたことが彼の評論から窺える。評論『「ポレミック誌」への論説』(‘Editorial to *Polemic*, 1946)において、オーウェルはJ. D. バーナル(John Desmond Bernal, 1901-71)が評論の中で、“Because collective action in the industrial and political field is the only effective action, it is the only virtuous action.”(CEJL vol. 4 155)と主張した点を取り上げている。この文章でバーナルは、産業と政治の分野において全体主義の行動が唯一の能率的な行動であるので、全体主義の行動のみが有徳な行動であると述べており、全体主義を支持する為に論理的に成り立た



ない主張を行っている点をオーウェルは指摘している。このバーナルの表現では、産業と政治は人間社会の一部分のみの分野であるにも関わらず、そこで能率的である全体主義の行動が、別のあらゆる分野においても有徳な行動であると解釈できる為、不明瞭な文章となっている。この為オーウェルはこのバーナルの表現のように、ある主張を述べる際に、文章の意味を深く考えずに言葉が並べられているような不明瞭な英語を書くことが、全体主義思想を持つことに直接関係していると考えていた。

オーウェルは評論「政治と英語」において抽象的表現が、具体的なものを抽象的なものに溶け込ませることで人々を騙す為に多用されていると述べている。そして正しい英語を使う為の第一の条件として、“Never use a metaphor, simile or other figure of speech which you are used to seeing in print.” (CEJL vol. 4 139) と述べている。ジョージ・レイコフ (George Lakoff, 1941-) とマーク・ジョンソン (Mark Johnson, 1949-) は共著『レトリックと人生』(Metaphors We Live By, 1980) において、比喩を用いた政治的スローガンの危険性を訴えている。彼らによると人間の概念体系は比喩によって規定され、さらに大部分の概念は他の概念を通して部分的に理解されている。さらにレイコフとジョンソンは、比喩がもつ問題点を指摘している。比喩は対象の概念のある側面を強調して認識させることができるが、その対象が持つ概念全体を表すことはできないという点である (12-13)。「戦争は平和である」の場合、『1984 年』の世界での「戦争」の概念が持つ、国家を継続的に他国との架空の戦争状態に置き、大衆をコントロールすることで世界の平和が保たれている点を表す際に、「平和」の概念を当てはめて強調することができるが、「戦争」の概念が持つ暴力的でネガティブな面を「平和」によって表すことはできず、むしろそれを覆い隠してしまうことになるのである。

さらにオーウェルは「政治と英語」において、伝えたいことがありながらそれを表現できない為に、正確さが欠如した文章が社会に蔓延していると指摘している。その具体的な要因としてオーウェルはまず「死にかけた隠喩」を挙げている。オーウェルの言う「死にかけた隠喩」とは、新たに生み出された視覚的なイメージを喚起して思考を助ける隠喩と、「鉄の決意」のように明瞭さを失わずに日常語となった死んだ比喩の、中間に位置するものである。その例と

して、「やり方を変える」という意味で用いられる「順序を変えて鐘を鳴らす」(“*Ring the changes on*”) や、「擁護する」を意味する「こん棒を持ち上げる」(“*take up the cudgels for*”) といった比喩は、単に自分で文章を作り出す手間を省いてくれるという理由で用いられていると彼は述べている (CEJL vol. 4 130)。「私はこう思う」(“*I think*”) と具体的に言うかわりに、「私の見解によれば、それは正当化できないわけではない想定である」(“*In my opinion it is a not unjustifiable assumption that*”) という風に既存の決まり文句を並べる方が簡単であり、これにより具体的な概念が抽象的なものに溶け込んでしまうとオーウェルは主張している (CEJL vol. 4 134)。これと同類の事例が、ホロコーストを主導したアドルフ・アイヒマン (Adolf Eichmann, 1906-62) の裁判の中で見られた。アイヒマンは、自分は官庁用語でしか話せないと裁判において謝罪するほど、会話の中で同じ決まり文句を繰り返した点を、彼の会話の特徴としてハンナ・アーレント (Hannah Arendt, 1906-75) は著書『イスラエルのアイヒマン—悪の陳腐さについての報告』(Eichmann in Jerusalem: A Report on the Banality of Evil, 1963) で指摘している。例えば、アイヒマンは「決まり文句」(“*Redensarten*”) や「スローガン」(“*Schlagworte*”) という意味で「翼のある言葉」(“*geflügelte Worte*”) という語句を頻繁に使っている。これは「古典作家からの有名な引用句」を指すドイツ語の口語体である。またトランプゲームにおけるしっぺ返し戦術を意味する“*kontra geben*”という表現を、「抵抗した」という意味で用い、これは裁判官を困惑させている。アーレントはこれらの婉曲な比喩表現が用いられたのは、アイヒマンはこれら以外の言葉で自分の考えを表現する語句を思い浮かべられなかったのが原因であると見ている。さらにこのことが彼の想像力を失わせ、他人の立場に立って考えるといった思考する能力も失わせたこととアーレントは考えている (48-49)。オーウェルは全体主義の思考と言葉の不明瞭さとの関係はまだ十分に研究されていないが重要なテーマであるとの考えを示している (CEJL vol. 4 156)。『1984年』の社会のモデルとなったドイツのファシズムとソ連の共産主義社会において、ヒトラーが自身の思想を口述筆記させた著書『わが闘争』(Mein Kampf, 1925) と、マルクスとエンゲルスの共著『共産党宣言』(Manifest der Kommunistischen Partei, 1848) が、それぞれもっとも重要なバイブルとして広く流通し

ていた。『わが闘争』では最初のページで、「同一の血は共通の国家に属する。」という比喻表現が目立つように強調された文体で使われている (16)。ここでいう血とはドイツ民族のことを表す換喩表現である。実際には何世紀もの間に周辺の民族との間で混血の進んだ定義の難しいドイツ民族という概念を、血という単純な概念で表現することであたかも純血な民族であるかのような印象を読者に与え、この後説明されるドイツとオーストリアの統合と、ドイツ民族の純血をユダヤ人から守るというナチスの軸となる教義の理解を読者にとってわかりやすくする働きを持たせている。その一方で『共産党宣言』では、「ヨーロッパをひとつの妖怪が行く。共産主義という妖怪が。」という比喻表現から文章が始まっている (5)。『共産党宣言』では共産主義を妖怪に、一方の資本主義に基づく近代ブルジョア社会を自らが呼び出したその魔物を制御できなくなった魔法使いであると喩えており (9)、共産党が目指す革命の構造をわかりやすく読者に伝える工夫がみられる。これらの例から、比喻が政治的思想を単純な概念として民衆に流布する為に重視されていたことがわかる。

大衆が無意識的に不明瞭な言葉に誘導される事態を防ぐ為にオーウェルが強調していたのが、意識を働かせる必要性であった。意識を働かせていない状態における問題をオーウェルは『1984年』の中で描いている。ウィンストンが味方であると誤認したオブライエンの邸宅を訪れていくつもの質問を受けた際、彼から「党の力を粉砕する為に殺人を犯す覚悟や、子供の顔に硫酸をかける覚悟があるか」と問われている。このとき、ウィンストンは他の答えにつられて無意識のうちに“*Yes*”と答えてしまう (199-200)。ここでは、意識的に思考を伴わせなければ、知らず知らずのうちに思考が他者によって誘導される危険が示されている。さらにウィンストンは、彼の近くで話をしている男について、“*It was not the man’s brain that was speaking, it was his larynx. The stuff that was coming out of him consisted of words, but it was not speech in the true sense: it was a noise uttered in unconsciousness, like the quacking of a duck.*” (63) と感じている。このようにアヒルの鳴き声に喩えられる意識や思考を伴わない言語しか使えず、考えることができなくなった人々の社会を、オーウェルは『1984年』の中で描いているのである。オーウェルは「政治と英語」の中で、人は具体的な対象につ

いて考える時には、最初に言葉なしで考え、その次に心に思い浮かべたものに当てはまる正確な語を探す、という望ましい手順を自然に踏むことができると述べている。しかし抽象的なことについて考える時には、最初から言葉を使う傾向があり、意識的に努力して防がなければ、既存の慣用句が殺到して思考の代わりとなり、そこで表される言葉の意味は不鮮明なものになるか、改変してしまうとオーウェルは主張している。これを防ぐには、まず初めに心に言いたいことをイメージや感覚を通して明確にし、その上でそれに当てはまる言葉を選ぶことが望ましいと彼は述べている（*CEJL* vol. 4 138-39）。この点を人々が意識することにより、意識を伴う思考が政治において用いられることが可能になるとオーウェルは考えていたのである。

さらにフリードリヒ・アウグスト・ハイエク（Friedrich August Hayek, 1899-1992）の著書『隷属への道』（*The Road to Serfdom*, 1944）と、コンニ・ジリアクス（Konni Zilliacus, 1894-1967）の著書『過去の鏡』（*The Mirror of the Past*, 1944）についてのオーウェルの書評「F・A・ハイエク著『隷属への道』、K・ジリアクス著『過去の鏡』（Review: *The Road to Serfdom* by F. A. Hayek / *The Mirror of the Past* by K. Zilliacus', 1944）の結末において、オーウェルが求める経済政策を次のように述べている。

Capitalism leads to dole queues, the scramble for markets, and war. Collectivism leads to concentration camps, leader worship, and war. There is no way out of this unless a planned economy can be somehow combined with the freedom of the intellect, which can only happen if the concept of right and wrong is restored to politics. (*CEJL* vol. 3 119)

ここではオーウェルは自由競争に頼り実際に1930年代に深刻な失業問題と戦争を生み出した資本主義と、『1984年』の世界で描かれている国が一切の生産手段を独占する集産主義の欠点を指摘し、知的自由が伴った計画経済を善悪の概念と共に政治に組み合わせる必要性を強調している。オーウェルは『1984年』では日記すら書くことが禁じられる状況を描いているが、

オーウェルは自由に物を書き出版することができる社会の必要性を評論において述べている。オーウェルはコラム「私の好きなように」の1944年4月28日の記事で、人の思想は決して完全にはその人自身のものではなく、他者からの刺激を必要としていると指摘している。その為、言論の自由が奪われれば、想像力が干上がってしまうと述べている。その例として、もしデフォーが本当に無人島に住んでいたら、『ロビンソン・クルーソー』を書くこともできず、書こうとも思わなかったであろうと述べている（*CEJL* vol. 3 133）。オーウェルと同様に言論の自由が必要であると感じていたジョン・ミルトン（John Milton, 1608-74）は、出版の自由を擁護する為に執筆したパンフレット「アレオパジチカ」（*'Areopagitica'*, 1644）において、次のように述べている。

Many there be that complain of Divine Providence for suffering Adam to transgress; foolish tongues! When God gave him reason, he gave him freedom to choose, for reason is but choosing; he had been else a mere artificial Adam, such as Adam as he is in the motions. We ourselves esteem not of that obedience, or love, or gift, which is of force: God therefore left him free, set before him a provoking object, ever almost in his eyes; herein consisted his merit, herein the right of his reward, the praise of his abstinence. (394-95)

ここでは、理性とは自由に選択する能力であると定義されており、人間は自由意思を持たない機械的な操り人形ではなく、理性を保持していることで、物事の善悪を選択して行動できる生き物であるとミルトンは指摘している。その為、出版の自由が認められることで、人々の理性的な思考が政治に取り入れられれば、政治を改善することが可能である事を彼は示唆している。オーウェルは評論「文学の禁圧」の冒頭において、このミルトンの「アレオパジチカ」の刊行300年を記念したペンクラブの集会にオーウェルが参加した際、講演者の中で文学の政治的自由について触れた者がおらず、また何百人もいる参加者の中で言論の自由とは批判し異議を唱える

自由であると指摘した者もいなかった現状に、オーウェルは危機感を抱いた体験が述べられている (CEJL vol. 4 59)。オーウェルは文学の政治的自由を知性の自由と同一視しており、知性の自由について “Freedom of the intellect means the freedom to report what one has seen, heard, and felt, and not to be obliged to fabricate imaginary facts and feelings.” (CEJL vol. 4 62) と定義している。そして表現の自由に関する限り、単なるジャーナリストと、最も非政治的な想像的作家との間にたいした違いはないと述べている。ジャーナリストは嘘を書くことや重要なニュースを伏せるように強要されるときに自由を失い、想像的作家は本人の目には事実である主観的な感情を捻じ曲げて書く際に自由を失うからであるとオーウェルは考えている (CEJL vol. 4 65)。小説とは空想上の世界であると考えられがちであるが、特にオーウェルの小説は政治と道徳における現実における問題がテーマとなっている為、出版における表現の自由をオーウェルは重視している。人が理性による選択の自由を政治的に保持し、意識を伴う理性を駆使して架空の事実や感情を強いられることなく自由にもものを書くことができる政治的環境を築くことで、その社会を改善できるとオーウェルは考えていたのである。

### 3. 本能への過信によって築かれる社会

『1984年』はトマス・モア (Thomas More, 1478-1535) の著書『ユートピア』(Utopia, 1516) 以来伝統のあるユートピア小説に対するアンチテーゼである、ディストピア小説の代表格の地位を占めている。実際にユートピアの土地に行くことを期待したイギリス人たちが、その期待を裏切られた際にどのように動くのかを、デイヴィッド・シンクレア (David Sinclair, 1945-) は、著書『幻の国を売った詐欺師』(Sir Gregor Macgregor and the Land That Never Was, 2003) において、グレガー・マグレガー (Gregor MacGregor, 1786-1845) というイギリス軍人が 1822 年に起こした詐欺事件で分析している。マグレガーはポヤイス国という中南米にあるというユートピア的な架空の国の領主を自称し、イギリスの人々からポヤイス国への移民団

を募る詐欺事件を起こした。ポヤイス国の風景は開拓移民の為に用意された 350 ページにも及ぶ立派なガイドブックのなかで、“one of the most healthy and beautiful spots in the world”として紹介され、街角の歌でも歌われていた (5-6)。移民団はそれらのパンフレットや新聞に掲載された広告を見て集まり、マグレガーはその中で役人志望者と面談をし、移民団のリーダーにはヘクター・ホール (Hector Hall, 生没年不詳) という元イギリス陸軍将校を採用し、中佐の階級を与えてポヤイス国の首都セント・ジョゼフの副総督にも任命した (76)。ところが移民団が送られた場所はユートピアの国ではなく、中南米の未開の荒野であった。結果的に移民団の 3 分の 2 が病気などで現地において死ぬことになったが、生き残ってイギリスに帰国できた少数の者達の非難の矛先は、奇妙なことにマグレガーではなく移民団を指揮したホール中佐に向けられた。彼らはマグレガーに騙されたことに帰国後も気が付かず、ポヤイスに到着した後の悲惨な状況はマグレガーの相談役や計画をまとめ上げる仕事を託された人々の過失に違いないと考えたという。あるグループはロンドン市長宛ての宣誓供述書に「もしサー・マグレガーご自身が一緒に船で来ていただいたか、もしくは指導者として誠実な人物を現地に送っていたら、結果は全く違ったものになっていたと断言します。」と記載している。これについて、シンクレアはこれらの教養のない人々はもともと期待水準が低く、何事にも黙って耐え、社会的地位の高い者に虐待されても日々生存の為に奮闘することに慣れていることが関係しているとしており、彼らが望んだのは、自分たちの上に立つ権限を持った人々が、責任を持って彼らの職務を遂行することだけだった為、彼らはマグレガーの詐欺に最後まで気が付かなかったとシンクレアは考えている (225-26)。その為、現地での入植活動の責任を放棄したホール中佐に、移民団の生存者の非難が殺到する事態となったとシンクレアは推測している。一方ホール中佐は移民団が送られた到着地に住居建設の指揮をする気配が全くなく、スケジュールを立てたり、労働者をチーム分けすることすらしなかった (98-99)。なぜなら彼は船の目的地のセント・ジョゼフという架空のポヤイス国の首都が見つからなかった時点で、ここでの居住地の建設は不可能であることを悟っていた (103)。ホール中佐らポヤイス国の幹部になるはずであった人々は、自分たちがマグレガーから騙されたことを、貧しい他の移民たちとは異なり

現地に到着後即座に理解することができ、自分たちがマグレガーから与えられた権限はポヤイス国と同様にインチキであり、マグレガーの詐欺行為の埋め合わせは自分たちの仕事ではないと考えた結果、現地での入植活動の指揮を放棄したとシンクレアは推測している (228-29)。

しかし、この詐欺事件の犯人のマグレガーには、詐欺事件として矛盾点が多く存在していた。マグレガーは移民団の奉公人を賃金前払いで雇い、ポヤイス国への移民の先駆けとなることを記念して移民団の女性と子供の船賃を無料にし、移民団の船をチャーターする為にマグレガーは金を払い、その船の改修までしている。このような詐欺事件にもかかわらず利益が得られなくなるマグレガーの矛盾した行為の原因として、つねに夢想家だったマグレガーは自分のポヤイス公としての偽りの姿に酔ってしまっていたことが原因だとシンクレアは考えている (322-23)。

この事件の階層による態度の違いを『1984年』に当てはめてみた場合、マグレガーがイギリス社会主義を意味するイングソックの思想を生み出したビッグ・ブラザー、ホール中佐ら移民団の指導者がオブライエンら党上層部、移民団の大半を占める貧しい移民たちがプロレと呼ばれる下層階級の者たちに該当する。プロレたちはイングソックや党の教義を理解できず、自分たちが搾取されているとも知らずに自由奔放な生活を送っている。彼らに自由が与えられている理由は、イギリスの労働者階級の者たちは目の前の生活のみに気が回り、ただ自分たちの直属の上にいる責任者が義務を果たして自分たちの生活が成り立てばそれで良いという、長年培われてきた奴隷的な思考が悪用されていることが、マグレガーの事件から読み取れる。一方でオブライエンら党上層部の者たちは、ユートピアの社会とは相いれないイングソックの思想的欠陥を理解する知性を持っているが、それを二重思考の教義などでごまかし、指導者としての責任を放棄して自分たちの都合の良い社会を築くことのみを眼中が置かれている<sup>13</sup>。

党中枢メンバーの者達は知性に基づく理性的判断を二重思考で打ち消すことで  $2+2=5$  が正しいと認識でき、理性の代わりに本能に基づく判断によって政治を行っている。このことが、『1984年』の物語の世界について説明しているゴールドスタインによる『寡頭制集産主義の理論と実践』の書の結末において、次のように示されている。



Here we reach the central secret. As we have seen, the mystique of the Party, and above all of the Inner Party, depends upon *doublethink*. But deeper than this lies the original motive, the never-questioned instinct that first led to the seizure of power and brought *doublethink*, the Thought Police, continuous warfare and all the other necessary paraphernalia into existence afterwards. (246-47)

ここで『1984年』の世界を作り出した本当の誘因とは、「疑問の余地のない本能」(“the never-questioned instinct”)であると明言されている。思考ではなく無意識的な本能によって社会が築かれるという構図が『1984年』の特徴である。意識を伴う理性的な判断による政治を求めていたオーウェルは、疑問の余地のないものと認識された本能による直観的な判断によって築かれた社会を『1984年』で描き、直観力としての本能に基づく判断への過信は危険であることを読者に訴えているのである。『1984年』においてウィンストンは、誰が党によって秘密裏に捕まり、誰が生き残るのかについて、理性ではなく直観的な感覚から次のような予測を行う。

Mrs Parsons would be vaporized. Syme would be vaporised. Winston would be vaporized. O'Brien would be vaporised. Parsons, on the other hand, would never be vaporised. The eyeless creature with the quacking voice would never be vaporised. The little beetle-like men who scuttled so nimbly through the labyrinthine corridors of Ministries—they, too, would never be vaporised. And the girl with dark hair, the girl from the Fiction Department—she would never be vaporised either. It seemed to him that he knew instinctively who would survive and who would perish: though just what it was that made for survival, it was not easy to say. (70)

オブライエンは党に捕まり、黒髪の少女であるジュリアは決して捕まらないだろうといったウ

インストンの本能に基づく予測は後に完全に外れてしまう。このようにオーウェルは、人は無意識の能力による直観力として「判断する本能」を保持していると考えているが、本能に基づく判断を妥当性を伴わないものとして描いており、彼は本能的な判断が政治において用いられることを危惧している。

第二次世界大戦中にイギリスの首相を務めたウィンストン・チャーチル (Winston Churchill, 1874-1965) は自伝『あらゆる旅—わが半生』 (*A Roving Commission: My Early Life*, 1930) において、南アフリカ連邦の首相ルイス・ボータ (Louis Botha, 1862-1919) が、彼に第一次世界大戦が近づいていることを警告した出来事に言及している。この時チャーチルは、ボータの“unerring instinct”が彼自身に戦争を的確に予知させたとして、彼の能力を称賛する為に本能という言葉を用いている (255)。しかしオーウェルは評論「ライオンと一角獣—社会主義とイギリス精神」 (*The Lion and the Unicorn: Socialism and the English Genius*, 1941) において、本能に対する過信を次のように批判している。

The mishandling of England's domestic problems during the nineteen-twenties had been bad enough, but British foreign policy between 1931 and 1939 is one of the wonders of the world. Why? What had happened? What was it that at every decisive moment made every British statesman do the wrong thing with so unerring an instinct? (*CEJL* vol. 2 69)

ここでオーウェルは、1931年から1939年の間に、誤ることの無い本能を備えた政治家たちに必ず間違いを犯させたものは何だったのか、と疑問を呈している。それは誤ることが無いと思われている本能への過信が原因であるとオーウェルは考えている。この評論の中でオーウェルはチャーチルと同様の “an infallible instinct” (72) もしくは “an unerring instinct” (85)、という表現を用いて、本能に基づく判断がイギリスの政治をドイツとの融和政策などの誤った方向に導いたと主張している。オーウェルは評論「書評—ウィンストン・チャーチル『最良の

時』(Review: *Their Finest Hour* by Winston S. Churchill, 1949)において、ドイツに屈しない態度を取り続けた政治家としてチャーチルの勇気を賞賛しており (CEJL vol. 4 494)、チャーチルはドイツへの融和政策に反対の立場を取る政治家の代表格であったが、皮肉なことにその彼すらも本能的な判断を重視する表現を著書で用いている事実は、当時いかに本能的判断が政治において過信されていたのかを物語っている。

オーウェルが政治的な判断を下す本能に対して否定的な要素を強調した要因については、当時の時代背景が関係している。関静雄 (1947-) は著書『ミュンヘン会談への道』(2017)においてドイツへの融和政策を象徴するミュンヘン会談を分析している。当時のイギリス首相ネヴィル・チェンバレン (Neville Chamberlain, 1869-1940) は1938年3月20日付の書簡にて、ロシア人は私たちが対独戦に巻き込もうと、こっそり狡猾にあらゆる事件の背後で糸を操っている、と書いており (60)、当時のイギリスはロシアの社会主義の脅威を同時に意識していたことが読み取れる。資本主義国同士で戦争を行えば両者は弱体化し、そこでロシアが漁夫の利を得ることが可能になるからである。さらにチェンバレンの首相時代に駐独大使を務めたネヴィル・ヘンダーソン (Nevile Henderson, 1882-1942) は、公平な対独認識を基礎に英独関係の改善を図ることが、欧州平和に繋がるのであり、自分の大使としての使命も、まさにこのような態度で英独関係の改善に尽し、悲惨な戦争を二度と繰り返さずに欧州平和の維持に貢献することであると考えていた、「善意」の「平和主義者」であったことは間違いないと、関は述べている (18)。さらに当時の第一次世界大戦後の英仏において、「ネヴァー・アゲイン・シンδροーム」とも呼ばれる「平和主義」の感情があり、特に150万人もの戦死者を出したフランスでは、自然な現象として「軍国主義」を忌避する一方で「平和主義」が抗しがたい勢いを得ていた。この影響がフランスで戦争前は3年間であった兵役期間が、1928年には1年間に短縮された結果にも見られると関は述べている (146)。オーウェルは評論「ナショナリズム覚書」において平和主義の問題点について述べている。

The majority of pacifists either belong to obscure religious sects or are simply

humanitarians who object to taking life and prefer not to follow their thoughts beyond that point. But there is a minority of intellectual pacifists whose real though unadmitted motive appears to be hatred of western democracy and admiration for totalitarianism. Pacifist propaganda usually boils down to saying that one side is as bad as the other, but if one looks closely at the writings of the younger intellectual pacifists, one finds that they do not by any means express impartial disapproval but are directed almost entirely against Britain and the United States. Moreover they do not as a rule condemn violence as such, but only violence used in defence of the western countries. (*CEJL* vol. 3 374)

ここでオーウェルは、平和主義者の大多数は宗教的組織に属している者か、生命を奪うことに反対する人道主義者であるが、それとは別にイギリスの若い知識人の平和主義者の非難のほとんど全てがイギリスとアメリカ合衆国に対して行われ、自国の自衛の為の暴力のみに非難の矛先を彼らが向けているという不公平な点を指摘している。さらにオーウェルは評論「スペイン戦争回顧」において次のように述べている。

Nourished for hundreds of years on a literature in which Right invariably triumphs in the last chapter, we believe half-instinctively that evil always defeats itself in the long run. Pacifism, for instance, is founded largely on this belief. Don't resist evil, and it will somehow destroy itself. But why should it? What evidence is there that it does? (*CEJL* vol. 2 259)

ここでは人々は数百年間、最後には決まって正義が勝つ文学にはぐくまれてきたおかげで、彼らは本能的に、悪は最後には自らの手で滅びるものだと思える感覚を持っているとオーウェルは指摘している。その為平和主義の主張の背景には、「悪に抵抗するな、そうすれば悪はいず

れ自滅するものだ。」という信念があるが、オーウェルはこの信念には根拠がないことを強調している。彼はこの本能的な信念がドイツへの融和政策といった誤った判断をイギリスにもたらした一因であると考えている。その為、本能の直観力に基づく判断に頼らず、現状に対する明確な根拠を基にした理性的な判断に基づく政治を求めているのである。

その一方で、後にアメリカ大統領になるジョン・フィッツジェラルド・ケネディー (John Fitzgerald Kennedy, 1917-63) はイギリスの対独融和政策について調査した著書『何故イギリスは沈黙したか』 (*Why England Slept*, 1940) において、飛行機の発達に言及している。イギリス空軍元帥ヒュー・トレンチャード (Hugh Trenchard, 1873-1956) が1936年11月に行った演説で、現代では数千機の飛行機が第一次世界大戦で投下された全体の量以上の爆弾を、わずか数時間で落とすことができると述べたことが、イギリス人の心に衝撃をもたらしたとしている。さらにスペイン内戦で空を見上げる避難民の写真により、より一層イギリス人の間に飛行機への恐怖感が高まったとケネディーは指摘している。ケネディーは、感情は事実よりも人々を強く動かす (“**Emotions move people far more strongly than facts**”) と指摘し、空からの死と言う不安感がイギリス国民を支配し、それがミュンヘン会談の対独融和政策に圧倒的な影響力 (“**an overwhelming effect**”) を持ったと結論付けている (154-55)。オーウェルは『空気を求めて』において爆撃機をストーリーの始めから終わりに至るまで主人公の真上に登場させ、当時間近に迫る戦争への危機感の象徴として用いている。また『カタロニア賛歌』の結末においても、スペイン内戦への関与を対岸の火事として拒否して今は深い眠りにについているイギリスに対し、将来飛行機の爆弾が目覚めさせるのではないかというオーウェルの不安の描写で幕を閉じている (187)。飛行機の戦争への使用は、従来の戦争とは異なり戦場と市民の家庭との境界が無くなることを意味し、市民にとっては逃げ場がなくなるという新たな恐怖を生み出した。第一次世界大戦で本土がほとんど戦場にならず従来の戦争のように市民は兵士を戦場へ激励と共に見送るという状況が一般的であったドイツや、国土が戦場となり市民にも大量の死者が出たフランスとは異なり、第一次世界大戦では国土が戦場にならなかったもののロンドンがドイツによって爆撃された経験を持つ島国のイギリスは、飛行機による爆撃こそが市民

にとって恐怖の存在であるという特徴を持っていた。その為、イギリスのドイツに対する融和政策は、オーウェルが主張しているように偏った平和主義や悪はいずれ自滅するものだという感覚に基づく本能的な判断のみによって無意識のうちに採用されたのではなく、その本能に加えて第一次世界大戦の実体験に基づく「自己保存の本能」による空襲に対する恐怖感の要素が重なってイギリスのドイツへの融和政策が導き出され、それが結果的に第二次世界大戦を招いたと考えられる。

これらのイギリス人が持つ新たな戦争への本能的な拒絶感に付け込んで領土拡張政策を押し進めたヒトラーも本能の重要性を理解しており、『わが闘争』において、「自己保存の本能」と似たニュアンスを持つ「種の保存本能」という言葉を次のように用いている。

国家はいまだかつて平和な経済によって建設されたことがなく、それが英雄的徳の領域にあるか、狡猾な老獪さの領域にあるかは知らないが、つねにただ種の保存本能によってのみ建設されるのである。すなわち前者がまさしくアーリア人の労働国家、文明国家を作りだし、後者がユダヤ人の寄生者国家を作った (162)。

ここで彼は「種の保存本能」(“die Instinkte der Erhaltung der Art”) (168) のみによって国家は築き上げられると主張している。そしてこの本能により、彼が優秀な民族と見なすアーリア人が文明国家を築き、一方で彼が劣等民族と見なすユダヤ人がその文明国家に寄生する国家を築いたとして、ヒトラーが本能に対して持つ人々への影響力の大きさの認識と、彼の人種差別の意識がここで明確に表れている。カール・デグラー (Carl Degler, 1921-2014) は著書『人間の本質の研究』(*In Search of Human Nature: The Decline and Revival of Darwinism in American Social Thought*, 1991) において、本能を人種差別と結び付けて言及している。フランツ・ボアズ (Franz Boas, 1858-1942) とアメリカの社会学者達による、ナチスの人種差別理論に対する反人種差別の活動が、1930~40年代に社会科学の分野において、遺伝や本能といった言葉が使われなくなったことに影響を与えたとデグラーは述べている (203)。これ

は、本能という言葉を入種差別と結び付けて考える風潮が当時存在していたことを示している。また、ヒトラーは1942年5月14日に、「たとえば猿は、よそ者が入ってくれば共同の敵として相手が死ぬまで攻撃する。猿にあてはまることなら、人間にはもっとあてはまるはずだ」と述べている。この発言を基に、ヨアヒム・フェスト (Joachim Fest, 1926-2006) は著書『ヒトラー最期の12日間』(*Der Untergang: Hitler und das Ende des Dritten Reiches*, 2002) において、ヒトラーを生涯にわたって前進させた凶暴な牽引力となったのは、強者の権利というダーウィニズム的スローガンであったと指摘している (197-98)。ナチスの理論はアーリア人を優等民族とみなし、それ以外を劣等民族とみなす独自の優生学がその根幹となっているが、本来、民族間の優劣を唱える優生学とは、チャールズ・ダーウィン (Charles Darwin, 1809-82) のいここであるフランシス・ゴルトン (Francis Galton, 1822-1911) によって提唱された学問であり、ダーウィンの理論に強く影響された思想であった。その一方で、ダーウィンは著書『人間の進化と性淘汰』(*The Descent of Man, and Selection in Relation to Sex*, 1871) において、本能に対して極めて肯定的な態度をとっている。彼は、人間は下等動物と同じ感覚を持っており、自己保存、性愛、母性愛などの本能も動物と共有していると述べている (446)。さらに彼は次のように述べている。

The moral sense perhaps affords the best and highest distinction between man and the lower animals; but I need say nothing on this head, as I have so lately endeavoured to shew that the social instincts,—the prime principle of man’s moral constitution—with the aid of active intellectual powers and the effects of habit, naturally lead to the golden rule, “As ye would that men should do to you, do ye to them likewise.” and this lies at the foundation of morality. (495)

ここでダーウィンは、本能こそが道德心の根源であり、これによって「汝が人から欲することを汝が行え」という道德律が導かれ、この道德心の有無が人間と下等動物との分かれ目である

と主張している。しかしダーウィンの意図とは裏腹に、ヒトラーに代わりホロコーストを主導した人物であるアイヒマンは自身の裁判中、自分はイマヌエル・カント (Immanuel Kant, 1724-1804) の道德規範に従って全生涯を生きてきたと強調している。彼は裁判の中でカントの定言命法のほぼ正しい定義を述べ、自分の意志による道德の基準は、常に普遍的な法の基準になり得るものでなければならなかったと述べている。その一方でアイヒマンは、自分がユダヤ人を絶滅させるという最終的解決を行っているときはカントの道德規範に従うことを止めていたが、この時自分は自分の行為の主ではなく、自分は何も変えることができないという考えによって自分を慰めていたと告白している。この2つの態度は矛盾しているものの、アーレントは、カントの哲学において普遍的な法を生じさせる原理である実践理性が、アイヒマンにとってはヒトラーの意志に置き換わっている点を指摘している (135-37)。アイヒマンは自分には何も変える力がないとして、自由意思を否定している。これと同じく、『1984年』における本能的な判断によって築かれた国家に住むウィンストンの結末も、彼は精神の全てをビッグ・ブラザーにゆだねて自由意思を否定したことによって、無意識における本能的な判断と行動を頼りに生きる存在になったことが示唆されている。オーウェルは小説において自由意思を認めない宿命論的な物語を執筆して個人ができることの限界を表しているが、政治においてはミルトンのアレオパジチカを支持し、人は操り人形ではなく自由意思を保持しているがゆえに、政治的な物事において過ちであると思われることに反対を表明できる自由な環境が必要であるとの立場に立っていた。オーウェルは当時蔓延しつつあった「誤ることのない本能」という妄想が生み出す国家の悲劇を、『1984年』において「昆虫のような人間」が暮らす世界として描くことで、直観力としての本能に基づく政治に歯止めを利かせようとしたのである。そして生来的な人権意識を含んでいるディーセンシイの道德心が政治に取り入れられ、意識を伴った判断と言語によって政治が行われることで、昆虫ではなく人間的な生活を人々が営むことが可能となり、ディーセンシイが守られる社会が築けるとオーウェルは考えていたのである。



## 結論

本稿は、従来の研究ではほとんど無視されてきた、オーウェルが描く人の本能の働きに焦点を当て、彼が小説で描く人間の本能的な行動を分析し、それにより彼がディーセンシイと呼ぶ道徳心に基づく社会を彼はいかに守ろうとしたのかという問いを解明しようとしたものである。先行研究において、オーウェルにとってのディーセンシイには、キリスト教的徳、自由主義的徳、生来的な人権意識が含まれており、彼はその意識を政治に取り入れようと考えていたと指摘されている。そして彼の小説では一貫して人は意識を伴う理性よりも、無意識による本能に基づく行動を優先して行動する存在として描かれている。彼の小説における登場人物は「道徳的な本能」、「真実を求める本能」、「自己保存の本能」、「依存する対象を求める本能」、「判断する本能」の5つの本能に突き動かされている。オーウェルが導き出したそれらの本能的衝動によって生み出される人々の様々な心理を分析することで、人々にディーセンシイの道徳心を保持させる為には何が必要であるとオーウェルは考えていたのかを本稿において明らかにした。

オーウェルは「人間の本性を改善せずに社会のシステムを変えても意味がない」という立場と、「社会のシステムを変えなければ、人間の本性は改善できない」という双方の立場に立ち、人の精神を内面と外側の両面から改善していく必要があると考えていた。まず前者の立場に基づき、オーウェルは「道徳的な本能」によって行われる人々の様々な道徳的行為を小説で描いている。そしてオーウェルは悲劇的小説を書くことで、たとえ悪に敗れたとしても価値を保ち続ける善の精神が存在することを読者に認識させ、人々に道徳心を抱かせようとした。オーウェルによると人は生来的に「道徳的な本能」を身に付けており、目の前にいる傷ついた人を助けたり、戦場において目の前の人を撃つことをためらってしまうといった、生来的な人権意識を他者に対して感じることで道徳的な行動を無意識に人はとることができる様子をオーウェルは描いている。さらにオーウェルはキリスト教倫理としてのディーセンシイも重視しており、子供のような純粋な心を持つ者が天国に入れると述べたキリストと同様の感性をオーウェル

は持っており、子供が自然に対して驚きと喜びを見出すような心のゆとりを持つことが、人々の心に必要であると考えていた。人は「真実を求める本能」を持っており、日々の労働から解放されて自然の中に身を置いた際には、その中に神聖な感覚を感じ取ることができ、この世の中を動かしている真実とは何であるのかを人は本能的に追及する存在であるとオーウェルは考えている。さらに人はジレンマに陥った際にも真実を求める衝動に動かされるとオーウェルは考えていた。この考えをオーウェルは『牧師の娘』において描いており、主人公のドロシーは自然界に神秘性を感じ取る一方で、過去の時代では真理とされていた基督教の信仰が衰退した現代において、基督教とどのように接したらよいのかを思い悩み、そのジレンマから夢遊病となって外の世界に旅に出る。理不尽な教会の外の世界を体験したドロシーは最終的に、たとえ基督教を信じなくても教会に行かないより行った方がよく、よりどころの無い気ままさの中でさまようよりも昔のやり方に従った方がよいと考えるようになる。ここでオーウェルは、たとえ基督教の信仰心を持たなくても、不正な行動を抑える基督教倫理が人々の心に保たれておく必要があることを読者に対して示している。

また、オーウェルは子供を知性面では白紙状態であるが、精神面では無垢な純粋さと「自己保存の本能」に従う残酷さの両方を生来的に兼ね備えていると考えていた。その為、子供は愛情のみを受けても恐怖のみを受けても、結果的に大人になったときトラウマが残るということを、オーウェルは『1984年』と『楽しかりし日々』において示している。そしてオーウェルは現実において人生とは失敗の連続であり、心にトラウマが残るのは避けられないという見方をしていた。このトラウマを解消できる方法の一つである回心という行為について、オーウェルはその危険性を認識していた。なぜなら、オーウェルは心のわだかまりが取り除かれて自分は生まれ変わったという感覚を得た後に、その人は生来の本能的な狂暴性を曝け出す可能性があることを意識していたからである。この危険性が『1984年』の結末でウィンストンがカルト的なビッグ・ブラザーの教義を受け入れるという描写によって読者に示されている。人は過去のトラウマを回心などによって解消しようとする心理が働くが、人々がディーセンシィの感覚を保持する為に、回心の際の危険性を認識しておくことの必要性を、オーウェルは『1984

年』で読者に訴えているのである。さらに人は「依存する対象を求める本能」を保持している為、過酷な現実と直面した場合、人は回心などの行為を通して精神的に依存できるものを求めるという心理が働くとオーウェルは考えていた。『1984年』においてこの心理は、ウィンストンにジンを飲むこと、性行為、そしてカルト的教義に無意識のうちにはまり込む状態へ導くという負の面が強調されて描かれている。さらに周囲の人々から孤立した人は依存できる対象として特定の人物に自分を理解してもらいたいという願望を持つようになり、その感情が夢などの無意識的なものに表れ、その情動に突き動かされる心理を持つようになるとオーウェルは考えていた。人は依存できるものや特定の人物を見つけた場合それらにのめり込み、たとえそれを止めたくなくても止められなくなるほどの深みの中にはまってしまう心理があることをオーウェルは危惧し、その危険性を『1984年』で読者に認識させようとしている。

また、オーウェルは中庸の精神をディーセンシイの道徳心において重視していた。人間は聖人的になろうとする面と俗人的であろうとする面の2つを同時に保持しているとオーウェルは考えている。人間とは二面性を保持している存在である以上、人は極端な禁欲も、何らかの依存症に陥ることも避ける必要があり、人々の生活においては中庸の感覚が大切であるという立場をオーウェルはとっている。オーウェルは、人は「道徳的な本能」を保持している為、他者に対して社会規範によって形成された道徳的な行動を無意識のうちに行うことができる一方で、その社会規範が形成した残酷な役割も人は果たすことを強いられる問題があり、さらに人は「自己保存の本能」による残酷な行動をとってしまう面を生来的に持っているとしてオーウェルは考えている。その為、美德に基づく思想や、自分自身と他者の心の中に隠れている残酷な側面に対して反抗することで中庸の精神を保たせることが、ディーセンシイが成り立つ社会に繋がるとオーウェルは考えていた。そしてオーウェルは人間の残酷な面や飲酒等に依存してしまうといった愚かしい面を、小説の中で読者に本能的な嫌悪を感じさせる形で描き出すことで、読者の心に日々の生活において中庸の精神を持つディーセンシイの感覚を身につけさせようとしたのである。

このように「人間の本性を改善せずに社会のシステムを変えても意味がない」という立場に

基づいてオーウェルは人間の精神を内面から改善しようとする一方で、「社会のシステムを変えなければ、人間の本性は改善できない」という立場も同様に重視しており、社会を政治によって改善する必要性を著書で強調している。人は社会規範に無意識に従う存在であり、その社会規範を形成する政治においても中庸の精神を含むディーセンシイの感覚が守られる必要があるとオーウェルは考えていた。特に彼がナショナリズムと呼ぶ政治的に偏向した心理状態に人は無意識に陥る危険性を彼は認識しており、それを『1984年』でその世界に住む人々の心理として登場させ、絶えず悪の敵国を打ち破る偉大なるビッグ・ブラザーを崇めるカルト崇拜の思想として描いている。『1984年』の社会においては、この思想によって築かれた社会規範に基づいて本能的に動き回る人間を昆虫に喩えて、その社会の異常さを表現している。オーウェルにとってのディーセンシイは生来的な人権意識の道德理念が含まれており、人々が昆虫のように活動する社会は人権意識が欠けている為、ディーセンシイが成り立つ社会ではないことをオーウェルは読者に印象的に示しているのである。『1984年』の世界では、回心の選択肢がビッグ・ブラザーの教義以外が消滅させられた環境である為、ウィンストンはそれを受け入れざるを得ず、トルストイの『戦争と平和』におけるピエールの回心とは対照的に、ウィンストンは精神的成長を遂げることができない。オーウェルは個人の活動の範囲内で精神的な成長を遂げるには限界があることを認識していた。ジャック・ロンドンを通してアメリカにおける自然主義文学の影響を受けているオーウェルは、自然の成り行きの力が人生を決定付ける宿命論的な立場を取っており、人に精神的な成長を遂げることを可能にする社会環境を築く必要性を、オーウェルは『1984年』でそれとは対照的な社会を描くことで読者に訴えているのである。

また、オーウェルのディーセンシイの感覚には自由主義的美徳が含まれており、『1984年』において  $2+2=5$  に象徴されている改変された事実に対し、それが過ちであるとはっきり主張することができる自由が政治的に認められた社会が、ディーセンシイが守られている社会であるとオーウェルは考えていた。『1984年』において  $2+2=5$  は改変された歴史的事実も表しており、オーウェルは歴史における真実を人が正しく認識できる社会の必要性を感じていた。オーウェルは、真実とはたとえ人が否定したとしても存在し続ける物であり、人の認識によって

変化するという立場を否定している。当初、オーウェルは古代の歴史上の戦いを連想させる幻想的なイメージを戦争に対して持っていたが、スペイン内戦に参加したことでそのイメージが崩れ、機械化された戦争により機械に対する恐怖を認識するようになった。さらに彼は5月事件に巻き込まれて歴史が改変された事実を目撃したことで、正しい歴史を書く重要性も同時に認識した。オーウェルは機械が政治的に悪用されるのを防ぐには、文学と歴史的な教養を身につけて社会的な視野を広げる必要があると考えていた。その為、ディーセンシィが守られる社会を築く為には文学と改変されていない正しい歴史を教える教育が人々に行われることが重要であると、オーウェルは評論「科学とは何か」を通して読者に訴えている。

また、人は「判断する本能」を保持しており、本能的に物事を判断する心理があるが、これは無意識の直観力による判断であり客観的な妥当性がないとオーウェルは考えており、彼はその問題点を『1984年』で描いている。オーウェルは、政治の世界において本能的に物事が判断される状況を懸念していた。そして彼は政治において本能的な判断を防ぎ、極端な思想が排除される中庸が達成される為にまず必要なのは、意識を伴った言葉の使用であると考えていた。その為、政治において既存の決まり文句を並べたものを無意識的に述べるのではなく、自分の言いたいことをまず心に思い浮かべ、それに当てはまる言葉を意識して使用することが大切であるとオーウェルは「政治と英語」において指摘している。オーウェルが生きた時代の1930年代は不況の時代であり、特に中産階級の人々の間で社会に対する幻滅が広がり、それが全体主義思想への支持に繋がっている可能性をオーウェルは認識していた。オーウェルは、バーナムの『経営者革命』の影響を受け、バーナムが主張するように、人は権力を本能的に求めるものであるという従来の階級思想に基づいた感覚に危機感を抱いていた。権力に対するオーウェルの見方は、バーナムや『1984年』におけるオ布莱イエンのものとは異なり、階級社会が無用となりつつある現代では、政治的な権力を求める欲求は本能的なものではなく旧来の階級規範に基づく単なる願望である為、理性によって制御することができるものであるとオーウェルは考えた。その為、政治の場において人が明確な言語を使用して意識を伴った思考を巡らすことができれば、『1984年』で描かれるような政治が行われることはなく、機械が人々の生活の

向上の為に利用されてディーセンシィの道徳心が守られる心に余裕のある生活を人々が送れるようになる。オーウェルは考えていた。彼は政治において「判断する本能」を頼りにせず、意識を伴う理性的思考を用いることの重要性を人々に認識させることで、ディーセンシィが守られる社会を築こうとした。オーウェルは無意識の本能的衝動によって生じる人々の様々な心理とその問題点を著書によって人々に認識させることでディーセンシィを守ろうとした作家であった。

## 註

- 1 ベン・ジョンソン (Ben Jonson, 1572-1637) はシェークスピアの作品をまとめた『ファースト・フォリオ』(*First Folio*, 1623) の序文で、シェークスピアを生まれ故郷にちなんで「エイヴォン川の白鳥」と呼び (10)、それがシェークスピアを指すあだ名になった例があるものの、川の名前をペンネームに用いる作家はイギリスでは極めて珍しい。川の名前をペンネームに用いた有名な人物として、ロシアの社会主義者であり、シベリアのレナ川に由来するレーニンというペンネームを用いたウラジーミル・ウリヤノフ (Vladimir Ul'yanov, 1870-1924) や、ロシアの社会主義の父とされ、ヴォルガ川に由来するヴォルギンのペンネームを用いたゲオルギー・プレハーノフ (Georgii Plekhanov, 1856-1918) がいる。しかしオーウェルは評論においてレーニンに対する賛美を一切書いていない為、レーニンにちなんで川の名前を用いたとは考えにくい。
- 2 梶山義男 (1955-) の共著『中世思想原典集成—カロリング・ルネサンス』(1992) による解説によると、ドイツとオランダにおいてゲルマン人へのキリスト教の布教活動を行った聖ボニファス (Saint Boniface, 672-754?) は、ドイツのフリッツラーでトール神としてゲルマン人達から崇められていたオークの神木を切り倒し、その後ドックム近郊で彼の多くの仲間とともにゲルマン人に殺害されている。この出来事が、ゲルマン人の自然崇拜の信仰がキリスト教の布教の障壁となっていたことを物語っている。
- 3 レオポルト・ランケの論文集である『歴史・政治論集』(1948) によると、ランケは1836年のベルリン大学における教授就任記念講演での発表において、歴史を学ぶことは物事の本源の探求へと向かっていき、人類が営む生活の最も隠れた動きにまで迫ろうと努力することが目的であるが、これを到達することができるものと考えるのは全くの誤りであると述べている (153)。事実は資料によって確定できるとする立場を取っているランケですらも、その歴史を動かしている力を把握することの困難さを理解していた。この世を動かしている真理について不可知論的に見ているオーウェルと、共通の認識をランケは持っている。
- 4 当時のイギリス人は、多くの戦争賛美の詩を新聞に掲載するだけでなく、詩に合わせた愛国的な歌を作曲することによっても戦意高揚を高めようとしていた。戦意高揚の為に使用された詩として、ウィリアム・ブレイク (William Blake, 1757-1827) の詩「ミ

ルトン」(‘Milton’, 1804) が挙げられる。この詩では次のような表現が用いられている。

Bring me my Bow of burning gold:  
Bring me my Arrows of desire:  
Bring me my Spear: O clouds unfold!  
Bring me my Chariot of fire! (9-12)

この詩はヒューバート・パリ (Hubert Parry, 1848-1918) が 1916 年に作曲した、『エルサレム』(*Jerusalem*, 1916) の曲の歌詞として用いられ、この曲によって黄金の弓や炎のチャリオットを用いた神話上の戦いを第一次世界大戦と重ね合わせた幻想的なイメージが作り上げられた。また、ロバーツの『暗黒の試み—第一次世界大戦の詩とその背景と注釈』によると、当時のイギリスの学生は、実際には他国の軍に比べると時代遅れの装備を持っていたイギリス軍の実情を無視し、戦争や兵士達は偉大であり、自分たちをギリシャ神話の英雄であるという現実離れした空想を持っていたとロバーツは指摘している (89)。

- <sup>5</sup> 1930年代を代表するイギリス人作家のグループとしてオーデングループがある。オーデングループは、1935年以降は社会問題に高い関心を寄せ、自分たちの階級が恵まれているのはプロレタリアの犠牲の上であるとして社会主義に共鳴していた。彼らは共産党に入党したり平和主義者になったりと、オーウェルにとっての社会主義とは違う方向で活動した。この中でウイスタン・ヒュー・オーデン (Wystan Hugh Auden, 1907-73) とスペンダーはスペイン内戦に参加しているが、兵士としてではなく共和国寄りの記事を書く記者としてスペインを訪れている。単なる記者としての戦争への参加をオーウェルは低く見ており、オーウェルは評論「クジラの腹の中で」(‘Inside the Whale’, 1940) において、オーデンの「スペイン」(‘Spain’, 1937) の詩の中で “murder” という言葉が使われている点を問題にしている。オーウェルはヒトラーやヨシフ・スターリン (Joseph Stalin, 1879-1953) といった政治的な殺人を厭わない人物ですら、殺人という言葉が直接使わず、代わりに “liquidation” や “elimination” といった婉曲法を用いて殺人を言い表している点を指摘している。その上で殺人という言葉が直接軽々しく使えるのはオーデンのように実際にファシストに人々が殺される現場に身を置いたことがなく、殺人を言葉としてしか知らない者だけだとしてオーウェルは彼を批判している。さらにオーウェルは、30年代の主要な作家のほとんどが第一次世界大戦のはっきりした記憶を持つには若すぎた世代に属しており、この世代の人々にとって粛清や秘密警察があまりにも遠い出来事である為、それらに恐怖を感じないことが、イギリスの知識人の間でソ連崇拜が広まった原因の一つであると主張している (CEJL vol. 1 515-16)。

- <sup>6</sup> オーウェルの「楽しかりし日々」は単なる回想録ではなく、体罰を受ける子供の心情を描くことで子供の教育はどのように行えばいいのかを読者に問う、教育の在り方についての評論であるとも言える。なぜならこの物語の学校があるイーストボーンは、1860年に「イーストボーンの悲劇」(Eastbourne Tragedy) と呼ばれる事件が起きたことでイギリスでは知られており、これは体罰の是非をめぐる裁判に発展し、当時の社会に大きな反響を与えた事件の舞台だからである。寺崎弘昭 (1951-) は著書『イギリス学校体罰史—「イーストボーンの悲劇」とロック的構図』(2001) において、この事件の詳細を分析している。「イーストボーンの悲劇」とはトマス・ホープリー (Thomas

Hopley, 生没年不詳) という教師が 1860 年 4 月 22 日にイーストボーンにおいて 13 歳 (もしくは 14 歳) の少年を体罰で死亡させた事件であり、この際の裁判において、ホープリーは自らの無罪を主張する為に、子供の強情 (obstinacy) を体罰でたたき出す必要があるというロックの教育思想に基づく弁護を行っており、ホープリーは体罰を是認する根拠をロックの教育論に求めていたと寺崎は述べている (167-68)。ロックは著書『子供の教育』において、ホープリーの主張とは裏腹に、教育で用いられる最も不適切な方法は、子供を鞭打つことだとしている。なぜなら鞭打ちのような体罰は、肉体的な目の前の快楽に耽り、苦痛を何としても避けようとする人間の生来の性癖を増長してしまい、墮落した行動を子供に植え付けてしまうからであるとロックは述べている (112)。ただし、ロックは唯一子供が “Obstinacy” や “Rebellion” の過ちを犯した時、子供をたたいてその態度に対する羞恥心を抱かせなければならないとも述べている (138-39)。このロックの体罰に対する曖昧な態度が、体罰を正当化する根拠としてホープリーに利用され、「イーストボーンの悲劇」を招く一因になったと考えられる。しかしオーウェルは鞭打ちの体罰を受けたことで寝小便が止まり、この心に大きな傷を残す野蛮な治療法に効果があったことも認めており (CEJL vol. 4 335)、体罰の是非についてロックと同様にオーウェルは曖昧な態度であり、明確な教育論をオーウェルは出せていない。

7 オーウェルは『カタロニア賛歌』においてバルセロナにあるアントニオ・ガウディ (Antonio Gaudi, 1852-1926) が建築したサグラダ・ファミリアを見た際の心境を述べている。サグラダ・ファミリアが芸術的価値の為に他のバルセロナにある多くの教会と違って無政府主義者たちに破壊されなかったとオーウェルは人々から聞き、オーウェルは彼らは悪趣味だと皮肉を述べて、他の歴史ある教会を破壊した無政府主義者達を暗に批判している (179-80)。教会の中には外の世界でないがしろにされているディーセンシィの感覚が保たれていると『牧師の娘』において主人公のドロシーに結論を下させているオーウェルは、伝統のある教会に敬意を抱いていた為、それらを破壊した味方の側が行った蛮行にも、黙認できないことに対しては批判する精神を持っていた。若松隆の『スペイン内戦と国際政治』によると、内戦期に共和国側に殺された司祭は約 7000 人、破壊された教会関係建造物は 2 万にも及ぶ (73)。

8 トルストイ『戦争と平和』下巻

9 象徴は比喩と同様に、ある概念を説明する際に、それとは本来異なる概念を類似性、共通性の上に結び付けて表現するという働きを持つ。オーウェルに関する研究において、彼の作中に登場する象徴的な表現が何を指しているのかを読み解くことで、その作品の意義を解明しようとする取り組みが盛んに行われてきた。その例として、宮本靖介 (1936-) は著書『ジョージ・オーウェルの栄光と悲惨』(1995)において、『ビルマの日々』に登場する教会は白人社会を象徴しており、その教会の中でビルマ人娼婦のマ・ラ・メー (Ma Hla May) が半狂乱でフローリーを非難する場面が、ビルマ社会が示す白人社会に対する強烈な拒絶反応を表していると指摘している (39)。

10 『1984 年』に登場するゴールドスタインの書『寡頭制集産主義の理論と実践』の第 3 章「戦争は平和なり」において、戦争について次のように述べられている。

In his capacity as an administrator, it is often necessary for a member of the Inner Party to know that this or that item of war news is untruthful, and he may often be aware that the entire war is spurious and is either not happening or is being waged for purposes quite other than the declared ones: but such



knowledge is easily neutralised by the technique of *doublethink*. (222)

ここで『1984年』の世界で行われている戦争は、実際は起きていない「偽の」(“spurious”)戦争であることに、党員はしばしば気付くかもしれないと書かれている。この文章が示唆しているように『1984年』の世界では実際には戦争が起きてはいない為、その状態を平和としてスローガンは表現していると考えられる。

- <sup>11</sup> 『1984年』でオブライエンはウィンストンに拷問を行っている際に、「自由は隷属なり」のスローガンの意味について次のように説明している。

Alone—free—the human being is always defeated. It must be so, because every human being is doomed to die, which is the greatest of all failures. But if he can make complete, utter submission, if he can escape from his identity, if he can merge himself in the Party so that he *is* the Party, then he is all-powerful and immortal. (303)

ここでオブライエンは、死という最大の敗北を人が避ける方法として、人は自分の精神を党そのものになるまで党に没入させることで、不滅の党と同化して永遠の存在になることができると述べている。その為「自由は隷属なり」のスローガンは、人が自由であれば、死による隷属状態から免れない為、党の精神と同化するべきであると主張していると考えられる。

- <sup>12</sup> 『1984年』に登場するゴールドスタインの著書『寡頭制集産主義の理論と実践』の第1章「無知は力なり」において、無知と力の関係について、“It is in the ranks of the Party, and above all of the Inner Party, that the true war enthusiasm is found. World-conquest is believed in most firmly by those who know it to be impossible.” (245-46)と説明されている。ここでは、誰よりも党中枢メンバーの者達が、政界征服が不可能だと知りながら、党は世界征服ができると固く信じていると述べられている。『1984年』の世界では「二重思考」という二つの矛盾した物事を記憶の中に同時に保持し、党が正しいと言った方を、即座に信じる能力が党員に要求されている。そして党の階級は世襲制ではない為、党中枢メンバーの者から虚弱者は排除され、ウィンストンが属する下級党員の者であっても野心的な者には昇進を許可して党中枢メンバーに加えるという操作を党は行っている (239)。その為、二重思考を実践して物事をありのままに見ることができない無知の状態で党の主張を妄信できる資質を持つ者は、党中枢メンバーに入ることができ、権力としての力を党員は手に入れられることを、「無知は力なり」というスローガンは主張していると考えられる。
- <sup>13</sup> 『1984年』に登場するゴールドスタインの書『寡頭制集産主義の理論と実践』の第1章「無知は力なり」において、次のように党員の思考について述べられている。

A Party member is required to have not only the right opinions, but the right instincts. Many of the beliefs and attitudes demanded of him are never plainly stated, and could not be stated without laying bare the contradictions inherent in Ingsoc. (241)

ここで党員は正しい意見だけではなく正しい本能を有することが党から求められており、党員は党から要求された信念や態度を素直に述べる事が決してできないとされている。なぜならイングソックの思想に内在している矛盾を暴露することなく、それらを

述べることはできないからであると述べられている。ここでイングソックとは矛盾を抱えた思想であり、もし党員が素直に党の言う物事を考えれば、その矛盾が明るみに出てしまうことが示唆されている。それを防ぐ為に、党員には「犯罪中止」(*crimestop*)や「二重思考」と呼ばれる独特な思考形態を幼少時から身につけなくてはならないことがこの後述べられている。「犯罪中止」について、“*Crimestop* means the faculty of stopping short, as though by instinct, at the threshold of any dangerous thought.” (241-42) と説明されている。つまり党員たちは、イングソックの矛盾点など党にとって危険な思考が浮かんだ際は、本能的にその考えを打ち消す能力が求められている。これによって、党員たちはイングソックの矛盾に気付く知力を持ちながらも、党の主張に疑問を抱かずに党が支配する社会を本能的な行動によって構築しているのである。

## 参考文献

- Arendt, Hannah. *Eichmann in Jerusalem: A Report on the Banality of Evil*. New York: Viking Press, 1963.
- Beach, Joseph. “Reason and Nature in Wordsworth.” *Journal of the History of Ideas*, vol. 1, no. 3, New York: Pennsylvania UP, 1940, pp. 335-51.
- Blake, William. “Milton.” *The Complete Poetry and Prose of William Blake*, edited by David V. Erdman, Berkeley: University of California Press, 2008, pp. 95-144.
- Burnham, James. *The Managerial Revolution*. London: Indiana UP, 1966.
- Butler, Samuel. *Erewhon, or Over the Range*. Tokyo: Kenkyusha, 1924.
- Churchill, Winston. *A Roving Commission: My Early Life*. New York: Charles Scribner’s Sons, 1930.
- Coppard, Audrey and Bernard Crick. *Orwell Remembered*. New York: Facts on File, 1984.
- Crick, Bernard. *George Orwell, a Life*. London: Secker & Warburg, 1981.
- Darwin, Charles. *The Origin of Species: By Means of Natural Selection or the Preservation of Favored Races in the Struggle for Life & The Descent of Man, and Selection in Relation to Sex*. New York: The Modern Library, 1936.

- Davison, Peter. *A Life in Letters by George Orwell*. London: Penguin, 2010.
- Degler, Carl. *In Search of Human Nature: the Decline and Revival of Darwinism in American Social Thought*. Oxford: Oxford UP, 1991.
- Doyle, Peter. *World War II in Numbers: An Infographic Guide to the Conflict, Its Conduct, and Its Casualties*. Richmond Hill: Firefly Books, 2014.
- Ferber, Michael. *A Dictionary of Literary Symbols*. Cambridge: Cambridge UP, 1999.
- Fussell, Paul. *The Great War and Modern Memory*. New York: Oxford UP, 2013.
- Fyvel, Tosco. *George Orwell: A Personal Memoir*. London: Weidenfeld and Nicolson, 1982.
- Grossman, Dave. *On Killing: The Psychological Cost of Learning to Kill in War and Society*. New York: Back Bay Books, 2009.
- Hemingway, Ernest. *Death in the Afternoon, with Eighty-one Reproductions from Photographs*. London: Jonathan Cape, 1966.
- \_\_\_\_\_. *For Whom the Bell Tolls*. London: Jonathan Cape, 1969.
- Hitler, Adolf. *Mein Kampf*. München: Zentralverlag der NSDAP, 1927.
- Howe, Irving. *Politics and the Novel*. Cleveland: Meridian books, 1964.
- Kennedy, John Fitzgerald. *Why England Slept*. New York: Ishi Press International, 2016.
- Lakoff, George and Mark Johnson. *Metaphors We Live by*. Chicago: Chicago UP, 1980.
- Lebedoff, David. *The Same Man: George Orwell and Evelyn Waugh in Love and War*. New York: Random House, 2008.
- Locke, John. *Some Thoughts Concerning Education*. Edited by John W. and Jean S. Yolton, New York: Oxford UP, 1989.
- Marx, Karl and Friedrich Engels. *Das Kommunistische Manifest*. Trier: Karl-Marx-Haus, 1995.
- Meyers, Jeffrey. *A Reader's Guide to George Orwell*. Totowa, New Jersey: Rowman &

Allanheld, 1977.

Milton, John. "Areopagitica." *English Minor Poems; Paradise Lost; Samson Agonistes;*

*Areopagitica*, Chicago: Encyclopedia Britannica, 1952, pp. 381-412.

Orwell, George. *A Clergyman's Daughter*. London: Secker & Warburg, 1986.

\_\_\_\_\_. *A Kind of Compulsion: 1903-1936 / George Orwell*. Edited by Peter Davison,  
London: Secker & Warburg, 1998.

\_\_\_\_\_. *Animal Farm*. London: Secker & Warburg, 1987.

\_\_\_\_\_. *Burmese Days*. London: Secker & Warburg, 1986.

\_\_\_\_\_. *Coming Up for Air*. London: Secker & Warburg, 1986.

\_\_\_\_\_. *Down and Out in Paris and London*. Secker & Warburg, 1986.

\_\_\_\_\_. *Diaries: George Orwell*. Edited by Peter Davison, London: Liveright, 2012.

\_\_\_\_\_. *Homage to Catalonia*. London: Secker & Warburg, 1986.

\_\_\_\_\_. *Keep the Aspidistra Flying*. London: Secker & Warburg, 1987.

\_\_\_\_\_. *Nineteen Eighty-Four*. London: Penguin Classics, 2003.

\_\_\_\_\_. *The Collected Essays, Journalism and Letters of George Orwell 1920-1940*. Vol. 1,  
edited by Sonia Orwell and Ian Angus, London: Secker & Warburg, 1968. [以後同書か  
らの引用時 *CEJL* vol. 1 と記載する。]

\_\_\_\_\_. *The Collected Essays, Journalism and Letters of George Orwell 1940-1943*. Vol. 2,  
edited by Sonia Orwell and Ian Angus, London: Secker & Warburg, 1968. [以後同書か  
らの引用時 *CEJL* vol. 2 と記載する。]

\_\_\_\_\_. *The Collected Essays, Journalism and Letters of George Orwell 1943-1945*. Vol. 3,  
edited by Sonia Orwell and Ian Angus, London: Secker & Warburg, 1968. [以後同書か  
らの引用時 *CEJL* vol. 3 と記載する。]

\_\_\_\_\_. *The Collected Essays, Journalism and Letters of George Orwell 1945-1950*. Vol. 4,

- edited by Sonia Orwell and Ian Angus, London: Secker & Warburg, 1968. [以後同書からの引用時 *CEJL* vol. 4 と記載する。]
- \_\_\_\_\_. *The Road to Wigan Pier*. London: Secker & Warburg, 1973.
- Out in the Dark: Poetry of the First World War in Context and with Basic Notes*. Edited by David Roberts, Hockley: Saxon Books, 2014.
- Oxford English Dictionary*. 2nd ed., prepared by J. A. Simpson and E. S. C. Weiner, New York: Oxford UP, 1989.
- Poe, Edgar Allan. “A Dream Within a Dream.” *The Complete Tales and Poems of Edgar Allen Poe*, New York: The Modern Library, 1965, p. 967.
- Rambo, Lewis. *Understanding Religious Conversion*. New Haven: Yale UP, 1993.
- Seaber, Luke. *G. K. Chesterton’s Literary Influence on George Orwell: A Surprising Irony*. New York: Edwin Mellen Press, 2012.
- Shakespeare, William. *The First Folio of Shakespeare*. Edited by Charlton Hinman, New York: W. W. Norton, 1968.
- Shelden, Michael. *Orwell: The Authorized Biography*. New York: Harper Collins, 1991.
- Sinclair, David. *Sir Gregor Macgregor and the Land That Never Was*. London: Headline Book Publishing, 2003.
- Shelley, Percy Bysshe. “Mont Blanc.” *Shelley’s Poems*, vol.1, introduction by A. H. Koszul, London: Dent, 1966, pp.183-87.
- Swift, Jonathan. *Gulliver’s Travels*. Edited by David Womersley, New York: Cambridge UP, 2012.
- Spender, Stephen. *World Within World*. London: Hamish Hamilton, 1951.
- Stansky, Peter and William Abrahams. *The Unknown Orwell*. London: Constable, 1972.
- The New Testament and the Apocrypha*. Edited by Gerald Hammond and Austin Busch,

- New York: W. W. Norton, 2012.
- The Oxford Book of War Poetry*. Edited by Jon Stallworthy, Oxford: Oxford UP, 1984.
- Thomas, Keith. *Man and the Natural World: Changing Attitudes in England 1500-1800*. London: Penguin Books, 1984.
- Voorhees, Richard. *The Paradox of George Orwell*. West Lafayette: Purdue UP, 1986.
- Wadhams, Stephen. *Remembering Orwell*. Ontario: Penguin Books Canada, 1984.
- Woodcock, George. *The Crystal Spirit: A Study of George Orwell*, Boston: Little, Brown, 1966.
- Wordsworth, William. *The Excursion: A Poem*. London: Edward Moxon, 1853.
- 今村楯夫『ヘミングウェイ—喪失から辺境を求めて』東京：冬樹社、1979.
- 上田和夫、渡辺利雄、海老根宏編『20世紀英語文学辞典』東京：研究社、2005.
- 海野弘『酒場の文化史』東京：講談社、2009.
- エンゲルス、フリードリヒ『イギリスにおける労働者階級の状態』上下、浜林正夫訳、東京：新日本出版社、2000.
- \_\_\_\_\_. カール・マルクス『マルクス・エンゲルス選集—共産党宣言』5巻、相原茂〔ほか〕訳、東京：新潮社、1969.
- オーウェル、ジョージ『カタロニア讃歌』橋口稔訳、東京：筑摩書房、1970.
- 小野協一『スペイン内戦をめぐる—イギリスの1930年代文学』東京：研究社、1980.
- カミュ、アルベール『反抗的人間』佐藤朔、白井浩司訳、東京：新潮社、1956.
- グレーヴィチ、アロン『歴史学の革新—「アナル」学派との対話』栗生沢猛夫、吉田俊則訳、東京：平凡社、1990.
- ゴフ、ジャック・ル『歴史と記憶』立川孝一訳、東京：法政大学出版局、1999.
- 佐藤義夫『オーウェル研究—ディーセンシィを求めて』東京：彩流社、2003.
- ザミャーチン、エヴゲーニイ『われら』川端香男里訳、東京：岩波書店、1992.

- シヴェルブシュ、ヴォルフガング『楽園・味覚・理性』福本義憲訳、東京：法政大学出版局、1988.
- 関静雄『ミュンヘン会談への道』京都：ミネルヴァ書房、2017.
- ソスキース、ジャネット『メタファーと宗教言語』小松加代子訳、町田：玉川大学出版部、1992.
- 寺崎弘昭『イギリス学校体罰史—「イーストボーン」の悲劇」とロック的構図』東京：東京大学出版会、2001.
- 照屋佳男『ジョージ・オーウェル—文学と政治』東京：行人社、1986.
- トマス、キース『歴史と文学—近代イギリス史論集』中島俊郎訳、東京：みすず書房、2001.
- トルストイ、レフ『トルストイ全集—戦争と平和』4-6巻、中村白葉訳、東京：河出書房新社1972.
- \_\_\_\_\_.『トルストイ全集—懺悔』14巻、中村融訳、東京：河出書房新社、1973、346-400頁.
- バーリン、アイザイア『歴史の必然性』生松敬三訳、東京：みすず書房、1966.
- ヒトラー、アドルフ『わが闘争』1-3巻、平野一郎、高柳茂訳、名古屋：黎明書房、1961.
- フィッシャー、ルイス『レーニン』猪木正道、進藤栄一訳、東京：筑摩書房、1988.
- フェスト、ヨアヒム『ヒトラー最期の12日間』鈴木直訳、東京：岩波書店、2005.
- 風呂本武敏『W・H・オーデンとその仲間たち—1930年代の英国詩ノート』京都：京都修学社、1996.
- ボニファス [ほか]『中世思想原典集成—カロリング・ルネサンス』6巻、梶山義男 [ほか] 訳、上智大学中世思想研究所編、東京：平凡社、1992.
- 宮本靖介『ジョージ・オーウェルの栄光と悲惨』東京：英宝社、1995.
- ランケ、レオポルト『歴史・政治論集』小林栄三郎訳、東京：千代田書房、1948.
- リッター、ゲルハルト『現代歴史叙述の問題性について』岸田達也訳、東京：創文社、1968.
- ルソー、ジャン・ジャック『ルソー—告白録』井上究一郎訳、阿部知二 [ほか] 編、東京：河

出書房新社、1980.

若松隆 [ほか] 『スペイン内戦と国際政治』 スペイン史学会編、東京：彩流社、1990.

## Abstract

### The Function of Instinct in the Works of George Orwell:

#### How did Orwell Try to Protect Decency?

This paper examines the workings of instinct in the books of George Orwell. He thought instinct is unconscious psychological pressure and the root of human behavior, so he tried to reveal the process in his works. The characters in his works act based on their 5 instincts: moral instinct, instinct to reveal the truth, instinct of self-preservation, instinct to become addicted to something, and instinct to judge. They put unconscious impulse by instinct before conscious thought by reason. Orwell tried to protect the moral sense of decency, in which he includes Christian ethics, liberalism, recognition of the natural human rights, and exercising moderation, in human mind and society, by means of making readers realize the psychology and the problems caused by instinct.

Firstly, Orwell described human behavior by moral instinct. In his novels, some characters can do good deeds unconsciously by following social norms. He continued to write tragedies and tried to show there is noble spirit which does not lose the worth even if it is defeated by evil in the end. In *Burmese Days* (1934), the protagonist John Flory asserts that he can create a warm family for Elizabeth Lackersteen. Although he is rejected by her and commits suicide, Orwell tried to show the fact that the existence of such



a noble spirit is certainly not meaningless.

Secondly, he described human behavior by instinct to reveal the truth. He thought people begin to ask the meaning of their lives when they spend a life with enough time, or face a moral dilemma. In *A Clergyman's Daughter* (1935) , the protagonist Dorothy Hare wandered around England by a dilemma about Christianity, and come to a decision that even if people don't believe in Christianity, they should follow old customs and go to a church because there are moral values in it. Like her feeling, Orwell thought modern people must maintain Christian moral values in their minds even if they don't have the faith.

Thirdly, he described human behavior by instinct of self-preservation. He confessed in 'Such, Such Were the Joys' (1952) that he began to realize the instinct through the hard school life in St Cyprian's School. He thought as people have the instinct naturally, most people cannot avoid suffering psychological trauma of their childhood. He thought conversion can heal the trauma like the ending of *Nineteen Eighty-Four* (1949) in which Winston Smith erases the memory of trauma by accepting the dogma of Big Brother. Orwell feared for the mentality after conversion because he thought a man could expose his natural cruelty by the feeling that "I was born again" and removing dissatisfaction.

Fourthly, he described human behavior by instinct to become addicted to something. He thought people look for something which can be an addiction when they face harsh realities. In the case of *Nineteen Eighty-Four*, Winston is addicted to drinking gin, having sex with Julia, showing his goodwill to his sympathizer O'Brien, and finally loving Big Brother to escape from the reality. Orwell described the risk of addiction, which people cannot stop by themselves even if they want to quit it. So he attached importance to moderation in life and politics. He had a thought of fatalism, and he thought people's lives were generally decided

by environment, so he wanted politics which creates an environment by which people can mature mentally and aren't led to addiction. In addition, Orwell thought people follow social norms unconsciously, and they are forced to do merciless acts which are built by the social norms. He realized acts based on even virtue can create atrocities because people have natural cruel dispositions in their minds, so he thought people need to resist them and avoid extreme thought and acts constantly by exercising moderation.

Finally, he described human behavior by instinct to judge. Orwell showed Winston's judgement based on his instinct turns out to be error-prone in *Nineteen Eighty-Four*. In addition, Orwell thought people need to do political movements while using clear words and conscious thought without depending on their unconscious instinct. In his essay 'The Lion and the Unicorn: Socialism and the English Genius' (1941) , he pointed out that modern politicians were acting based on their instinct, which they saw as a sound decision-making process, but in fact relying on their instincts had resulted in mistakes, and Orwell feared for the situation. Orwell thought today is the era of mechanization, so when people can do politics with conscious thought, machine is used for improvement of the people's life. Orwell thought machines can liberate people from hard work, and then people can enjoy a comfortable life and have inner peace of mind.

Orwell described how people's actions were affected by instinct, which can lead to a personal or social downfall as well as doing good deeds. By making people recognize the various works of instinct, he tried to protect the moral sense of decency in people's mind and society.